

靈界物語 第八〇卷 天祥地瑞 未の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第八十卷』天聲社

1980(昭和55)年05月05日 五版發行

附録に圖表が一枚あるがテキストでは再現できないので省略した。

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。
図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

言靈の活用 ことたまのくわつよう

第一篇 忍ヶ丘 しのぶがをか

第一章 獨り旅 ひとたび〔二〇〇五〕

第二章 行倒ゆきだふれ〔二〇〇六〕

第三章 復活ふくくわつ〔二〇〇七〕

第四章 姉妹婆しまいばば〔二〇〇八〕

第五章 三つ杯みつさかづき〔二〇〇九〕

第六章 秋野の旅あきのたび〔二〇一〇〕

第二篇 秋夜しうやの月つき

第七章 月見つきみヶ丘がをか〔二〇一一〕

第八章 月つきと闇やみ〔二〇一二〕

第九章 露つゆの路みち〔二〇一三〕

第一〇章 五乙女いつをとめ〔二〇一四〕

第十一章 火炎山くわえんざん〔二〇一五〕

第一二章 夜見還よみがへり〔二〇一六〕

- 第一三章 樹下の囁き〔二〇一七〕
 第一四章 報哭婆〔二〇一八〕
 第一五章 憤死〔二〇一九〕

第三篇 天地變遷

- 第一六章 火の湖〔二〇二〇〕
 第一七章 水火垣〔二〇二一〕
 第一八章 大舉出發〔二〇二二〕
 第一九章 笑譏怒泣〔二〇二三〕
 第二〇章 復命〔二〇二四〕
 第二一章 青木ヶ原〔二〇二五〕
 第二二章 迎への鳥船〔二〇二六〕
 第二三章 野火の壯觀〔二〇二七〕

序文
じよぶん

本卷は靈界物語の順次によれば第八十卷に相當し、天祥地瑞にては第八卷に當るなり。昭和九年七月三十一日口述を終る。今後未だ四十卷の口述あり、前途遠にして多忙なる口述者に取りては、中々の重荷なりと言ふべし。

本巻載する所の大要は、葭原の國土に棲息して惡事を爲す猛獸邪鬼を拂ひて、新しき國土を御樋代神の熱誠に由りて樹立し給ふ物語にして、趣味深きものなり。

漸くに八十の坂道越えにつつ

息つきにけり昭九の七月

昭和九年七月三十一日

舊六月二十日

於關東別院南風閣

出口王仁識

附録

君が代の國歌を、韻律の法則に由りて表示すれば左圖の如く、その母音が左右相對的に對照して居て、韻律の美なる事は、皇國日本の嚴正中立の精神を如實に表徴するものたるを知り得べし。

XXを中心に、同じ母音が對照せるを見るべし。

< 圖表省略 >

總説 言靈の活用

皇道に顯れたる神といふ意義に就ては四種の大區別がある。曰く幽の幽、曰く幽の顯、曰く顯の幽、曰く顯の顯、之なり。

而して幽の幽神は天之峰火夫の神以下皇典所載の天之御中主神及び別天神迄の稱號にして、幽の顯なる神は天照大神、神素盞鳴尊等の神位に坐します神靈を稱

するなり。天照大神、素盞鳴尊等は、幽の幽神の御水火より出生されたる體神

(現體)なるが故にして、尊貴極まりなき神格なり。

次に顯の幽なる神は大己貴命、少彦名命等の稱號にして、一旦地上の現界にその尊姿を顯現して顯實界を主宰し給ひたるが、定命盡きて神界に復活され幽體となられたる意義の稱號にして、菅公、楠公、豐公、其他の現人没後の神靈の稱號なり。

次に顯の顯なる神は則ち畏くも萬世一系の皇統を垂れさせ給ひて、世界に君臨し給ふ現人神に坐しまして、天津日繼天皇の御玉體に坐しませるなり。故に皇道日本國の神なる意義は頗る廣汎に亘りて、外國人の唱導する如き單純なる神にあらざるを知るべきなり。

凡て宇宙も、神も、萬物も、その大原は天之峰火夫の神即ち大宇宙の大極元の言靈幸はひ坐して成り出でませるなれば、實に至貴至尊なるものは此言靈をおきて何物も無しと知るべし。

著者は天祥地瑞末の卷を口述するに當り、一皇道言靈學上より見たる聲音の一

部ぶを略解りやくかいしおかむと欲ほつするなり。

ワ聲の言靈活用

ワ聲ごゑは、子ねの方面ほうめんに活用くわつようして「分わかれ去さる義ぎ」あり、北東ほくとうには活用はたらなく、東北とうほくに活用はた用らきて「子この世よ也なり」、東ひがしに活用はたらきて「親おやを省かへりみる也なり」、東南とうなんに活用はたらきて「人ひとの起おこ也なり」、南東なんとうに活用はたらきて「輪わとなり、一箇いつこの體たいとなり、また我身わがみの輪わとなり」、南みなみに活用はたらきて「締しめ寄よする言靈ことたまとなる」、また南西なんせいに活用はたらきて「ウアの結むすびとなり、世界せかいの輪わとなる也なり」、西南せいなんに活用はたらきて「物ものの起おこり也なり」、西にしに活用はたらきて「世よを知る初はじめとなり」、西北せいほくに活用はたらきて「遂つひに親おやの位くらゐを踐ふむ也なり」の言靈ことたまとなる。北西ほくせいに活用はたらきて「分わかれ出いづる也なり」の言靈ことたまあり、また「輪わは群類もろもろ也なり」「紋理あやの之起おこり也なり」「われを責せむる聲こゑにして、又またわめく聲こゑなり」「友ともに竝ならび居をり」「世よに涵つかり居をる也なり」「親おやなり子こなり」「順々じゆんじゆんに世よを保たもつなり」「生うまれ初そむるなり」「分子わけの形かたちなり」。斯かくの如ごとくにしてワ聲ごゑの言靈ことたまは世よに生いきて活用はたらくを知るべし。

ㄩ聲の言靈活用

ㄩ聲の言靈活用は、北に活用きて「解分け掌る意義なり」、北東に活用きて「劣り降る也」、別派の形也、「東北に活用きて「大氣の一條也、青也」、東に活用きて「長也、治也、教也、躍也」、東南に活用きて「形を使役爲す也」、東南に活用きて「シシモノナリ、食也」、南に活用きて「結而一となる言靈也」、南西に活用きて「ウオの結也、靈の緒也、靈魂脈管也」、西南に活用きて「自在に使役爲也」、西に活用きて「をめぐ聲、喚聲也、向ふものを緒を以て繋ぎ引寄する義なり」、西北に活用きて「生ふる也、生え出る也」、北西に活用きて「遠く至る所なり、息也」、また「男なり、陰莖也、居る也、己也、上命、下諾、唯唯也、尾なり、祭り守らしむ也、まつをれつく也、細長き形也、緒なり」等の言靈活用あり。

ウ聲の言靈活用

ウ聲は、北に活用きて「後に豊む義となり」、北東に活用きて「籠り据る也、据り見る也」、東北に活用きて「潤ふ也」、東に活用きて「謠ふ也、賣れる也、結び成り上る也」、東南に活用きて「失する也、疑ひ初むる也」、南東に活用きて「動き働く也、浮き出る也、上也」、南に活用きて「上に成り移る言靈となり、壽の所在也」、南西に活用きて「ワウの結也、生れ出る也」、西南に活用きて「子の働き也」、西に活用きて「生死を顯はす也、働移行飢也」、西北に活用きて「移る也、寫す也」、北西に活用きて「轉也、蛆蟲也」、また「心の結也、植ゑ立つる也、薄き也、倦む也、結び立つ也、中に立ち結ぶ也、心痛也、憂き也、醜き也」等の活用ある言靈なり。

工聲の言靈活用

工聲の活用は、北に活用きて「刺劇る義となり、また掘り行く也」、北東に活用きて「剥り返す也、片寄る也」、東北に活用きて「兼ね合ふ也」、東に活用きて

「事照り輝く也」、東南に活用きて「織り照らす也」、南東に活用きて「刺し込む所也、餌也」、南に活用きて「幸はひ進み玉ふ言靈也、又樂しむ所也」、南西に活用きて「ウエの結び也、恵み盛也」、西南に活用きて「保ち見る也」、西に活用きて「事を執る也」、西北に活用きて「含み思ふ也」、北西に活用きて「役也」、また「笑む也、腹中之眞也、乳垂る也、中腹に成就也、必ず出る也、黜陟之權有る也、尚く行く也」等の言靈妙用あるなり。

斗聲の言靈活用

斗聲の活用は、北に「移轉之中央を束ね居る義也」、北東に活用きて「前後、大小、上下、左右、新古、善惡、正邪、美醜、輕重、長短、好惡、内外等の對照的言義也」、東北に活用きて「三世を一貫する也、忽ち來り忽ち行く也」、東南に活用なし。南東に活用きて「呼吸也、不止居也」、南に活用きて「世に立ち盛る言靈也」、南西に活用きて「ワイの結び也、通ひ直居る也」、西南に活用きて

「何れ也」、西に活用して「靈魂脈管の全象也」、西北に活用きて「斗を以てイを知る也」、北西に活用きて「差別、往來、生死の類、一切の事皆悉く其中に立ちて兩端を釣り居る也」、また「三世の瀬戸也、壽也、呼吸之内也、今也、現在電光の機關也、枝葉無き也、流に立つ也、火の燈る形也、世の階段に立ち居る也、日ノ川也」等の言靈妙用ありと知るべし。凡て猪は一直線に走りて傍見を爲ざる性なり、また「猪首也、絲、蘭」等の言靈なり。

ヤ聲の言靈活用

ヤ聲の言靈は、北に活用きて「内を貫く義也」、北東に活用きて「宿る也」、東北に活用きて「遣る也」、東に活用きて「透明にして見えざる也」、經綸の形也、天に歸る也、指し難き也、東南に活用きて「天上より直射する光線也、指し込む也」、南東に活用きて「極て敏く見えざる也、屋也」、南に活用きて「外を覆ふ言靈也」、南西に活用きて「イアの結び也、重り騰る也」、西南に活用きて

「走り飛ぶ也」、西に活用きて「地球を親しく包裹し居る也、我を覆ひ渡りて常世の天を照し居る也、裏面の天地也」、西北に活用して「三つ重なる也、八つ也」、北西には活用無し。またヤの言靈には「矢也、焼也、透明體なる天中固有の紋理也、蒼洞也、先天の眞氣也、固有の大父也、親の謂也、左旋也、大輪の覆蓋也、居る也」等の言靈妙用ありと知るべし。

ヨ聲の言靈活用

ヨ聲の言靈は、北に活用きて「離れ散る也」、北東に活用きて「重なり下る也、分け散る也」、東北に活用きて「生而後知る所也」、東に活用きて「善美也、能く張り合ふ也、矢の道備ふ也、祖先億兆、子孫億兆、却々却を現在明らかに保ち居る也」、東南に活用きて「東西南北現はるる也」、南東に活用きて「必ず四間に成る也」、四ツに組む也、四ツ也」、南に活用きて「寄り結ぶ言靈也」、南西に活用きて「ヤオの結び也、天の下也、世の中也」、西南に活用きて「必ず正約存

なり、西に活用きて「螺旋備はる也、経緯に樋入る也、驚き呼ぶ聲也、ヨヨヨヨヨヨヨヨヨ也」、西北に活用きて「一極輪也、是をヨと言ふ也」、北西に活用きて「縦也、廢する也」、またヨ聲には「半也、呼び出す形也、寄り合ふ也、億兆の現在所也、漂ふ形也、（オヲ之棚引也）、天地火水纏まる形也、能く指令する也、オヲ既に起り備る時は、二二が四の方面必ず備り在る也」等の妙用あるべし。

二 聲の言靈活用

二 聲の言靈活用は、北に「指し集まる義也」、北東に「震り鎮むる也」、東北に活用きて「機氣の通は敏速也、電氣の類也」、東に活用きて「彼より是に伸び立ち來る也、搖蕩也」、東南に活用きて「釣合ふ力也、平均力の元也、床也」、南東に活用きて「湯の働き也、沸き返る也」、南に活用きて「起り行く言靈となり」、南西に活用きて「ヤウの結び也、行き通ふ也」、西に活用きて「幽顯也、

氣質相交換する也、寛に漂ふ也、西北に活用して「體質の通は寛慢也（ミノカヨヒ八寛也）、火脈、腺脈、流水の類也」、北西に活用して「ヤヨの現在なり」、また「天の結姿也、蒸騰る也、行き届く也、努力也、忌々也、往來爲也、總べ震る也、夢也、是より彼に到り見る也、是より彼を顧みる也、弓の活用也」、以上の妙用あるを知るべし。

工聲の言靈活用

工聲の言靈活用は、北に活用きて「本蔭る義となり」、北東に活用して「窄の動く也」、東北に活用きて「痿える也」、東に活用して「廉目立也、太大也」、東南に活用して「愛なり、能也」、南東に活用きて「頻りに集り來る也、上榮ゆる也、枝也」、南に活用して「末榮ゆる言靈也」、南西に活用して「幸の力也」、西南に活用して「工の登り也」、また工の言靈には「猶普き也、既に移轉也、編む也、えらむは撰の公なる也、ウウユル也、ウウエル也、飢也、悦び合ふ也、

戀れつく也」の活用あるなり。

イ聲の言靈活用

イ聲の言靈活用は、北に活用して「心動而不定義也」、北東に活用して「搖り定むる也」、考へ定むる也」、東北に活用して「遠く戀ひ行く也」、東に活用して「結び溜る也」、東南に活用して「矢の收る所なり」、南東に活用して「淪澱也、鎔に行き渡る也、身也」、南に活用して「身を定めて動かざる言靈活用也」、南西に活用して「ヤイの結び也、鑄定まる也」、西南に活用して「至り止る也」、西に活用して「九族一身の證也、指の名を兼持つ也」、西北に活用して「指の活用也」、北西に活用して「心也」、またイ聲の言靈活用には「天井也、遂に身に從ひ成る也、射中る也、心の形也、興り伸び立ち止る也、父の孫也、母の子也、親の心を稟け持つ也」等の妙用あるを知るべし。

第一篇 忍ヶ丘しのぶがをか

第一章 獨り旅ひとたび〔二〇〇五〕

人を喜ばせ、人を泣かせ、人を怒らせ、人を死なしめ、山野を滅盡し、大廈高樓を覆へして修羅の巷と世を化す魔物は、大三災の風水火ならずとも、小三災の飢病戦の災ならずとも、表面より見れば、さも美しく味はひよく、春陽の氣を四邊に漂はしむる戀愛そのものである。雲の上人も、農工商も、ルンペンも、禽獸蟲魚も、戀のためには、生命を賭して戦ふものである。

茲に水上山の館に、國土の司として鎮まれる艶男は、龍の島根にゆくりなくも救ひ上げられ、戀の嵐、愛の雨、情の礫に取りまかれ、不知不識に落城して、人面龍身の燕子花の戀に囚はれたるが、數多の女龍神等の羨望の的となり、龍の島ヶ根に居たたまらず、燕子花と謀し合はせ、月夜を幸ひ、竊かに龍の都の表門を

忍び出で、八尋鰐や水火土の神の舟に助けられ、水上山の父母の館に歸り、燕子花を妻となし、琴瑟相和して樂しき月日を送りけるが、好事魔多しとの譬に洩れず、龍の島根の女神、白萩、白菊、女郎花の三人は元の龍體と變じ、玉耶湖の波を渡りて、艶男の住まへる水上山の麓を流る大井川の對岸、藤ヶ丘に身を潛め、艶男の日夜の聲を聞きて樂しみ居たりけるが、茲に艶男の妻燕子花の子を生める苦しさに、元の龍體となりて玉の御子を抱き寝れるを垣間見され、その恐ろしき姿に仰天して、艶男は吾館に逃げ入りて震へ居たりける。

さて燕子花は、その淺ましき龍體を夫に見付けられしを恥ぢ、御子を産屋に残し置き、大井川の深淵に身を投じて淵の鬼となりけるを、妻の愛情忘れ難く、恐は怖はながら、戀しさ、悲しさ、大井の淵に舟を浮べて清遊を試むる折、白萩、白菊、女郎花の龍神の靈、燕子花の龍神と戀を争ひ、互に鎬を削りて、口を紅に染めけるが、艶男も堪りかね、忽ち淵に身を投じたるより、天地震動し、暴風吹き起り、大雨頻りに臻り、忽ち暗黒界と化し、水上山の聖場は修羅の巷となりける。

國津神は嘆き悲しみ、阿鼻叫喚の地獄を現出したる折もあれ、御空の雲を分け
て悠然と水上山の頂上さして、御樋代神なる朝霧比女の神は、四柱の侍神を従へ
降りまし、嚴の言靈を宣り上げて、天變地異の慘状をしづめたまひて、天國淨土
を築かせたまひ、艶男と燕子花との中に生れたる嬰兒の龍彦が成人するまで、子
心比女の神に托し給ひ、世繼の御子を失ひし老夫婦を退隱せしめ、重臣の巖ヶ根
をして、龍彦の成人まで國務を預らしめ置きて、茲に朝霧比女の神は從神と共に
生言靈の雲を起し、遙かの空に聳ゆる高光山の東面に御宮居を定め、永遠に此國
土に君臨せむと出でさせ給ひける。

跡に残りし巖ヶ根は、御樋代神の神言畏み、老いたる君に仕へつつ、豫讚の國
をして至治泰平の世となし、老身夫婦の心を慰め、御樋代神の恩命に報いむとし
て、朝な夕な神を祈り、國津神を愛み、以て國務に餘念なかりける。

水上山より以東約十餘里の地點は、山神彦の力によりて開拓され、國津神等も
心を安んじて耕作の業に従事し居たれども、高光山の山麓までは約三百里までの
遠距離あり。而して高光山以西は御樋代神の御命令に依り、水上山の國館の執政

巖ヶ根は、如何にもして開拓せむと日夜焦慮しつつありける。この巖ヶ根は意外の子福者にして、春男、夏男、秋男、冬男の四柱の男子を持ち、何れも一人世に立つまでの成年者なりける。

葭原の國土は其名の如く地上一面葭草に充たされ、其間に水奔草なるもの發生し、黄色き花を開き、外面より見れば實に、美しき花なれども、其花に葉に莖に強き毒を含みて、之に觸るるものあれば、何れも其毒に中り、忽ち生命を落すが故に、國津神等も禽獸蟲魚も、其難を恐れて廣き原野に棲むものなかりけり。只生命を保ち得るものは、甲羅のある鰐に似たる怪獸と蛇と蜈蚣を混同したる如きイチチといふ爬蟲族の棲みて、あらゆる人畜に害を與へれば、國津神の住むに應はず、開拓の始めより葭草や水奔草の茂るに任せありけるが、その物凄きこと言語に絶せり。

巖ヶ根は此荒地を開拓すべく、先づ第四男の冬男をして冒險的旅行を爲さしめ、高光山の頂上に遣はしにける。冬男は只一人父の命を奉じ、雄心勃勃として際限なき原野を開拓せむと、先づ第一着手として國形を視察せむと、全身を皮衣に固

め、水奔草の生ひ茂る中を勇往邁進せるが、一つの廣き低き丘山に突き當りける。此處には數多の國津神が彼方此方に穴を穿ちて住居し、稍廣き村落をなしけるが、何れも生きたる人間にあらず、水奔草の毒に中りて生命を失ひし水奔鬼といふ幽靈の集團なりける。斯かることは露知らぬ冬男は、此丘にたどりつき、とある小さき家に立寄り、一夜の宿を乞はむと門に立ちて訪ふ。

㊦ 醜草の生ひ茂りたる荒野越えて

來りしものよ一夜の

露の宿りを許せかし

吾こそは水上山の神館に

時の執政巖ヶ根が

四男と生れし冬男なり

此の國原を開拓かむと

父の御言をかがふりて

毒草茂る荒野越え
高光山の聖場に
進まむ道を黄昏れぬ
一夜の宿り許せよ

と歌へば、屋内より年老いたる白髪異様の婆、跛曳き曳き門口に立ち現はれ、

國津神吾は笑ひといふ婆ア
おかまひなくば宿らせ給へ
アハハハ吾はをかしき癖ありて
人の顔さへ見れば笑ふも。

イヒヒヒヒ

ウフフフフ

エへへへへ

オホホホホ

をかしやをかしやおもしろや

この婆ばば久ひさしくここに棲すみなれて

神代かみよの事こともことごとく

つぶさに知しれり一夜ひとよは

いふも愚おろかや三日みか五日いつか

十日とをか二十日はつかもかまはずに

留とどまり給たまへ吾家わがいえは

穢きたなけれども奥おく廣ひろし

玉たまをあざむくまな娘むすめ

山やま、川かは、海うみの三人みたり持ち

いと安やすらかに暮くらすなり

先まづ先まづ奥おくへ進すすませ給たまへ

アハハハハ

イヒヒヒヒ

ウフフフフ

エへへへへ

オホホホホ

あな面白おもしろや、あなをかしやな□

と言いひつつ、婆ばばは腹はらを抱かかへ大地だいちにのた打ち廻まはりて、をかしさに堪たへかぬるもの
如ごとし。

冬ふゆ男をとこは婆ばばの勸すすめによつて、奥おく深ふかく進すすみ入いれば、容よう色しよく端たん麗れいなる二に八はちの乙をとめ女さん三さん人にん、
笑ゑみを湛たたへて愛あい想さうよく出いで迎むかへ、

君きみこそは水みな上かみの山やまの聖せい場ぢやうより

來りし神か雄々しき姿よ
『

と先づ姉の「山」が歌へば、次なる妹の「川」は其後をついで、

『 美しき大丈夫なるよその眼
まなこ

その顔は月に似たるも

夜な夜なに吾夢に見し艶人は

君の姿によく似ましけり

この丘に朝夕住みてなつかしの

君の出でまし待ちわびしはや

君こそは吾背の君と定まりし

此村里の司にますぞや
『

海は歌ふ。

姉妹が今か今かと待ちわびし
美しい君に會ひにけるかな
此里に出でます上は元津國に
歸しはやらじあきらめ給はれ

冬男は怪訝な顔をしながら歌ふ。

あやしかることを聞くかな吾は今
國土開拓かむと進み來るを
一夜の宿りを乞ひて明日は早く
高光山に旅行く身なるよ
美しい三人乙女に止められて
吾魂はをののきにけり

山は歌ふ。

怪しきはうべなり戀のくせものに

とりかこまれし君にありせば

醜草の野路を涉りて來し君は

再び御國に歸り得ざらむ

如何程に藻掻き給ふも三人の吾等

如何で許さむ明日の旅出を

冬男は歌ふ。

御樋代の神の神言を畏みて

國形見むと來りし吾なり

なまめかしき三人の女の言の葉に

留とどまるべしやは國津神くにつかみ吾われは』

川かはは歌うたふ。

㊦ 吾わが姉あねの宣のる言ことの葉はをいなみまさむ

君きみに力ちからの如いか何かであるべき

戀こひすてふ心こころをもたぬ大丈夫ますらをは

木石ぼくせきに似にて醜しこのたぶれよ

此里このさとは寢ねたびの里さとよ村人むらびとは

如何いかで君きみをば安やすく歸かへさむ』

冬男ふゆをは歌うたふ。

㊦ おそろしき醜草原しこぐさはらを過すぎて來こし

吾は再び女になやむかも
『

海は歌ふ。

道の邊の水奔草のわざはひに
かからせ給ふ君と知らずや
』

冬男は歌ふ。

皮衣着つつ過ぎ來し吾なれば
如何で生命にかかはりあるべき
』

斯く歌ふ折しも、以前の笑ひ婆は跛曳き曳き奥に入り來り、

☐ 三人の娘の力に及ばずば
吾何處までも許さざるべし。

ハハハハハ

イヒヒヒヒ

さもいぢらしき男かな

と言ひつつ再び表をさして出でて行く。冬男は終日の旅行に身體繩の如く疲れ、グツタリと其場に伏しけるが、三人の乙女は、頭邊に、足の邊に、腰の邊に、喰ひつく様にして、何かひそひそ呪文の如きものを唱へ居たりき。夜は深々と更け渡り、此の丘の邊に棲む禽獸蟲魚の怪しき聲は、四邊の闇をさいて次第々々に高まり来る。

(昭和九・七・二六 舊六・一五 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

第二章 行倒〔二〇〇六〕

水奔草の生ひ茂る
野路を逢々涉りつつ

廣き丘邊に突き當り
息休めむと上りある

頃しも空は黄昏れて
ぼやぼやぼやと生温き

風は腮邊をいやらしく
なめてゆくなりこの丘の

ふとある藁屋に立ち寄れば
中より出でし白髪はくはつの

婆さんは笑みを湛へつつ
門の戸近く佇めり

冬男は疲れし聲をあげ
われは旅ゆくものなるぞ

一夜の露の宿りをば
許させ給へといひければ

婆さんはにつこと打ち笑ひ
わたしは「笑ひ」といふ婆よ

サアサア御泊りなさいませ
アハハハツハ、イヒヒヒヒ

ウフフフツツ、エへへへへ
オホホホツホ面白や

あなをかしやと轉ころび伏ふす あやしき婆ばばに目めもやらず

神かみを念ねんじて居ゐたる折をり 婆ばばはむつくと起おき上あがり

三人みたり乙女をとめが奥おくに待まつ 早はやく通とほさせ給たまへよと

いふより冬男ふゆをは奥おくの間まに 疲つかれし足あしを引ひきずりて

進すすめば不ふ思議しぎや三人さんにんの 玉たまを欺あざむく乙女をとめ等らが

冬男ふゆをの顔かほを打うち眺ながめ 甘あまき言こと葉ばを竝ならべたて

此處ここに來きませし上うへからは 元津御國もとつみくにへ歸かへさじと

各自おののおのに論あげつらひ 戀こひの征そ矢やをば放はなちける

冬男ふゆをは身しん體たいくたぶれて 前ぜん後ごも知しらず寢いねければ

山やま、川かは、海うみの三乙女みつをとめは 冬男ふゆをの全ぜん身しんを撫なでさすり

喋て々ふ喃なん々なん夜よを明あかし 一いち夜やの夢ゆめは覺さめにける

冬男ふゆをは眼まなこをこすりつつ 臥床ふしどを起おき出いで眺ながむれば

三人みたりの乙女をとめはにこやかに 笑ゑみを湛たたへて居ゐたりける

冬男ふゆをはこれの光景くわつけいを 怪あやしみながら問とひけらく

「われは旅行にくたぶれて 一夜の宿を願ひしが

邊りの空氣は何となく 心に染まぬけはひなり

これの主とおぼえたる 婆さんはしきりに笑ふなり

それに引き替へあでやかな 乙女三人がわが側に

甘き言葉を繰り返し われに迫るは何事ぞ

高光山の聖場に 神の御言をかがふりて

進まむわれよ一時も 早くこの場を立ち出でて

任のまにまに進むべし

語れば三人の乙女等は 頸を左右に振りながら

「日頃焦れて待ち居たる 君の來りし今日こそは

如何でたやすく歸さむや 先づ先づお茶を召し上れ

われ等が勧むる茶の湯こそ 不老と不死の妙薬ぞ

この湯を飲めば忽ちに 汝の心は爽かに

疲れも清く治まらむ

と言ひつつ姉娘の山は、木製の椀に湯を汲み、冬男の前に差しけるにぞ、一日の疲れに喉の乾きたる冬男は、何を考ふる暇もなく、貪る如くグツと飲み下せば、その味はひ何となく香ばしけれど臭みあり。若しや水奔草の葉もて作りたる茶には非ずやと、一時は驚きけるが、何喰はぬ體を装ひ、天を拜し地を拜し、聲を限り、

一二三四五六七八九十百千萬

千萬の神救はせ給へ

と生言靈を宣るや、忽ち家も、笑ひ婆も、三人の娘も、あとかたなく煙と消え失せ、白樺の木が疎に、雑草の萌ゆる丘の上なりける。

冬男は今更の如く驚き、生言靈の天の數歌をうたひながら、再び葎草や水奔草の所狭きまで生ひ茂れる濕つばい平原を、皮衣を力に進みゆく。冬男は道々歌ふ。

ああ訝いぶかしや訝いぶかしや

日ひも黄昏たそがれて漸やうやくに

一ひとつの丘をかにたどりつき

形かたちばかりのあばら家やの

表おもてに立たちて訪おもたへば

中なかより白髪しらがの笑わらひ婆ばば

現あらはれ來きたり一ひと夜よさの

宿やどりを許ゆるしたりければ

旅たびの疲つかれを休やすめむと

奥おくの間まさして進すすみ入いり

三み人たりのあやしき乙女をとめ等に

種いろ々いろ様さま々さまくどかれて

知しらず知しらずに眠ねむりしが

邊あたりの空く氣うきの不ふ快くわいさに

いぶかる折しも夜は明けて

近くに聞ゆる鳥の聲

乙女の勧むる茶を飲めば

益々氣分悪しくなり

若しや毒湯に非ずやと

御空を拜し地を拜し

天の數歌宣りつれば

婆さんも娘も其家も

煙となりて消え果てし

あとをよくよく眺むれば

雑草生ふる白樺の

林と知るより驚きて

忍ヶ丘を逃げ下り

再び東に向ふなり

長途ちやうとの旅たびに喉乾のどかわき

水みづを飲のまむと思おもへども

水奔草すいほんさつの毒氣どくきをば

含ふくめる池いけ水みづ川かは水みづは

われ等らが口くちに入いるよしも

なくなく進すすむ長ながの野路のぢ

何なんと詮術せむすべなかりけり

頭あたまは痛いたみ足あしだるみ

勢せい力りよく頓とみに衰おとろへて

わが目めの光ひかりつぎつぎに

うすれ行ゆくこそ悲かなしけれ

夜前やぜんの女をんなは正まさしくや

水奔鬼すいほんきには非あらざるか

思おもへば思おもへばいぶかしや
『

と歌うたひつつ進すすみ行ゆけば、又またもや小ちひさき丘をか、行ゆく手に横よこたはるを見みる。冬ふゆ男をとは兔とも角かく
も其その丘をかにたどりつき、水みづでもあらば、喉のどを潤うるほし息いきを休やすめむと、疲つかれし身からだ體だに勇ゆう
氣きを鼓こして、其その日ひの黄たそが昏がる頃ころ、小ちひさき丘をかの邊へに着つきたり。
冬ふゆ男をとは聲こゑ細ほそ々と歌うたふ。

あへぎあへぎ醜しこくさ草お生おふる野のを涉わたり

漸やうぢくこれの丘をかに着つきぬる

この丘をかに眞まし清しみづ水づあれば乾かわきたる

喉のどうるほして蘇よみがへらむを

眞まし清しみづ水づはよし湧わくとても黄たそが昏がの

道みちなき野の路ぢをさがすよしなし

あやしかる女をみなに毒どく茶ちやを飲のまされて

われは死しぬより苦くるしき宵よひなり

刻こく々にわが身からだ體だははれ上あがり

身動きならぬ今となりけり

常世ゆく闇の荒野に只一人

われは悲しくもだえ居るなり

故郷を思へば戀し父母を

思へば悲し旅の夕暮

只一人旅ゆくわれの淋しさは

野山の奥に住む心地なり

玉の緒の生命きれなば如何にせむ

わが故郷にしらす由なく

言靈の嚴の力に救はれて

生命からがら逃げ來つるかも

此處に來て露の生命の消ゆるかと

思へば淋しき吾身なるかも

水奔鬼の集へる丘に一夜寝て

玉たまの生命いのちを縮ちぢめたりけり㊦

かく歌うたふ折をりしも、

㊦
アハハハハハ

イヒヒヒヒ

ウフフフフ

エヘヘヘヘ

われこそは忍しのヶ丘がをかの笑わらひ婆ばばよ

よくも此こ處こまで逃にげ來きつるかな

この婆ばばは人ひとの艱なやみを見みて笑わらふ

黄泉よもつの國くにの笑わらひ婆ばばぞや

身も魂も疲れ果てたる汝が態

見るにつけても可笑しくぞある

われこそは笑ひの婆よ世の人の

まめやかなるを朝夕ねたむ

三人の娘を汝は見たるべし

あれは毒茶に見亡せし女よ

玉の緒の生命きれなむこの間に

わが夫となる約束をせよ

この婆はきたなく見ゆれど魂は

玉の如くに輝き居るぞや

わが言葉諾ふなれば今よりは

玉の生命を安く生かさむ

と、いやらしき聲を張上げながら、闇の中にハツと姿を現はした。瀕死の境にあ

る冬男は、婆の罨にかかりし残念さに、齒を喰ひしばりながら息もきれぎれに歌ふ。

わが生命たとへ死すとも汝が如き

きたなき婆に従ふべきやは

身體はよし罷るとも靈魂は

生きて汝を苦しめて見む

水上の貴の館に生れたる

われは正しき國津神ぞや

汝こそは音に聞くなる水奔鬼の

幽霊婆よとく此處を去れ

婆は耳まで裂けた眞青の口を開き、牛の如き舌を吐き出しながら、

ガハハハハツハ、ギヒヒヒヒ、グフフフツフ、ゲヘヘヘヘ、ギヨホホホツ

ホ、てもさてもいぢらしい腰抜け野郎ども、この方が計略にかかり、大事の大事の玉の生命の安賣致したウツソリども、嫌なら嫌でもう頼まぬ。ギヤハハハハハ、忍ヶ丘につれ歸り、一族郎黨呼び集め、汝が亡きあとの靈魂の生命を再び取り上げて、恨みを晴らさでおくものか、ギヤハハハハハ、てもさても心地よやな』
冬男は無念の齒を喰ひしぱりながら、

『わが生命如何になるとも汝の如き

悪魔に靡くわれには非ず

吾も亦鬼と生れて汝等が

生命を奪ひなやめてくれむ

葭原の國土の秀でて勝れたる

水上山の王の息子ぞ

汝が如きいやしき鬼の果てならず

われには嚴の力ありけり』

かく歌うたひながら息いきも絶たえ絶たえに、其場そのばに打伏うちふしたるまま身み亡うせにける。

(昭和九・七・二六 舊六・一五 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第三章 復活〔二〇〇七〕

笑わらひ婆ばばアの計略けいりやくに かりて遂つひに生命いのちをば

落おとせし冬男ふゆをの亡骸なきがらを 眺ながめて婆ばばアはからからと

打うち笑わらひつつ牛うしのよな 長ながき舌したをば吐はき出いだし

アハハハハツハ、イヒヒヒヒ ウフフフツフ、エへへへへ

オホホホツホ面白おもしろや 心地こちよやなと言いひながら

冬男ふゆをが靈魂みたまと身體からだを 茨いばらの鞭むちもて打うち叩たたき

虐しひたげければ疲つかれたる 冬男ふゆをは悲鳴ひめいをあげながら

助けてくれよと叫ぶ折
忽ち起る暴風雨

雷轟きいなづまは
天地に閃き渡りつつ

闇の中より現はれし
鬼をあざむく荒男

二人は此處に立ち出でて
婆の素つ首ひつつかみ

大地にどつと投げつける
投げつけられて笑ひ婆

顎を三つ四つしやくりつつ
アハハハツハちよございな

貴様も俺の計略に
かかりて身亡せし熊公と

虎公の餓鬼にあらざるや
清水ヶ丘の森林に

魍魎となりて彷徨ふか
さつてもさても心地よや

その有様は何の事
着物はちぎれ帯は切れ

頭は鳶の巣籠りか
手足は松の荒皮か

見るもいぶせき姿かな
この婆アさまに手向ふて

後で後悔致すなよ
生命知らずの餓鬼どもと

無性矢鱈に罵れば
熊公、虎公の精靈は

烈火の如く憤り

鬼の蕨（拳）を固めつつ

倒れし婆を左右より

力限りに打ち据ゆる

婆アはひるむと思ひきや

またカラカラと打ち笑ひ

長き舌をばはみ出して

顎をしゃくれる憎らしさ

よくよく見れば兩人の

拳は爛れて血は流れ

見るかげもなき惨状に

婆アはまたまた笑ひつつ

熊公、虎公の盲ども

俺の體は此處にある

貴様は尖つた巖角を

無性矢鱈に打ち叩き

拳を痛む向ふ見ず

もうこれからは馬鹿な事

致すとのまま置かぬぞや

忍ヶ丘に名も高き

笑ひ婆さんに敵對ふて

幽冥界に居れるかと

口汚なくも罵りぬ

虎公、熊公怒り立ち

婆の兩手を左右より

力限りに引つぱれば

さすがの婆も辟易し

こりやたまらぬと顔しかめ

火團くわだんとなりて驀地まつしげら

遙はるかの空そらを驅かけながら

忍しのぶヶ丘がをへと逃にげ歸かへる

冬男ふゆをはやうやう起おき上あり

やつと心こころも落おちつきて

邊あたりを見みればこは不ふ思議しぎ

水上みなかみの山やまに仕つかへたる

わが家いへ臣のこの熊公くまこうと

虎公とらこう二人ふたりがにこやかに

わが顔がん前ぜんに跪ひざまづき

若君わかぎみ御無事ごぶじと言いひながら

涙なみだ垂たらして拜をがみゐる。

以下い精靈せいれいの言葉ことばなり。

冬男ふゆを 草枕くさまくら旅たびを重かさねてゆくりなく

此丘このをかの邊へに身み亡うせけるかな

幽界かくりよの神かみとなりてゆ何故なにゆゑか

わが身みは輕かるくなりにけらしな

汝なれこそは水上みなかみの山やまに仕つかへたる

家臣熊公、虎公ならずや」

熊公くまこう「忍ヶ丘笑ひ婆アに謀られて
生命亡せにし熊公なりける」

虎公とらこう「われもまた笑ひの婆に謀られ

毒茶を飲みて亡せし虎公よ

若君の精靈危く見えしより

笑ひ婆アに手向ひにける

昔よりこれの大野に彷徨へる

心汚なき婆にてありける

忍ヶ丘に住む精靈は悉く

笑ひ婆アに殺されしものぞ

われらまた國土開かむと巖ケ根の

君の命の仰せに出て來し

漸くに忍ケ丘に辿りつき

水奔草の茶に倒されぬ

此恨みいつの世にかは晴らさむと

熊公とともに時を待ち居し

冬男は歌ふ。

ゆくりなくも家臣二人に出會ひたる

われはにはかに心勇むも

汝が行方父は日夜に探ねつつ

如何なりしと煩ひしはや

ちちのみの父の御言を被りて
國土開かむと吾は來つるも
われもまた笑ひ婆アの偽りに
現身の生命捨てにけらしな

熊公は歌ふ。

かくならば主従三人村肝の
心協せて婆亡ぼさむか
一筋や二筋繩に行かぬ婆よ
如何なる手段も先に知るれば
さりながら二つの腕を痛めたる
これの刹那に亡ぼしてくれむ

冬男は歌ふ。

□ 面白しああ勇ましも國津神の

生命を奪ふ仇亡ぼさむ

水奔鬼の頭と誇れる笑ひ婆

みたまの生命取らで置くべき

笑ひ婆の生命をとりて國津神の

百の災除かむと思ふ

虎公 □ 若君の御言葉うべよ吾もまた

婆アの征討に力を添へむ

三柱の大丈夫力を協せなば

婆亡ぼすはたやすかるべし

いざさらば清水ヶ丘を立ち出でて

婆の館にひたに進まむ

と茲に三人は協議一決し、再び水奔草の所狭きまで生ひ茂る野路を傳ひて、婆の棲處なる忍ヶ丘を指して進み行く。

熊公は先頭に、冬男は中に、虎公は殿をつとめながら、葎草と水奔草の所狭きまで茂れる野路を、吹く風になぶられながら、精靈の常として、ひよろりひよろりと征服歌を歌ひつつ進み行く。

熊公の歌。

ああ勇ましや勇ましや

大野ヶ原の真中に

廣くて低く開けたる

忍ヶ丘の頂上に

古く棲みたる笑ひ婆ふるす わらば
國津神らの生命をばくにつかみ いのち
とりて樂しむ曲津見をたの まがつみ
征討め拂ふと出でて行くきた はら い
今日は心も勇むなりけふ こころ いさ
吹き來る風はなまぐさくふく かぜ
イヂチは數多すむとてもあまた
毒蟲むらがり來るともどくむし きた
何か恐れむ吾々はなに おそ われわれ
世にも稀なる荒男よ まれ あらをとこ
現世界に在りし日はうつしせかい あ
古今無雙の豪傑とここんむさつ がうけつ
世に聞えたるつはものぞよ きこ
如何に精靈なればとていか せいれい

魂たまの力ちからは衰おとろへじ

婆ばばアも同おなじ精せい霊れいの

みたまなりせば吾われ々われは

如何いかで恐おそれむ大ま丈す夫らの

彌や猛たけ心こころの拳こぶしもて

彼かれが首かづくを打うち叩たたき

現げん幽いう二にかい界わの災わざはひを

拂はらひて幽いう冥めいの神かみとなり

長ながく其その名なを傳つたふべし

ああ面おも白しろや面おも白しろや

日ひ頃ころの恨うらみを晴はらすべき

時ときは漸やうく廻めぐりけり

忍しのヶ丘がは廣ひろくとも

水すい奔ほん草さうは茂しげくとも

敵は數々來るとも
吾等は恐れじ水上の
山に鎮まる神々の
恵を浴びて進むべし
ああ面白や勇ましや
仇を報ずる今や時
婆を亡ぼす今や時
幸ひ闇の深ければ
さすがの婆もわが行くを
知らずに眠り居るならむ
左右の腕は兩人の
強き力にむしられて
なやみ苦しむその隙を
狙つてつけ入る計略

進すすめや進すすめ、いざ進すすめ
笑わらひ婆ばばアの亡ほろぶまで
」

冬ふゆ男をは歌うたふ。

㌿ 大おほ野の原はらいゆく旅たび人びと悉ごとく

謀はかり殺ころせし婆ばばは憎にくらし

われもまた婆ばばの毒どく手しゆに誘いざなはれ

玉たまの生いのち命を奪うばはれにける

精せい靈れいの生いのち命はあれど現うつ身そみの

生いのち命は最も早はや故こ郷くにに歸かへれず

かくならば三み人たりが心こころ一いつにして

笑わらひ婆ばばアを亡ほろぼしくれむ

村むら肝きもの心こころ配くばりて進すすめかし

婆ばばアの手て下した道みちにし待まてば

ゆくりなく忍しのぶヶ丘がをかの鬼おに婆ばばに

茶ちやをふれまはれ謀はからはれける

三人さんにんの貴うづの乙をとめ女めも鬼おに婆ばばの

毒どく手しゆにかかりて亡うせしなるらむ

三人さんにんの乙をとめ女めの生いのち命すく救すくひつつ

忍しのぶヶ丘がをかの闇やみを照てらさむ
㊦

虎とら公こうは殿しんがりをつとめながら歌うたふ。

㊦
天地あめつちの

岩いは戸と開ひらくる時ときは來きぬ

百もも千ちぢ々の

恨つらみを晴はらす時ときは今いま

もろもろの

なやみをやらふ時は來ぬ

水上山の神館

王の君に仕へたる

心も固き巖ヶ根の

御子と生れます若君に

仕へ奉りて進み行くも

天地の神の御恵か

清水ヶ丘に年月を

恨みの鬼となりはてて

婆アの生命を窺ひし

その甲斐ありて今吾は

強き力に押されつつ

進み行くこそ勇ましき

ああ吾は

若君の如旅行きて

笑ひ婆アにたばかられ

生命とられし落武者よ

これの恨みを晴らさむと

熊公と共に年月を

清水ヶ丘に暮したり

いよいよ時は満ちにけり

いよいよ婆アを征討むべき

よき日となりぬ勇ましや

吾精靈の身ながらも

何かは知らずいと強き

力添はりし心地して

大野ヶ原を進み行く

幸さいひ空そらに月つきもなく
星ほしかげもなき闇やみの夜よの
今け日の出いで立たち面白おもし
年とし月つき重かさね恨うらみたる
笑わらひ婆ばばアの目めの前まへに
恨うらみ晴はらすと思おもへば嬉うれしき
」

斯かく歌うたひながら、眞ま夜よ中なか頃ころ三さん人にんの精せい靈れいは、忍しのヶ丘がの笑わらひ婆ばばの家いへの表おもてに着つきにけ
る。

三さん人にんは破やぶれ戸どの外そとにそつと佇たたずみ、内うちの様やう子すを窺うかがへば、婆ばばは兩り手やうてのむしれるばか
り二ふた人たりに引ひかれたる痛いたみに、靈たま魂しひも斷きれむばかり苦くるしみ悶もたえ、うんうんと呻うめ吟きの
聲こゑをあげ居ゐたり。三さん人にんの乙をと女めはとよく見みれば、こはそも如何いかに、介かい抱はうなし居ゐるや
と思おもひきや、婆ばばの二に代だい目めの如ごとく、

アハハハハツハ、イヒヒヒヒ

ウフフフフツフ、エへへへへ

オホホホホツホ面白おもしろや

主あるじの笑わらひ婆ばアさんは

あまりの我がしふ執つよが強つよくして

數かず限かぎりなく人命じんめいを

奪うばひて忍しのぶの里さとをつくり

司つかさとなりて居ゐたりしが

最も早はや天てん運うんつきけるか

昨さく夜や泊とまりし水みな上かみの山やまの

冬ふゆ男をと言いへる大ま丈す夫らに

うまく此この場ばを逃にげられて

その無む念ねんさに地ぢ團だん駄だを

踏ふみつつ後あとを追おひかけて

清水ヶ丘に辿りつき

不覺をとりて逃げ歸り

左右の手足をむしられて

身動きならず苦しめる

此の有様は何事ぞ

われら三人の乙女らも

笑ひ婆さんに謀られて

遂に幽冥の鬼となり

戀しき父母の家にさへ

歸るよしなきみじめさよ

この恨み

いつかは晴らしくれむぞと

當なき事を頼みつつ

待ちし月日の甲斐ありて

今日けふは嬉うれしき鬼婆おにばばの

早はやくも知ち死期しごとなりけり

ああ面白おもしろや、たのもしや

笑わらひ婆ばさんの蘇よみがへる

ためしは最も早はやあらざらめ

天てん落おち地つちは割わるとも

婆ばさんの再ふたび蘇よみがへる

ためしはあらし今いまの間まに

婆ばさんの寝首ねくびを押おさへつけ

かよわき乙女をとめの身みながらも

日頃ひごろの恨うらみ晴はらすべし

ああ面白おもしろし、たのもしし

アハハハハツハ、イヒヒヒヒ

ウフフフツフ、エヘヘヘヘ

オホホホツホ面白し^{おもしろ}」

と歌^{うた}ひつ笑^{わら}ひつ、三人^{さんにん}は枕^{まくら}邊^へに立^たつて居^ゐる。笑^{わら}ひ婆^{ばば}は怒^{いか}り心^{しん}頭^{とう}に達^{たつ}すれど、最^も早^{はや}びくとも動^{うご}かぬ此^{この}場^ば合^{あひ}、煮^たいて喰^{くら}ふと焼^やいて食^くはうと、三^み人^{たり}乙^{をと}女^めの手^ての中^{うち}にあるを^し知^ゆる故^{ゆゑ}に、狡^{かう}猾^{くわつ}なる婆^{ばば}は聞^きえぬ振^{ふり}を装^{よそほ}ひ、痛^{いた}さを耐^{こら}へて笑^{わら}ひにまぎらし居^ゐたりける。

(昭和九・七・二六 舊六・一五 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

第四章 姉妹婆^{しまいばば} (二〇〇八)

忍^{しの}ヶ丘^{ぶがをか}の笑^{わら}ひ婆^{ばば}が破^{やぶ}れ家^やの外^{そと}に立^たちて、様^{やう}子^すをうかがひ居^ゐたる冬^{ふゆ}男^を、熊^{くま}公^{こう}、虎^{とら}公^{こう}の三^{さん}つ精^{せい}靈^{れい}は、時^{とき}こそよしと進^{すす}み寄^よれば、やや驚^{おどろ}きの色^{いろ}を見^みせながら、身^み動^{うご}きなならぬ苦^{くる}しさに、アハハハハ、イヒヒヒヒとかすかに笑^{わら}ひ、目^めを怒^{いか}らせ、三^{さん}男^{なん}

三女さんぢよの顔かほを見上みあげて居ゐる。

冬男ふゆをはこの體ていを見みて、

ささきの日ひに吾苦われくるしめし報むくいにて

このありさまは何事なにごとなるかも

笑わらひ婆思ばおもひ知しりしや天地あめつちの

神かみのいましめ今いまあらはれぬ

神々かみがみは熊くまと虎とらとの腕うでをかり

汝なれが兩手りやうてを引き抜ぬかせたり

兩腕りやうては體からだにつける如ごと見みゆるとも

その關節くわんせつは抜ぬけてありけり

いぢらしと思おもへど詮せんなし笑わらひ婆ばの

靈魂たまの生命いのちを斷たたねばおかじ

國津神くにつかみの數多あまたの生命いのち奪うばひたる

婆ばばアの最後さいごのあはれなるかな
精せい霊れいの生命いのちすてたる其その後のちは

行ゆくべき所ところあらしと思おもふ

この丘をかに毒どく茶ちやを進すすめし鬼おに婆ばばの

みたまの果はてぞあはれなるかな

しつこくも清しみづ水づヶ丘をかまで追おひ来きたり

熊くまと虎とらとにいためられける

斯かくならば婆ばばよ心こころをあらためて

神かみの助たすけを直ただにうくべし
㊦

婆ばばは呻うめ吟めきながら、しわがれ聲こゑをしぼりて、

㊦
迷まよひ来こし汝なれに毒どく茶ちやを進すすめしも

生いのち命うば奪うばふと思おもへばなりけり

現世うつしよのもだえ苦くるしみ助けむと

吾われは毒湯どくゆを與あたへたるなり

感謝かんしゃすることを忘わすれてこの婆ばばを

恨うらむは何なんの心こころぞやそも

この婆ばばは忍しのヶ丘ぶがをかの氏子うぢこをば

殖ふやすが爲ために毒どくを進すすめし

かぎりある現うつつの生命いのちを抜ぬきとりて

永と久はの生命いのちを與あたふる眞心まごころ

わが爲ために生命いのちうばはれ救すくはれし

者ものばかりなる忍しのヶ丘ぶがをかぞや
㊦

冬男ふゆをは憤然ふんぜんとして、

㊦ 國土くにつくる務つとめある身みを殺ころしたる

この鬼婆おにばばは魍魎すだまなるらむ

御前おんまへにかへりごとせむ由よしもなし

現うつの生命いのち奪うばはれし吾われ

精靈せいれいとなりて故郷こきやうにかへるべき

かむばせもなきわが身みなりけり

この上うへは婆ばばアのみたまを亡ほろぼして

忍しのぶヶ丘がの司つかさとならむ

あきらめて早はやく亡ほろびよ鬼婆おにばばよ

汝なれがみたまの生命いのちはわがもの
□

熊公くまこうは、

鬼婆おにばばのたくみの畏わなにおちいりて

われは果敢はなくなりしみたまぞ

この恨うらみいつか晴はらすと只ただ二人

清水しみづヶ丘がをに時ときを待まちしよ

斯かくならば最も早はや力ちからも及およぶまじ

この鬼おに婆ばばを斬きりて放はらな

嬉うれしさと樂たのしさ一いち度どに湧わき出いでて

婆ばばアの生いの命ちを今け日ふは斷たつなり㊦

婆ばばアは寢ねながら苦くるしき息いきの下したより、

へらず口くちたたくな熊くま公こうの精せい靈れいよ

吾われのたたくみにかかりし馬ば鹿か者もの

精せい靈れいの生いの命ち死しすると思おもふ奴やつ

幽いう冥めい知しらぬたぶれなりけり

この婆ばばの生いの命ちは如い何かに迫せまるとも

ひるまずたゆまず仇をかへさむ
肉體は死すことあるも精靈は

幾千代までも亡びざるなり

どこまでも生きながらへて汝が生命

千變萬化に惱ましくれなむ

貴様等に討たれてひるむ婆ならず

しばしの間をやすむのみなる

虎公は、

執念の深き婆かも今となりて

へらず口のみたたき居るなり

兩腕を引き抜かれながら知死期まで

ののしる婆アの心にくきも

一打ちに息とめてみむこの婆の

頭骸骨をば打ちくだきつつ

わが恨み晴らさむときは来りけり

思ひしれ婆ア今日の朝を

婆アは長い舌をベロリと出し、冷汗をかきながら尚もしぶとく、

虎公よ馬鹿をほざくなこの婆は

斬つても斬れぬ亡びぬつはものぞ

よしやよし幾萬人の攻め來とも

ひるまぬ笑ひの婆アを知らずや

如何ならむ悩みにあふもアハハハハ

イヒヒヒヒヒと笑ひ過ぎさむ

難局に處しても吾は笑ふなり

笑へば生命は永久に亡びず

笑ふこと知らぬ輩のあはれさよ

いつも怒りつ泣きつ居るなり

三人の乙女は弱味をつけこみて

そろそろ生地をあらはしにけり

この婆のみたまは亡びず何時までも

生きて乙女に仇を返さむ

山も川も海もおぼえて居れよかし

今に報いむ今日の恨みを

山は少しく柳眉を逆立て聲をふるはせ、

まだ花の蕾の生命とりし婆に

吾は報いむ恨みのかずかず

今日^{けふ}まではすきを窺^{うかが}ひにこやかに

婆^{ばば}に仕^{つか}へて來^{きた}りし吾^{われ}なり

わが心^{こころ}知らずに胸^{むね}を安^{やす}んじて

過^すぎにし婆^{ばば}のうかつなるかも

故郷^{ふるさと}のわが垂乳^{たらちね}根^ねは夜晝^{よるひる}を

悲^{かな}しみ給^{たま}はむ思^{おも}へばにくらし

この婆^{ばば}のたまの生命^{いのち}を亡^{ほろ}ぼして

世^よの禍^{わざはひ}をのぞかむと思^{おも}ふ

婆^{ばば}アは怒^{いか}りの面相^{めんさう}すさまじく、

アハハハハあはれなるかな乙女^{をとめ}山^{やま}

汝^{なれ}は身^みの程^{ほど}知らぬ馬鹿^{ばか}者^{もの}

わが許^{ゆる}しなくしてみたまの生命^{いのち}をば

保つと思ふかうつけ者奴が
この婆は閻魔の妻よ今ここに
館構へて生命断つなり
見苦しき姿の婆とさげすむな
大王様の奥方なるぞや

川は歌ふ。

大王の奥方なるか知らねども
悪しきことのみいたす婆なり
この婆が幽冥界にある限り
精霊等は浮ばざるべし
如何ならむ悩みにあふもいとほまじ
婆アの生命をとらねばやまじ

川の瀬に毒を流してこの婆は
人の生命をとりし曲なり

婆アは、

汝乙女譚を知らずに何を言ふ
婆の光を知らぬ盲が

海は、

斯くなれば如何にもがくも及ぶまじ
婆に報いむ日頃の恨みを
玉の身の惜しき生命を奪はれて
黙すべきやは花なる乙女は

婆アは、

「何なりと勝手にほざけこの婆の
許しなれば住み場なからむ」

と言ひながら、うんうんと又もや冷汗を瀧の如く流しながら呻吟いて居る。ここに冬男は乙女に向ひ、

「さきの日ひに吾われに毒茶どくちやを進すすめたる

汝なれはいやしき乙女をとめならずや

鬼婆おにばばの手下てしたと思おもひし汝乙女なれをとめ

今日は婆アばばの敵かたきとなりけるよ」

山やまはこれに答こたへて、

鬼婆おにばばのきびしき教をしへにそむかれず

水奔草すいほんさうの茶ちやを進すすめける

氣きの毒どくと思おもへどやむを得えざりけり

許ゆるさせ給たまへわが曲業まがわざを

川かはは歌うたふ。

君きみこそはあたら大丈夫ますらを精靈せいれいと

なして力ちからをからむと思おもへり

大丈夫ますらをの君きみなるが故ゆゑこの婆ばばを

征討きつたむと思おもひて毒どくたてまつりき

大丈夫ますらをの君きみ精靈せいれいとなりまさば

吾われの力ちからと思おもひゐたりしよ

精靈せいれいの君きみにしあれば吾われもまた

精靈故に力とたのまむ
『

山は歌ふ。

『ともかくも男女六柱精靈の

力協せて婆を征討めむ

鬼婆よ心しづかに冥せよや

いよいよ運のつきにしあれば
』

笑ひ婆アは絶対絶命と見えける折しも、表戸を静かに開きて入り来る胡麻鹽の
髪を後に垂らしたる中婆アありけり。中婆アは言葉淑やかに六人の男女に黙禮し

ながら、

『此家の主笑ひさんは、きついお怪我をなさつたと聞きました。私はこの村の
「譏り」と言ふ者でありますが、里人の代理として参りました。見れば山、川、

海の優しき三人様の厚き御介抱を御禮申します。また外の男の三人様まで御見舞ひにお越し下さいましたやうですが、何とも御禮の申しやうもございませぬ。どれ、私も一寸御容態を見させていただきませう」
と言ひつつ、笑ひ婆アを抱き起し、すつくと背に負ひ、ホホホホと後を振りむき、笑ひながら驀地に表をさして駆け出し、冲天の雲に乗り、遠き南の空に向つて雲を霞と逃げ去りぬ。この婆アは笑ひ婆の妹にして、間斷なく人を譏り樂しむとせる惡魔なりける。

笑ひ婆アは妹に助けられ急場を遁がれ、行方をくらましたるより、六人は後を追はむ術もなく、互ひに顔を見合はして、暫しが程は呆然たりける。

(昭和九・七・二六 舊六・一五 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

忍しのぶヶ丘がをの笑わらひ婆ばばの館やかたの邊あたりより、怪あやしき雲うん氣き立たち昇のぼると見みる間まに、空くう中ちゆうを譏そしり婆ばば
アが「笑わらひ」婆ばばを背せに負おひ、二ふたつの火ひの玉たまとなつて、遙はるか南みなの空そらに消きえたるを見み
て、里さと人びと等たちは意い地ぢ悪わるき婆ばばの逃にげ去さりしならむ、さるにても囚とらはれ居ゐる三さん人にんの乙をとめ女め
は如い何かにと案あんじ煩わづらひつつ、二ふた人たりの婆ばばの次つきに位くらゐする里さと人びとの頭かしらなる色いろの黒くろき「茄なす子び」
と言いふ精せい靈れいは數あまた多たの精せい靈れいを引ひ連きつれ來きたり、男だん女ぢよ六ろく人にんの精せい靈れいが婆ばばが抜ぬけ殻がらの館やかたに默もく然ねん
として立たち居ゐたるにぞ、茄なす子びは門かど口ぐちより力ちから限かぎりの聲こゑを張はりあげて、

「この宿やどの笑わらひ婆ばさんは如い何かなりし

怪あやしき雲くもに乘のり行ゆくを見みし

家いへの内うちに人ひとの氣けするなり何なん人びとか

名な乗のらせ給たまへ吾われは茄なす子びよ」

此この聲こゑにハツと氣きがつき、山やま、川かは、海うみの三さん人にんは門かど口ぐちに走はしり出いで、

珍めづしくよく出いでますも此家このいへの

主あるじは雲くもに乘のりて逃にげたり

里人さとびとを虐しひたげ艱なやめし笑わらひ婆ばばは

あと白浪しらなみと消きえ失うせにける

山鳥やまどりの尾をの長なが々ながしき年月としつきを

忍しのび來きにけり婆ばさんが館やかたに

茄子なすびは歌うたふ。

此里このさとの司つかさながらも笑わらひ婆ばばは

よきことをせぬ魍魎すだまなりしよ

今日けふよりは里人さとびと等たちも喜よろこびて

忍しのぶヶ丘がをかに光ひかりて住すむべし

笑わらひ婆ばば一人ひとりのみかは譏そしりまで

忍しのぶヶ丘がをかを逃にげ去さりしはや
里さと人びとは何いづれも笑わらひに玉たまの緒をの
生いのち命ちとられし人ひとのみならずや
□

山やまは之これに答こたへて、

吾われも亦また笑わらひ婆ばばアの手てにかかり
生いのち命ち亡うせにしものなりにけり
今け日ふよりは忍しのぶヶ丘がをかの里さと人びとは
□

歡あはぎ喜よろこび世よを壽ことほがむ
兔とも角かくも茄なす子の君きみよ奥おくの閒まに
進すすませ給たまへ客まらうど人ひといませば
□

茄なす子びといへる精せい靈れいは、

何人の客人なるか知らねども

吾は一先づ會ひて語らむ

今日よりは醜の雲霧吹き拂ひ

月日並びて輝き渡らむ

此の里の雲は晴れたり笑ひ婆

譏り婆アの逃げ去りしより

と歌ひつつ奥の一間に進み入り、三人の男子に向ひ目禮しながら、

此館におはす三人の客人は

何れの精靈か聞かまほしけれ

吾こそは忍ヶ丘に永遠に住む

茄子と申す精靈なりけり

冬男は歌ふ。

吾こそは水上の山に輝ける

巖根が末の御子なりにける

これに立つ二人は家臣熊、虎と

世にひびきたる大丈夫なるよ

御樋代の神の神言を畏みて

旅行く道を謀らはれける

鬼婆の毒牙にかかり水奔草の

茶を飲まされて鬼となりし吾

三柱の男の子は何れも精霊の

世界にありて婆をきためし

川は歌ふ。

三柱みはしらの大丈夫ますらをの君きみの力ちからにて

二人ふたりの婆ばばは逃にげ失うせにけり

斯かくならば忍しのぶヶ丘をかの里人さとびとは

世よを樂たのしみて送おくるなるらむ

吾われとても心こころ明あかるくなりけり

醜しこの黒雲くろくも吹ふき散ちりしより

茄子なすびは之これに答こたえて、

ありがたき御世みよとなりけり忍しのぶヶ丘をかの

里さとは忽たちまち樂園みそのとなりぬ

海うみは歌うたふ。

☞ 終日を婆の眼に射られつつ

心ならずも忍び來にける

水奔鬼となりて此世を忍ヶ丘の

婆の館に過ぎにけらしな

斯くならば恐るるものは更になし

茄子の君よ喜びたまへ

里人は庭一面に群がり來り、二人の婆アの逃げ去りしと聞くより勇み立ち、歡呼の聲は天地を搖がすばかりなりける。群衆の中より「水菜」と言へる女身は長袖を纏ひながら、廣庭の中央に立ち、身振り品よく踊り舞ふ。群衆は之に和して手拍子足拍子を揃へ、満面喜びに充ちながら、月の輪を作り踊り狂ひけり。

☞ アア有難し有難し

忍ヶ丘を包みたる

醜しこの黒雲くろくも晴はれ行ゆきぬ
科戸しなどの風かぜの幸さちはひに
醜神しこがみ笑わらひ婆ばアさんも
妹いもとの譏そしり婆ばアさんも
雲くもを霞かすみと逃にげ行ゆきて
今いまは清すがしき神かみの苑その
吾等われら里人さとびとことごとく
惜をしき生命いのちを奪うばはれて
世よに愧はづかしき水奔鬼すいほんき
精靈せいれいの身みとなり果はてて
恨うらみを返かへす術すべもなく
笑わらひ婆ばさんの意いの儘ままに
頭あこの先さきにて使つかはれつ
艱なやみ苦くるしみ今日けふが日ひまで

涙なみだと共に暮くれにけり

水上みなかみの山やまにあれませる

冬男ふゆを主従しゅじう現あれまして

里さとの惡魔あくまを退しりぞけまし

天地あめつち晴はれたる今日けふの日ひを

里人さとびと此處ここに集あつまりて

心こころ限かぎりに歡よろこびなり

ああたのもしや、たのもしや

不老ふらうふし不死ふしなる精靈せいれいの

此國このくに人は今日けふよりは

常世とこよの春はるを樂たのしまむ

冬男ふゆをの神かみよ供神ともがみよ

堅磐かきはと常磐ときに鎮しづまりて

此里このさと人を治をさめまし

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

と水菜みづなは音吐朗々おんとらうらうとして精靈せいれいの氣分きぶんも何處どこへやら、愉快氣ゆくわいげに歌うたひ終をはる。

斯かくして歡喜くわんきの中うちに其夜そのよは明あけ放はなれたれば、各自おのもおの巖窟いはやの住家すみかへ歸かへり行ゆく。

茲ここに茄子なすびは六人ろくにんの男女だんぢよに向むかひ、又またもや婆ばばの歸かへり來きたるやも計はかられざれば、今いまの間うち

に根城ねじろを堅かため置おかむと、六人ろくにんの男女だんぢよに幽界いうかいの結けつ婚こん式しきを舉あげむ事ことを勸誘くわんいうしければ、

冬男ふゆをは乙女をとめの山やまを、熊公くまこうは乙女をとめの川かはを、虎公とらこうは乙女をとめの海うみを妻つまと定さだめ、盛せい大だいなる幽いう

界かいの結けつ婚こん式しきを舉あぐることとはなりぬ。

茲ここに婆ばばの館やかたを利用りようして、三夫婦みつふうふの結けつ婚こん式しきは目出度めでたく舉あげられたり。媒酌ばいしやく役やくは茄なす

子この司つかさにして茄子なすびは祝歌しゆくかを歌うたふ。

幽界いうかいに例ためしもあらぬ三みつ組ぐみの

嫁とつぎの杯さかづきかはす目出度めでたさ

今日よりは冬男の神のましませば

此里人は安けかるべし

三柱の乙女は何れも夫もちて

忍ヶ丘に榮えまませ

里人も今日の喜び壽ぎて

常世の春を樂しむなるらむ

吾も亦これの嫁ぎの媒酌人と

なりたる今日を嬉しく思へり

里人にかはりて今日の喜びを

恭しくも壽ぎ奉らむ

常世行く闇につつまる此丘も

君の天降りに晴れ渡りけり

此里にさやりし二人の鬼婆は

行方知れずとなりけらしな

鬼婆おにばばの再ふたびた歸かへり來きたるとも

里さと人びと力ちからを協あはせてこばまむ

八や十そ日か日ひはあれども今日けふの吉よき日ひこそ

生いく日ひ足たる日ひと祝いはひこそすれら

茲ここに幽い冥う界めいの結け婚つは行おこはれたれど、意い志し想さう念ねんの世せ界かいなれば、現げん界かいの如ごとく諄くどくど々とし

式しきもいららず極きはめて簡かん單たんに擧きよ式しきは終をはれり。

冬ふゆ男をとこは妻つまの山やまに向むかひ歌うたふ。

木こ枯がらしの吹ふきて冷つめたき此この冬ふゆを

凌しのぎて吾われは春はるに逢あひぬる

ときじくくに花はなの香かりを保たもてかし

山やまなる乙をとめ女をの紅あかき心こころに

思おもひきや精せい靈れいの身みを持もちながら

斯かかる乙女をとめに見み合あひせむとは

年としつき月つきを忍しのぶヶ丘がをかの雲くも晴はれて

乙女をとめの胸むねに月つき日ひ照てるなり

此この丘をかの笑わらひ婆ばばアあに謀はかられて

今日けふは嬉うれしき吉よき日ひに逢あひぬ
□

山やまは歌うたふ。

水みな上かみ山やまの麓ふもとに住すみし吾われにして

冬ふゆ男をの君きみにまみゆる嬉うれしさ

精せい靈れいとなりて忍しのぶヶ丘がをかの邊へに

妹いも背せを契ちぎると思おもへば嬉うれし

今日けふよりは冬ふゆ男をの君きみを夫つまとして

此この里さと人びとを安やすく治をさめむ
□

熊公は妻の川に對して歌ふ。

☐ 精靈となりて久しくひそみたる

清水ヶ丘を出でし吾なり

鬼婆の腕をむしりて吾此處に

來りて姫に見合ひぬるかな

苦しがるうきめ忍びて喜びの

丘に杯とりかはしける

眉目形たぐひ稀なる乙女川と

結びし夢は常世にもがも

長かれと千代の契りを結び昆布

ほどけずあれや互ひの心に

妻の川は歌ふ。

㊦ 吾夫と定まりにける熊公の

雄々しき姿に心足らへり

大丈夫の君にしあれば鬼婆の

強きもただにくじき給ひし

鬼婆の笑ひ、譏りを追ひ退けし

吾背の君は猛者なりけり

今日よりは恐る事は世になけむ

二人の婆のかげはかくれて

虎公は歌ふ。

㊦ 幾年の艱みを忍ケ丘の邊に

妹背の契り結びけるはや

幽世といへども地上に生ふるもの

皆現世とかはりなきかな

男女妹背の道も現世の

心と更にかはりなきかな

鬼婆の逃げたる跡の廣庭に

國を造ると嫁ぎけるかも

海は歌ふ。

醜草のまばらなりける此丘に

身も安らけく見合ひせしかな

玉の緒の生命永くも保てかし

吾背の君と世を樂しまむ

主の神の貴の守りの深くして

千代萬代の喜びに逢ふも

茲こゝに鬼婆おにばばの二人ふたりまで此里このさとを逃にげ去さり、村人むらびとの心こころに清新せいしんの空氣くうきを注ちう入にふしたる上うへ、
三組みくみの結けつ婚こん式しきを擧あげられ、靈界れいかいながら此丘このをかの里さとは百花ひやくくわらんまん爛漫はなぞのの花園はなぞのと變かはり、一人ひとりの
不平ふへいをいふものもなく、世よは安やすらけく治をさまりにける。

(昭和九・七・二六 舊六・一五 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

第六章 秋野あきのの旅たび〔二〇一〇〕

高光山たかみつやま以西いせいの國形くにがたを視察しさつすべく遣つかはしたる冬男ふゆをは、冬去ふゆさり春夏はるなつも過すぎ秋あきの初はじめ
となりけれども、何なんの消息せうそくもなきままに、巖いはがねヶ根ねは稍やや不安ふあんの空氣くうきに滿みたされ、重臣ぢうしん
の水音みなおと、瀨音せおとを招まねき、且かつ春男はるを、夏男なつを、秋男あきをの三人さんにんと共ともに、執政所しつせいしよに集あつまり鳩首謀きうしゆぼう
議ぎを凝こらした。

巖いはがねヶ根ねは歌うたもて語かたる。

高たか光みつ山やま以い西せいの國くに形がた調し査らぶべく

出いでにし冬ふゆ男をは今いまに歸かへらず

もしやもし水すい奔ほん草さうの中ちゆう毒どくに

冬ふゆ男をは身み亡うせたるにあらずや

夜よな夜よなにあやしき夢ゆめを吾われ見みたり

心こころにかかる冬ふゆ男をの身みの上うへ

斯かくならば再ふたびひ人とを遣つかはして

冬ふゆ男をの所あり在かをさ探がさせむと思おもふ

水みな音おとは答こたへて、

執しつ政せいの宣のり言ご宜うよ吾われも亦また

朝あさ夕ゆふ心こころにかかりけらしな

音おとに聞きく忍しのヶが丘かに水すい奔ほん鬼き

旅行たびゆく人ひとを損そこなふと聞きく
水奔鬼すいほんき笑わらひ婆ばばアは道みちの邊へに
立たちて旅人たびびとを誘いざなひ殺ころすと
』

瀬音せおとは歌うたふ。

葭原よしはらや水奔草すいほんさうの根ねにひそむ

濕蟲いぢちの害がいは恐おそろしと聞きく

案あんずるに濕蟲いぢちその他たの毒蟲どくむしに

冬男ふゆをの君きみは損そこなはれけむ

兔とも角かくも高光山たかみつやまに人ひとを派はし

冬男ふゆをの安否あんぴを探さぐるにしかず
』

ここに三人さんにんの協けいぎ議ぎにより、巖いはヶ根がねは第三男だいさんなんの秋男あきをを首領しゅりやうとし、四人よにんの從者じゅうしゃを從したが

へて、たかみつやま 高光山いたに至る大原野だいがんやを探させしむべく、みなかみやま 水上山の館やかたを出立せしむる事こととなりぬ。

あきを 秋男は松まつ、竹たけ、梅うめ、櫻さくらの四人よにんの従者じゅうしやを従へ、みなかみやま 水上山を立出で、おとうとふゆを 弟冬男のとりし道みちを避け、なんぼう 南方に向ひ、たかみつやま 高光山の方面はうめんに進まむと決心けつしんの臍ほそを固め、しんでん 神殿しゅつたつに出立の祈願きぐわんをこめ、ちち 父の巖いはケ根がねに向つて言葉ことば静しづかに歌うたもて宣のる。

ちちのみの父の御言を被りて

吾は高光山に進まむ

いかならむ悩みありとも國の爲と

吾は恐れじたとへ死すとも

弟の所在を探ねあくまでも

父母の心を安んじ奉らむ

葭原の國土を閉せる葭草や

水奔草を刈りて放らむ

悪神は水奔草の野邊に潛み

行手の人に災すといふ

さりながら吾には神の守りあり

如何なる曲津も恐れず進まむ

父上も母も心を安んじませ

吾は一人の旅にあらねば

巖ヶ根は涙をふるひながら、
表面は元氣さうに歌ふ。

『弟の冬男の行方わかるまで

汝は歸らず國見して來よ

弟の消息判ればすみやかに

知らせ來れよ櫻に仰せて』

秋男は又歌ふ。

父上の嚴の御言葉謹みて

吾はあくまで力つくさむ

水音は歌ふ。

勇ましき秋男の君の出で立ちを

送る水音の心はかなしも

水の音風の響も氣遣はる

君の旅路の安くあれよと

野路を越え川を渡りて出でてゆく

君の雄々しき姿を送らむ

瀬音は歌ふ。
せおと うた

吾も亦父の御言に従ひて
われ またちち みこと したが

神國守れば安く出でませ
みくに まも やす い

御館に心残さずとくとくと
みやかた こころのこ

神國の爲に出でませ君よ
みくに ため い きみ

君行かばこの御館は淋しけれど
きみ ゆ この みやかた さび

神國の爲と思へば詮なし
みくに ため おも せん

曲津神の伊猛り狂ふ大野原
まが かみ いたけ くる おほの はら

進ませ給へ神の力に
すす たま かみ ちから

秋男は歌ふ。
あきを うた

ありがたし君の誠はどこまでも
きみ まこと

忘れず力と進み行くべし

いざさらば吾は進まむ四柱の

友と力を組合せつつ

秋さりて野邊に百草咲き匂ひ

旅ゆく吾を迎へ送りす

花の香に包まれてゆく秋の野の

吾旅立ち清しかるべし

弟の所在探れば直さまに

櫻を歸して知らせ奉らむ

新しき國土を拓かむと出でてゆく

吾に力を添へさせ給へ

住みなれし水上山の聖場を

去らむと思へば涙ぐまるる

吾涙歎きの涙にあらずして

旅たびゆくうれ嬉なみだしなみだ涙なみだなるぞや
女郎をみなへし花ききやう桔梗かるかや刈にほ萱にほ匂のふ野のを
松まつ、竹たけ、梅うめ、櫻さくら伴ともなひてゆく』

斯かくうた歌うたひをは終をはり、秋あき男をは勇いさましく四人よにんの供とも人と共ともに、巖いはヶ根がねの父ちちの館やかたを立たち出いで
にける。

水みな上かみ山やまを立たち出いでて
國くに形がた見みむと進すすみ行ゆく
吾わが旅たび立たちのいさましさ
大おほ川かは小を川がは乗のり越こえて
進すすめば床ゆかし百もも草ぐさ桔梗ききやう
艶えんを競きそひて咲さき匂にほふ
吾われ等らが行ゆく手を販にぎはせり

弟冬男は今いづこ
おとうとぶゆをいま

處せきまで茂りたる
ところまでしげ

水奔草の災に
すいほんさつわざはひ

生命捨てしにあらざるか
いのちす

何とはなしに氣にかかる
なん

約一年のその間
やくいちねんあひだ

何の便りも夏の風
なんたよなつかせ

漸く秋も來向ひて
やうやあききむか

野邊の千花はプンプンと
のべちばな

あたりに芳香放つなり
はうかうはな

忍ヶ丘に笑ひ婆
しのぶがをかわらばば

ありとほのかに聞きつれど
き

吾は道をば南して
われみちみなみ

忍ヶ丘の東面に
しのぶがをかとうめん

巡りて弟の消息を

探り査べむその上に

吾方針を定むべし

進めよ進めよ、いざ進め

悪龍毒蛇は繁くとも

神の賜ひし言靈に

言向けやはし打ちきため

道の隈手も恙なく

いと安々と進むべし

ああ惟神々々

神の依さしのこの旅出

さやらむものは世にあらじ

松、竹、梅を始めとし

櫻と名告る供人よ

必かならず恐おそるること勿なかれ
吾われら等は神かみの子神こかみの宮みや
神かみにまかせし上うへからは
いかなる曲ま津がも恐おそれむや
進すすめよ進すすめ、いざ進すすめ
〇

從神じゅうしんの松まつは歌うたふ。

〇
ああ勇いさましや勇いさましや
秋男あきをの君きみの武むし者やぶ振ぶりに
吾われら等は心こころも勇いさみ立たち
無むじん人の野の邊べをゆく如ごとく
障さやらむ曲ま津がは悉ことごとく
斬きり伏ふせ雑なぎ伏ふせ驀まつし地く

高光山の聖場に
たかみつやま せいぢやう

神の力をいただきて
かみ ちから

進みゆくこそ楽しけれ
すす したの

秋男の君に従ひて
あきを きみ したが

百花千花咲き匂ふ
ももばな ちばな さ にほ

山の邊野中縫ひてゆく
やま べのなかぬ

今日の出で立ち勇ましし
けふ い した いさ

ああ惟神々々
あむながらかむながら

吾等が旅に御幸あれ
われら たび みさち

從神の竹は歌ふ。
じうしん たけ うた

水上山を立ち出でて
みなかみやま た い

花咲き匂ふ秋の野を
はな さ にほ あき の

秋男あきをの君きみにしたがひて

進すすみゆくこそたの樂しけれ

吾等われらも神かみの子こ神かみの宮みや

いかなる曲ま津がのさやるとも

何なにか恐おそれむ大丈夫ますらをの

堅かたき心こころは巖いはヶ根がねの

君きみが仰おほせを守まもりつつ

惡魔あくまの征途きために上のぼるなり

水奔草すいほんさつは茂しげくとも

惡魔あくまの力ちからは強つよくとも

勇猛心ゆうまうしんを發揮はつきして

撓たゆまず恐おそれず進すすみゆく

吾等われらが一行いっかうに幸さちあれや

火炎くわえんの山やまもほの見みえぬ

いざや進すすまむ大野原おほのはら

百草ももくさ匂におふ山やまの邊へを

涉わたりて行ゆけば秋あきの風かぜ

吾等われらが面おもを吹ふきつけて

涼すずしさ添そふる夕ゆふまぐれ

仰あふぎ御空みそらを眺ながむれば

白しろ々じろかかる晝ひる月つきの

御顔みかほかすかに笑ゑませたり

吾わが一行いつかうに幸さちありと

知しらせ給たまふかありがたし

ああ惟かむ神な々々ながらかむながら

生いく言こと靈たまに力ちからあれ

吾わが一行いつかうに幸さちあれよ

從神じうしんの梅うめは歌うたふ。

㊦ ああ樂たのもしや樂たのもしや

秋男あきをの君きみに從したがひて

進すすむも嬉うれし大野原おほのはら

火炎くわえんの山やまも近ちかづきて

何なにか心こころの勇いさむなり

草葉くさばの蔭かげに鳴なく蟲むしも

梢しすゑに囀さへうる百鳥ももどりの

聲こゑも清すがしくなりぬれど

陽ひは早はや西にしに黃昏たそがれて

行ゆく手ても見みえずなりにけり

さはさりながら君命くんめいは

尊たふとく重おもく背そむかれず

火炎くわえんの山やまの麓ふもとまで
兔とにも角かくにも進すすむべし
ああかむながらかむながら惟神々々
吾わが一行いつかうに幸さちあれや
𠮟

從神じうしんの櫻さくらは歌うたふ。

𠮟
蟲むしの音ね清すがしき秋あきの空そら
陽ひは西山せいざんにかたむきて
いよいよさ冴さゆる月つきの光かげ
星ほし満天まんてんにきらめきて
わが足あしもと下あかは明あかくなりぬ
惡鬼あくき毒獸どくじうせめるとも
吾われは恐おそれじ言靈ことたまの

劍を高くかざしつつ

御樋代神の現れませる

高光山を目あてとし

眞心もちて進むべし

ああ惟神々々

恩頼を賜へかし

斯く歌ひつつ前進する事一時ばかり、ふと突き當りたる小さき丘あり。一行五

人はこの丘に攀ぢ登り、木の間の月を眺めながら、しばらく旅の疲勞を休め居る。

(昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

第二篇 秋夜の月

第七章 月見ヶ丘〔二〇一〕

秋男あきをの一行五人は、漸やうやくにして雑草生ざっさうおひ茂しげる月見ヶ丘つきみがをかの夕ゆふべを、ここに息いきを休やすめながら松間まつまの月つきを眺ながめて歌うたふ。

秋男あきを 大野原おほのはら涉わたりて漸やうやく月見ヶ丘つきみがをかの松まつに懸かかれる月つきを見みしかな

松まつは歌うたふ。

松生まつおふる月見ヶ丘つきみがをかの月光つきかげは

秋あきの夕ゆふべの風かぜにゆれつつ

月清つききよみ草葉くさばにすだく蟲むしの音ねも

いやさえざえに小夜更さよふけにけり

秋あき月づきの静しづかに照てれる丘をかの上へに

旅たびの疲つかれを休やすらふ宵よひかな

籠こもり木の梢こずえに宿やどる月影つきかげは

千ち々に碎くだけて風かぜにさゆれつ

大空おほぞらの月つきの心こころは知しらねども

われには樂たのしきかげにぞありける

月つき澄すめるこれの丘邊をかへに休やすらひて

松風まつかぜ聞きけば秋あきの聲こゑあり

天國てんごくの姿すがたなるかな松まつヶ枝がえに

澄すむ月影つきかげを見みれば樂たのしき
㊦

竹たけは歌うたふ。

㊦
此處こゝに來きて親したしと思おもふ故郷ふるさとの

山の端出づる月を見しかな

高光の山に進まむ道すがら

月見ヶ丘の月を見るかな

白雲の幕を閉ぢつつ開きつつ

月の桂男われ等をのぞけり

鈴蟲も清しき聲を張りあげて

今宵の月を稱へうたふも

萩、桔梗匂へる丘に照る月の

かげは一入清しかりけり

空高き秋男の君に従ひて

今宵は清しき月を見るかな

此處に来て空ゆく月を眺むれば

悪魔のすまふ野路とは思へず

大丈夫の彌猛心も月見れば

柔らぎ初めぬ女郎花の花

月の夜に咲く女郎花よく見れば

露を浴みつつ傾きにけり

月の行く道も確に見ゆるまで

澄み渡りたり今宵の大空

大空に浮べる月の光清み

地上に松の影を描けり

梅は歌ふ。

月澄める御空の雲は次々に

薄らぎにつつ消え失せにけり

月と花の露にかこまれわれは今

月見ヶ丘に歌を詠むなり

月つき讀よみの露つゆの恵めぐみの無なかりせば

百ももの草くさき木きも育そだたざるべし

澄すみ渡わたる今こよひ宵ひの月つきは大おほ井ゐ川がは

龍たつの淵ふち瀬せに牙さえ渡わたるらむ

淵ふちに浮うく月つきを眺ながめて龍たつ神がみは

水みの面もに浮うび出いでて遊あそばむ

火くわえん炎ざん山みね峰こ越こす月つきの光かけ赤あかみ

千ち草ぐさの露つゆも風かぜに散ちるなり

一いち日にちの旅たびを終をはりてわれは今いま

月つき見みヶ丘かの月つきに親したしむ

秋あきの野のの樂たのしきものは百もも千ち花ばな

月つきに奏かなづる蟲むしの音ねなりけり

此こ處こに來きて松まつ蟲むし鈴すず蟲むしきりぎりす

清きよけき蟲むしの鳴なく音ね聞ききしよ

水上の山にも聞かぬ蟲の音に

わが魂は蘇りける

高光山進まむ道の首途に

われは冴えたる月を見しかな

空渡る月の下草露うけて

おのもおのみに玉とかがよふ

わが袖は露にしめりて御空ゆく

月の光さへ宿らせにけり

眞晝間にまがふべらなる月光を

浴びて今宵の草枕かな

月澄めば御空の雲も消えゆきて

松吹く風の音もさやけき

何時とても月を倦く夜はなけれども

旅の夕に見るは樂しき

天あまの原はらふりさけ見みれば縁みどり深ふかし

秋あきこそ月つきの光ひかりなるかな

水みな上山なみやま松まつの木この間まの月つき冴さえて

われを送おくるかこの丘をかに見みつ

雲くもの間まに翼つばさを搏うちて飛とぶ雁かりの

數かずさへ見みゆる今宵こよひの月つきはも
㊦

櫻さくらは歌うたふ。

㊦ 澄すみ渡わたる秋あき男をの君きみに從したがひて

冴さえたる月つきの顔かむばせを見みる

花はなの香かも蟲むしの鳴なく音ねも月つき光かげも

秋あきを飾かざらぬものなかりけり

樂たのしきは秋あきの旅路たびぢに如しかざらめ

百花ももばな匂にほひ月つきのつぎ牙さゆれば

月つき牙さゆる下道したみちゆけば蟲むしの聲こゑ

露つゆにふるひて花香はなかをるなり

月つきの夜よの牙さゆる空くう氣きをゆるがせて

透すきとほるなり鈴蟲すずむしの聲こゑ

天地あめつちを隈くまなく照てらす月光つきかげの

心こころ持もちたし旅たびゆくわれは

せせらぎの音おとも聞きえて丘をかの邊べに

蟲むしの音ね牙さゆる月つきの夜よ頃ころよ

晝ひるの如ごと明あかるき月つきも女を郎みなへし花はな

桔梗ききやう刈かる萱かや色いろ褪あせて見みゆ
□

當あたりて一塊いっくわいの黒雲こくうん現あらはるるよと見みる間まに、次第しだい々々しだいに四方しほうに擴ひろがり、さしも明あかる

かいく一いつ行かうは、秋あきの夜よの澄すみきる月つきを稱たたへ、休やすらひ居ある折をりもあれ、東とう南なんの天てんに

き月光も、忽ち黒雲に包まれ、咫尺黯澹として、どつかりと闇の塊は月見ヶ丘の
茂樹の森に落ち來りぬ。一行の姿は互に見えぬまで暗黒と化し、只聲のみを頼り
に空の晴るるを待つより外に手段なかりける。
秋男は歌ふ。

晝の如晴れたる空も忽ちに

あやめも分かずなりにけらしな

幾萬の星を残らず包みたる

雲黒々と吹く風寒し

蟲の音もひたと止まりて梢吹く

風いやらしくうなり初めたり

松、竹よ梅よ櫻よ心せよ

悪魔の出づる序幕なるらむ

闇の幕下してわれ等が目をかすめ

事謀るらし悪魔の群は

われわれの力に怖ぢて悪神は

地上に闇を落せしならむ

惟神御靈幸はひましまして

この暗闇を晴らさせ給へ

何處よりか怪しき聲の聞ゆなり

笑ひ婆アか譏り婆アか

如何ならむ曲津の襲ひ來るとも

われには嚴の言靈ありけり

松は歌ふ。

☐
月見ヶ丘松の百木も黒雲に
かくれて見えず蟲の音細し

水奔鬼たとへ幾萬來るとも

生言靈に打ちて放らむ

兔にもあれ月見ヶ丘を包みたる

闇を晴らして進みゆかばや

竹は歌ふ。

大丈夫の彌猛心は暗闇に

恐るべしやは國の御爲

爛漫と匂へる花の香消え失せて

闇はますます深みけるかな

この丘にすだく蟲の音細りつつ

怪しき風の吹き来る夜半なり

雄々しくは言擧すれど村肝の

心淋しくなりこころさびにけらしなしな」

梅うめは歌うたふ。

大丈夫だいしやうぶに君きみは非あらずや常闇とこやみの

今宵こよひをさまで恐おそれ給たまふか

闇やみの幕まく幾重いくへにわれを包つつむとも

心こころの誠まことの光ひかりに進すすまむ

大空おほぞらの清きよき月つき光かげ包つつみつつ

曲津まがはわれ等らにさやらむとすも

よしやよし常闇とこやみの夜よは深ふかくとも

如何いかでひるまむ悪魔あくまも恐おそれじし」

櫻さくらは歌うたふ。

㊦ 珍めづらしく月見ヶ丘つきみがをかに登のぼり來きて

われは心こころを慰なぐさめしはや

魂たましひの蘇よみがへりたるたまゆらを

包つつむも憎にくし醜しこの黒雲くろくも

黒雲くろくもは包つつめど月つきは皎かうかう々と

御空みそらに輝かがやき給たまふなるらむ

中空なかぞらの雲くもは如何いかほど程あつ厚あつくとも

やがては晴はれむ月つきのいませば
㊦

斯かく歌うたへる折をりしも、何處いづこともなく聞きこえ來きたるいやらしき聲こゑ。

㊦ ギアハハハハハハ、ギヨホホホホ

腰こしぬ拔ひけのヒヨロヒヨロ男をとこが集あつりて

弱音吹くかな月見ヶ丘に

空渡る月を力に腰抜けが

くだらぬ歌をうたふ可笑しさ

闇の幕に包まれ蟲の鳴く如き

悲しき聲をしぼり居るかな

高光山の旅をとどまれ貴様等の

弱腰にてはとても及ばじ

貴様等の求むる冬男は早既に

へこたれよつて弱鬼となりしよ

メソメソと吠面かわき赤恥を

忍ヶ丘に泣き暮し居る

其方も冬男の如くへこたれて

月見ヶ丘の鬼となれなれ

汝等の歌を道々聞いてゐた

俺おれの姿すがたを知らぬか馬鹿ばか者もの

此方このほうは世界せかいの奴やつを悉しつじつく

譏そしり樂たのしむ婆ばアなるぞや

譏そしられて腹はらが立たつなら目めを嚙かんで

死しんでしまへば埒らちがあくぞや

此方このほうの經綸しぐみの闇やみに包つつまれて

吠面ほえづらかわく腰拔野郎こしぬけやらうよ

ギヤハハハハ一いちぎゆうぎゆう喉のどをしめられて

今いまに悲かなしき最さい後ごをする奴やつ

かうなればもう俺おれのもの貴様きさま等は

舌したなど嚙かんで死しんだがよいぞや

世よの中なかに俺程おれほどえらい者ものはない

水上館みなかみやかたも神かみもあるかい

腰拔こしぬけの冬男ふゆをの兄あにが來くると聞ききて

待つて居たぞよ月見ヶ丘に

かくなればもうこちのものを煮て喰はうと

焼いて喰はうとしたい放題

アハハハハあはれなるかな此餓鬼は

俺等の仲間で鬺り殺しよ

ちよございな腰弱男の餓鬼どもが

俺の縄張荒らそとするか

縄張をむざむざ貴様に荒らされて

譏り婆さんの顔がたつかい

笑ひ婆の妹の俺は譏り婆よ

譏り散らして泡を吹かさむ

此方の罨にかかつてこの丘に

休むといふは運の盡きぞや

大空の月見したのが其の方の

いよいよ運うんの盡つきとなりける

運うんのつきまごつきうるつききよるつきの

五人男ごにんをとこの憐あはれなるかな

ギャハハハハ、ギヨホホホ、ギユフフフー

といやらしき聲こゑが闇やみの中に連れんぞく續ぞくしてゐる。秋男あきををは最も早はや堪たまり兼かね、天てんを拜はいし地ちを拜はいし拍手はくしゆしながら、

一ひと二ふた三み四よ五いつ六むゆ七なな八や九この十たり

百もも千ち萬よろじ八やち千よろじ萬よろじの神かみ

天津御空あまつみそらを晴はらさせ給たまへ

と天あまの數歌かずうたを繰くり返かへしてゐる。

闇の中より破鐘の様な聲、

「ワツハハハハ、ウフフフ、てもさてもいぢらしいものだのう。此方は忍
ぶがをかに棲む水奔鬼の笑ひ婆アさんの妹、世界の奴ども片つぱしから譏り散らして
茶々を入れる譏り婆さんの貧乏神ぞや、恐れ入ったか。天の數歌なんぞと減らず
口を叩くな。そんな事でビクとも致す鬼婆ではないぞや。ギヤハハハハ、ギユ
フフフ、終り」
と言った限り、ピタリと怪しき聲は止つた。

（昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 林彌生謹録）

第八章 月と闇（二〇一二）

月見ヶ丘以南は、譏り婆の水奔鬼が繩張とも稱すべき魔の原野なり。譏り婆は
此入口に現はれ、一行の出發を妨げむとして、小手調べの爲全力を盡し、黒雲を

起し、天心の月を包みて闇となし、且一行の心膽を奪はむと極力譏り散らしける
が、秋男の生言靈に打ちまくられ、旗を巻き鉾を納めて退却したりける。
再び大空の雲は、科戸の風に吹きまくられ、以前の如き明鏡の月皎々と輝き渡
りて、月見ヶ丘の清地は、蟻の這ふさへ見ゆるまで明くなりける。
秋男は勇みたち歌ふ。

面白や醜の司の譏り婆は

わが言靈に雲と消えたり

魔力の限りつくして大空に

黒雲起せし婆もしれ者よ

全力を盡せし婆の計略も

生言靈に脆く消えたり

月見ヶ丘の蟲の影さへ見ゆるまで

晴れ渡りたる今宵めでたし

譏そしり婆ばばの言葉ことばによれば弟おとうとは

笑わらひ婆ばばアに殺ころされしとや

さりながら悪魔あくまの言葉ことばは當あてにならじ

われを謀はかるの手段てだてなるらむ

悪神あくがみの力ちからの底そこも見みえにけり

わが魂たましひはいよいよかがよふ

大空おほぞらの月つきの鏡かがみに照てらされて

悪魔あくまは霧きりと消きえ失うせにけむ

女郎をみなへし花な匂にほへる丘をかに休やすらひて

譏そしり婆ばばアの荒すさび見みしかな

影かげかくし聲こゑのみかくる婆ばばなれば

その魔力まぢからの底そこも見みゆめり

いやらしき聲こゑを張はりあげ吾等われらをば

嚇おどす婆ばばアの淺あさはかなるも

これよりは二人の婆を相手とし

いむかひ行かむ高光の山へ

面白き夢の世なるよ月を見る

丘に曲津は闇の幕張る

闇の幕はもろく破れて鬼婆は

生命からがら逃げ失せにける

萩桔梗女郎花咲く丘の上に

うつろふ月は鏡なるかも

萩の露むすびて喉を潤さむ

川水ことごと毒の混れば

水奔草の葉末の露のしたたりて

川となりぬる水は恐ろし

葭原のよし草の間に生ひ茂る

水奔草はいまはしき草よ

草くさのま間にしの忍しのびす棲すまへるどく毒どく龍りゅうや

イいチちにこころ心こころ注そそぎすてす進すすますむ

兔ともかく角かくもあめ天あめ地つち一いち度どには晴はれし夜よの

月つきのかがみ鏡かがみをちから力ちからにすす進すすますむ

秋あきさのりべてふ野の邊べ吹ふくかぜ風かぜはすず涼すずしけれど

心こころせよかし毒どくのまじ混まじれば

果は敢かなくほこもを銚ほこをを納をめて逃にげ去りし

譏そしりは婆はアの卑ひ怯けなるかな

松まつはうた歌うたふ。

松まつにす澄すむつき月つきのひかり光ひかりはさゆらげり

野の邊べ吹ふくかぜ風かぜのすがたなるらむ

風かぜのみち道みち夜よ目めにみ見みえて丘をかの上の

茂樹しげきの梢波しずなみうちけり

面白おもしろき譏そしり婆ばばアのわざをぎを

暗闇くらやみの幕透まくとほして聞ききぬ

一時ひとときはわが魂たましひも戦をのきぬ

二十重はたへの闇やみに包つつまれしより

闇やみの幕まくわれを包つつみしたまゆらに

魂たまはをののき消きえむとせしも

竹たけは歌うたふ。

心弱こころよわき松まつの君きみかなわれはただ

空吹そらふく風かぜとうそぶきて居ゐし

闇やみの聲こゑ目當めあてに突つかむと竹槍たけやりの

穂ほを磨みがきつつわれは待まち居ゐし

上下うへしたに右みぎに左ひだりに聞きこえ來くる

婆ばばの在ありか處わを分わけがてに居ゐし

わが君きみの生いくこと言たま靈たまにうち出だされ

脆もろくも鬼おには破やぶれけるかな

魔ま力ぢからのあらむ限かぎりのはたらきは

かくやと思おもひわれは勇いさむも

肝きもむかふ心こころかためて進すすむべし

水すい奔ほん草さうのしげれる野の邊べを

月つき光かげはさやかなれども夜よの明あくるを

待まちて進すすまむ醜しこの草くさ原はら
𠄎

梅うめは歌うたふ。

𠄎
面おも白しろき譏そしり婆ばばアが現あらはれて

泥どろを吐はきつつ逃にげ歸かへりけり
暗闇くらやみの中なかにまぎれて譏そしり言こと

ぬかす婆ばばアの卑怯ひげふなるかな

笑わらひ婆ばば、譏そしり婆ばばアと面おも白しろき

鬼おにの棲すむなる醜しこの葭原よしはらよ

葭原よしはらの廣ひろきに曲ま津がは潛ひそむとも

われは飽あくまで征討きめでおくべき

吾君わがきみの生言靈いくことたまに怖おぢ恐おそれ

さすがの譏そしり婆ばばアも消きえたり

一ひと度は姿消すがたきゆれど何時いつか又また

譏そしり婆ばばアは現あらはれ來きたらむ

われも亦また譏そしり散ちらして鬼婆おにばばの

度肝どんきんを抜ぬいてくれむとぞ思おもふ

譏そしる事ことならばひるまじ何處どこまでも

人の悪口好きな吾なり

譏り婆いくらなりとも譏れかし

悪たれ婆アの寢言と聞かむ

ざまを見る生言靈にやははれて

影も形もなきつつ逃げ行く

どこまでも婆アの後を追跡し

譏り殺してやらねば置かぬ

籠り木の梢に婆は小さくなりて

わが言靈を震ひ聞くらむ

彼も亦しれものなれば其姿

蟲と變じて忍び居らむ

面白き婆アの荒びを見たりけり

姿なけれどくだけたる聲

櫻は歌ふ。

わが君の生言靈に大空の

黒雲晴れて月は覗けり

望の夜の月を頭に浴びながら

月見ヶ丘に雄猛びするかな

蟲の音も俄かに高く冴えにけり

月のしたびに露をなめつつ

瑠璃光のひかり照して草の葉の

露はあちこち輝きそめたり

此清き月見ヶ丘におほけなくも

譏り婆アは現はれにけり

さりながら姿かくせる鬼婆の

その卑怯さにあきれかへりぬ

ギヤハハハ八とさもいやらしきこゑしほ聲紋り

われ等らが肝きもを冷ひやさむとせし

曲鬼まがおにの言葉ことばは弱よわく力ちからなし

如何いかでひるまむ大丈夫ますらをわれは

鬼婆おにばばの力ちからの底そこは見みえにけり

いざや進すすまむ亡ほろび失うすまで

萩桔梗はぎきぎやう女をみなへしさ花を咲かく此丘このをかに

一夜いちやの露つゆの宿やどりたのむも

はろばろと醜しこの大野おほのを涉わたり來きて

鏡かがみと冴さゆる月つきに親したしむ

兔とも角かくも今宵こよひは眠ねむらず曉あかつきを

待まちて火炎くわえんの山やまに進すすまむ

音おとに聞きく火炎くわえんの山やまは鬼婆おにばばの

手て下した集あつむる元津もとつ棲處すみかと㊦

秋男は歌ふ。

月明の夜なれば秋の百草の

花の色香もさやに見えけり

明くるまで吾等は此處に休らひて

花と月とを賞めて待つべし

丘の上に風に靡ける穂薄の

露にかがよふ月のさやけさ

花薄風にゆれつつ打ち靡く

月見ヶ丘の夜は静けし

これといふ人もなき夜に穂薄の

誰を招くか聞かまほしけれ

吹く風の吹きのままなる穂薄の

姿は弱き人に似しかも

露つゆしげく保たもつ尾花をばなの頭重かしらおもみ

地ちにうつぶして涙なみだ垂たらせり

かくの如ごと譏そしり婆ばばアもいづれかの

野の邊べにうち伏ふし泣なき伏ふしにけむ

穂薄ほすすきの右みぎに左ひだりにさゆれつつ

涙なみだの露つゆを散ちらす夜半よはなり

穂薄ほすすきは此この丘をかのみか道みちの邊べに

露つゆを浴あびつつ招まねき居ゐるらむ

心地こころちよき此この秋空あきぞらを穂薄ほすすきの

風かぜに靡なびきて暮くれ行く惜をしさよ

小夜さよ更ふけてわびしき丘をかに穂薄ほすすきは

いと淋さびしげに吾われを招まねけり

花薄はなすすき風かぜになびける優姿やさすがたを

見みつつ思おもふも家いへなるつまを

蟲むしの聲こゑいとも冴さえたる丘をかの上へに

花波はななみ寄よする夜半よの穂ほすすき

夜半よの風松かぜまつをそよがす度たびごと毎ごとに

丘をかの尾花をばなは袖そでかへすなり

吹ふき拂はらふ風かぜに袂たもとを靡なびかせつ

なほ露つゆしげき穂ほすすきの花はな」

松まつは歌うたふ。

㊦ 咲さき匂におふ小草をぐさの花はなに置おく露つゆも

今宵こよひは月つきの光ひかりにかがよふ

八千草やちぐさの茂しげみにすだく蟲むしの音ねは

いよいよ高たかく月つきも聞きくらむ

夜よの露つゆにぬるる袂たもとを絞しぼりながら

尾花をばなを分わけてのぼり來こしはや

夕ゆふさりて秋風あきかぜそよぐ此丘このをかに

のぼれば松まつに月つきはさゆるる

吹ふく風かぜの音おとにつくづく秋あきを知る

月見つきみヶ丘がをかの露つゆのやどりに

淡うすく濃こく染そめ出いだしたる紅葉もみぢばの

かひげ一ひと色いろに見みゆる月つきの夜よ

黒雲くろくもに包つつまれたれどしら百合ゆりの

花はなは眞ま白しろく見みえにけらしな

鬼婆おにばばも月見つきみヶ丘がをかの風光ふうくわうに

憧こがれて夜よな夜よな來きたり見みるらむ

竹たけは歌うたふ。

㊦ 吹き荒ぶ風に葉末の露ちりて

わが裳裾まで湿らひにける

鬼婆の涙の露か知らねども

わが衣手は重くなりぬる

はかなきは露の生命か風吹かば

ただに散りゆく鬼婆の影

此丘の月のしたびに輝ける

露の白玉見るもさやけし

鬼婆に唆されて是非もなく

月見ヶ丘に夜を明しける

梅は歌ふ。

㊦ 葭原の葭の葉末を吹きて來し

風の響きは濁らへるかも

丘の上をかへに一本老松ひともとおいまつくつきりと

月下げつがにたちて葉はの色いろ黒くろめり

丘をかの上への赤土あかつちの上へに松まつの影かげ

描えがきて月つきは西渡にしわたり行く

明日あすの日は醜しこの大野おほのをのり越こえて

岩いはの根木ねきの根踏ねふみさくみ行ゆかむ

葎草よしぐさの生おひ茂しげりたる低所ひくところ

さけて通とほらむ薄生すすきおふる野のを

高たかき地ちは穂薄ほすすきなびき低ひくき地ちは

しめりて葎草よしぐさ茂しげらへるかも

櫻さくらは歌うたふ。

□ ほのぼのと東あづまの空そらは白しろみけり
西にし行く月つきのかげうすらぎて
やがて今いま豊とよ榮さかのぼる日ひの光かげを
ちから 力ちからとたのみ南みなみに進すすまむ
みむなみ 南みなみの空そらに聳そびゆる火くわえんざん炎ざん山は
ほのかに見みえて霞かすみ棚たな引ひく
くわえんざん 火くわえんざん炎ざん山はかすみの帯おびをしめながら
おにがみ 曲まが鬼おに數あまた多あまたかかへ居ゐるらし
ひむがし 東あづまの御み空そらつぎつぎ明あからみて
あまた 數あまた多あまたの星ほしはかくろひにけり
□

これより一行いっかうは、火くわえんざん炎ざん山はうめん方面ほうめんさして、やや高たかき原げん野やを傳つたひながら、宣せんでん傳か歌かをう
たひ南なん進しんする事こととなりぬ。

(昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

第九章 露の路〔二〇一三〕

ここに秋男一行は 月見ヶ丘を後にして

豊榮のぼる天津日の 光を頭に浴びながら

露おく野邊をすたすたと 高き陸地を選びつつ

右や左に折れくぐり 秋の榮の女郎花

萩や桔梗におくられて さも愉快げに進むなり

秋男は聲をはり上げて 心の丈をうたひつつ

進みゆくこそ勇ましき。

水上山を立ち出で

ふみもならはぬ大野原

毒蟲毒蛇をさけながら

水奔草の害毒を

ものともなさず進み來る

道の行く手に黄昏れて

月見ヶ丘に一夜の

露の宿りをたのみけり

百花千花は丘の上に

所狭きまで咲き匂ひ

秋の夕の蟲の音は

清くさやけく聞ゆなり

大空遙に見渡せば

緑の空は彌高く

雲の底ひは彌深く

みなぎらひたる眞中を

無心むしんの月つきは皎々かうかうと

輝かがやき渡わたり地ちの上うへの

總すべてのものを照てらしけり

吾等われら一行いつかうはこの丘をかに

月つきを愛めでつつ蟲聞むしききつつ

花はなの色香いろかを稱たたへつつ

歌詠うたよみあそぶ折をりもあれ

一天いつてん俄にはかにかき曇くもり

黒雲こくうん四邊しへんを包つつみつつ

白銀しろがねなせる月つきかげも

星ほしものこらず呑のみほして

闇やみのかたまり地ちに落おちぬ

暗くらさはくらし吾々われわれは

聲こゑを力ちからにかたり合あふ

時しもあれや訝しき
譏りの婆アがあらはれて
口を極めて嘲笑する
われ等はここに意を決し
天地の神を伏し拜み
生言靈を宣りつれば
さすがに猛き鬼婆も
忽ち旗を巻きをさめ
いづくともなくかくれけり
再び月は皎々と
雲を洗ひて出でましぬ
月見ヶ丘の草も木も
百花千花蟲のかけ
手にとる如く見えければ

天てんの恵めぐみと勇いさみつつ

秋あきの尾花をばなの歌うたよみて

その夜よは漸やつやく明あけにけり

譏そしり婆ばばアの住すむといふ

火炎くわえんの山やまに進すすまむと

吾等われらは一行いっかう五人ごにん連れ

尾花をばなの露つゆをかき分わけて

ここまで漸やつやく來きたりけり

ああ惟かむながら神かむながら々々

神かみの光ひかりに守まもられて

曲まがの征途きために進すすむこそ

これにましたる幸さちはなし

進すすめよ進すすめ、いざ進すすめ

松まつ、竹たけ、梅うめをはじめとし

櫻さくらも勇いさめこの首かど途で
□

松まつは先せん頭とうに立たちて歌うたふ。

㊦ 惡あく龍りゅう猛たけり濕い蟲ぢちはをどる

萱かやく草さ生おふる中なか道みちを

皮かはの衣ころもに身みを固かため

われら一いっ行かう五ご人にん連づれ

高たか光みやま山やまに進すすむなり

行ゆく手ての道みちは遠とほくとも

惡あく魔まは如い何かにさやるとも

われ等らはおそれじ大ま丈す夫らの

まことちからの力ちからをあらはして

神かみの依よさしの神かむ業わざに

勇^{いさ}み進^{すす}むで仕^{つか}ふべし

道^{みち}の行^ゆく手^てにさやりたる

闇^{やみ}の中^{なか}なる鬼^{おに}婆^ばも

生^{いく}言^{こと}靈^{たま}にやはれぬ

いざこれよりは言^{こと}靈^{たま}の

水^い火^きをますます清^{きよ}めつつ

神^{かみ}を眞^{まこと}の力^{ちから}とし

まことの教^{をしへ}を杖^{つゑ}として

如何^{いか}なる惡^{あく}魔^まの捕^{とり}手^てにも

撓^{たゆ}まず届^{くつ}せず進^{すす}むべし

冬^{ふゆ}男^をの君^{きみ}の御^{おん}行^{ゆく}方^へ

探^{たづ}ぬるまでは何^{どこ}處^こまでも

後^{あと}へは引^ひかぬ大^ま丈^す夫^らの

高^{たか}き心^{こころ}は桑^{くは}の弓^{ゆみ}

通とほさにやおかぬ大和魂やまとだま

守まもらせ給たまへ天津神あまつかみ

國津御神くにつみかみの御前おんまへに

心こころを清きよめて願ねぎ奉まつる

ああ惟かむ神ながら々かむ々ながら

今け日ふの首途かどに幸さちあれや

わが言こと靈たまに光ひかりあれら

竹たけは歌うたふ。

高たか光みつ山やまの麓ふもとまで

國形くにがた見みむと進すすみます

秋男あきをの君きみに從したがひて

花はな咲さき匂におふ秋あきの野のを

蟲むしの鳴なく音ねにおくられて
進すすみ來きたれば晝ひる月のつき
かげは御み空そらに白しろ々と
浮うける姿すがたに秋あきは來きぬ
秋あき日ひ短みじかく黄た昏そがれて
道みちの行ゆく手てにあたりたる
月つき見みヶ丘かの聖せい場ぢやうに
一ひと夜よをあかし諸もろ々の
善よ事こと曲まが事こと見み聞ききしつ
樹じ下かのやどりも早はやあけて
今け日は樂たのしき旅たび衣ころも
惡あく魔まの征き途ために進すすむなり
冬ふゆ男をの君きみの御おん行ゆく方へ
草くさを分わけても探さがし出だし

安否あんびを君きみに報ほうずべし
若もしも曲津まがつに亡ほろぼされ
あの世よの人ひととなりまさば
何なんと詮術せんすべなけれども
必かならず仇あだを打うちきため
君きみの恨うらみを晴はらすべし
譏そしり婆ばばアの言ことの葉はに
冬男ふゆをの君きみは鬼婆おにばばに
謀はかられ身み亡うせ給たまひしと
聞きく言ことの葉はの眞しんならば
吾等われらは黙もだしてあるべきや
吾等われらが力ちからのある限かぎり
生言靈いくことたまのつづくだけ
打うち出だしきたため斬きり拂はらひ

この葭原の國原を

うら平けくうら安く

拓かにやおかぬわが心

うべなひ給へ天地の

神の御前に願ぎ奉る

梅は歌ふ。

尾花の香り彌清く

匂ふ小路を辿りつつ

毒龍イチチをさけながら

君の御供に仕へゆく

今日の旅路の勇ましさ

秋は漸く更けにつつ

百草千草は花ひらき
芳香四方に薰ずなり
空ゆく鳥の翼まで
秋陽をあびてぴかぴかと
御空の玉と輝けり
ああ勇ましや勇ましや
吹く風清き秋の野の
旅ゆく吾は村肝の
心の駒も勇み立ち
身の疲れさへ忘れけり
ああ惟神々々
秋野の旅に幸あれや
わが生言靈に力あれ

櫻は歌ふ。

吹く風清く空高く

駒は勇みて嘶ける

水上山を立ち出でて

君の御供に仕へつつ

一夜の露の草枕

やうやうここに明け初めて

火炎の山を目あてとし

悪魔の征途にのぼるなり

水奔草の毒葉に

當てられ身亡せ水奔鬼

彼方此方にひそみたる

あやしき野邊を進むなり

吾等われらは神かみの子こ神かみの宮みや

如何いかなる曲まがもさやるべき

草葉くさばにすだく蟲むしの音ねも

林はやしに囀さへづる鳥とりの音ねも

谷川たにがはなが流るるせせらぎも

吾われに力ちからを添そふる如ごと

進すすめ進すすめと響ひびくなり

ああおもしろや樂たのもしや

秋男あきをの君きみに従したがひて

御樋代神みひしろがみのあれませる

高光山たかみやまに舞まひのぼり

四方よもの國形くにがた見渡みわたして

これの大野おほのを開ひらくべく

進すすみゆくなり天津神あまつかみ

道の隈手も恙なく
守らせ給へと願ぎ奉る
ああ惟神々々
わがゆく旅に幸あれや
わが言靈に力あれ

と歌ひつつ一行五人勇ましく進む折しも、俄に咽喉渴き堪へ難くなりけるが、こ
んもりと生ひ繁りたる常磐樹の蔭に、ささやかなる茶店の如きものありて、四五
人の若き乙女手を翳し、一行を招き居たりける。

（昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 内崎照代謹録）

第一〇章 五乙女（二〇一四）

一行は森蔭の細やかなる家に立寄り見れば、五人の乙女、笑を満面に浮べて一行を迎へ入れ、旅の疲れを此の破家に休ませ給へと勧める。此女の名は、秋風、野分、夕霧、朝霧、秋雨といふ。

□ 秋ながら旅の疲れに汗出でぬ

この破家に休ませ給へ

松のひびき萩吹く風のさやさやに

響きてさむき秋なりにけり

秋風の吹き通るなる此館に

暫しは汗をぬぐはせ給へ

秋男はこれに答へて、

□ 秋されば涼しきものを汗ばみぬ

この森蔭もりかげに休やすらひ行ゆかむか

一時ひとときをこれの館やかたに休やすらひて

吾われは力ちからを養やしなはむとぞ思おもふ

願ねがはくば只ただ一時ひとときの休やすらひを

これの館やかたに清きよく許ゆるせよ

といひながら一行いっかうを引連ひきつれ、柴しばの戸とをくぐりて奥おくに入るや、表おもてより見みたる破家あばらやに引替ひきかへて、美うつくしき廣ひろき居間いま、幾いくつともなく竝ならび居ゐたりしに、

思おもひきやこの破家あばらやに斯かくの如ごと

美うつくしき廣ひろき居間いまのあるとは

暫しばくをこれの館やかたに休やすらひつ

勇いさみ火炎くわえんの山やまに進すすまむ

松まつは歌うたふ。

草くさを分わけ坂さかを辿たどりて吾わが足あしは

輕かろき疲つかれを覺おぼえけるかな

この家いへに息いきを休やすめて魂たましひを

よび生いかしつつ進すすみ行ゆくべし

不思議ふしぎなる館やかたなるかも表おもてとは

案あんに相違さうゐの居間ゐまの數々かずかず

もしやもし譏そしり婆ばばアのたくらみに

かかりしものかと案あんじらるるも』

竹たけは歌うたふ。

譏そしり婆ばばの館やかたなりしは幸さいはひよ

幸さいはひ眞ま晝ひるのことにありせば

此この家いへに譏そしり婆ばばアがひそむなら

生いのち命のちかぎりに戦たたかひて見みむ

此この家いへの表おもてに乙をとめ女いつはしら五ご柱ちゆう

立たてるも一ひとつの不ふ思し議ぎなりけり

鬼おに婆ばの潜ひそめる館やかたと思おもはれず

斯かかる優やさしき乙をとめ女す住すむやをを

梅うめは小こ首くびを傾かたむけながら歌うたふ。

㊦ 惡あく神がみの畏わなにい入いりしか何なんとなく

吾わが魂たましひは落おち着つかぬかも

八や十そ曲ま津が神つかみの住すみ家かと知しるならば

力ちから限かぎりに戦たたかひて見みむ

悪神は優しき乙女と見せかけて
吾等が生命を窺ひ居るにや
不思議なる事ばかりなり此家は
窓もあらずに下に明るし

櫻は歌ふ。

疑へば限りなからむ此家を
吾は曲津の住家と思はず
破家の表に乙女あらはれて
笑を湛へて吾を迎へし
皇神の御言かがふり出でで行く
この旅立にさやる曲津なし

斯く歌ひ居る折しも、秋風を先頭に四人の乙女は入り来り、盆に茶を汲みながら、目の上高く差上げ、破家に憩はせ給ふ客人に心ばかりの茶を奉る。

『この茶は泉の山の高畑に

榮えて甘き薬なりけり

それ故に普く人は泉茶と

稱へて朝夕樂しみ飲むなり

この茶を召上りませ長旅の

疲れは頓に休まるべきを』

秋男は怪しみながら、

『何處となくこの茶の香りは怪しけれ
暫く時を待ちてすすらむ』

秋風あきかぜは稍やや顔色かほいろを變かへながら、

不ふ思し議ぎなることを宣のらすよこれの茶ちやは
泉いづみの茶ちやにて人ひとの生命いのちよ〆

秋男あきををは答こたふ。

何なんとなく吾われは生命いのちの惜をしさ故ゆゑ
見み知らぬ茶湯ちやゆは飲のみたくはなし〆

野分のわきといふ乙女をとめは涼すずしき聲こゑにて、

客人まらうどは吾等われらが眞心まじこころ疑うたがひて
清きよき優やさしき心こころを受けずや

朝あさに夕ゆふに清きよめすまして作つくりたる
これの茶ちやの湯ゆに毒どくのあるべき

松まつは歌うたふ。

乙女等をとめらの清きよき心こころを受うけぬには
吾われあらねども暫しばしを待またせよ
あつき湯ゆは吾われは好このまず舌したやかむ
ぬるむを待まちて吾われは飲のむべし

夕霧ゆふぎりは後あとよりのび上あがりながら、

乙女等をとめらの清きよき心こころを疑うたがひて
吾等われらの誠まことをうけ給たまはずや

水すい奔ほん草さうの茶ち湯やゆと思おもひて客まらうど人は

ためらひ給たまふと思おもへば怨うらめし

萩はぎ桔ぎ梗ぎやう匂におへる秋あきの山やま裾すそに

館やかた造つくりて君きみ等らを待まちしよ

吾われこそは御み樋ひ代しろ神がみに仕つかへたる

五いつ乙をとめ女をにて怪あやしきものならず

竹たけは歌うたふ。

御み樋ひ代しろの神かみの乙をとめ女をか知しらねども

汝なれが面おもてにあやしきふしあり

折をり々に乙をとめ女をの耳みみは動うごくなり

まさしく狐こ狸りの化け身しんと思おもふ

茶ちやの色いろは次しだい第だい々だい々に變かはり行ゆきて

墨すみの如ごとくになりなりにけらしな
此この茶ちやこそ水すい奔ほん草さうにてつくりたる
生命いのちを奪うばふ毒どく湯ゆなるべし
『

朝霧あさぎりは歌うたふ。

斯かくなれば最早もはや詮せんなし吾々われわれは
乙女をとめと見みゆれど曲津まがつかみ神かみなり
』

秋雨あきさめは歌うたふ。

客まらうど人に看みやぶ破やぶられたるその上うへは
最早もはや詮せんなし覺悟かくご召めされよ
破家あばらやと見みゆれど永遠とほの巖窟がんくつよ

最早逃れる道はあるまじ

梅は聲もあらあらしく歌ふ。

吾とても汝が謀計を知りし故

これの巖窟を破らむと來つる

乙女子の姿を装ひ鬼婆の

命に従ひ謀る曲もの

櫻は怒りながら、

コリヤ曲津もうかうなれば是非もなし

吾言靈に飽くまで放らむ

秋男は歌ふ。

吾も亦曲津の巖窟と知りしゆゑ

殊更に此處に誘はれ入りぬ

乙女子と見ゆるは何れも水奔鬼の

生命奪ふと待てる奴なり

譏り婆に水奔草を飲まされて

汝等は鬼となりしものなり

吾言靈心鎮めて聞けよかし

譏り婆アに怨み持たずや

秋風は稍顔を曇らせて、

客人の言葉は宜よ吾も亦

譏そしり婆ばばアに謀はかられにけり

この邊あたりは譏そしり婆ばばアの繩なはばり張はりよ

吾われ等は彼かれに頭いし使しさるるもの

玉たまの緒をの生命いのちとられし悔くやしさに

人ひとを艱なやむる鬼おにとはなりぬ

此こ處こに居ゐる四よにん人の乙をとめ女ことごとも悉ことごとく

吾われと等ひとしき運うんめい命めいたどりし

奥おくの間まに譏そしり婆ばばアは傷きずつきて

休やすらひ居をりぬ亡ほろぼし給たまへ

譏そしり婆ばばをきたため給たまはば吾われ等また亦また

君きみに力ちからを添そへ奉まつるべし

力ちから強つよき鬼おに婆ばばながら昨さくや夜やより

不ふ快くわいなりとて呻うめ吟めき居ゐるなり

松は歌ふ。

吾君の生言靈に打出され

婆はいたでに悩むなるらむ

面白し斯くも祕密を聞く上は

乙女に吾等は力を添へむ

面白き事を聞くかな鬼婆は

これの館に呻吟き居るとは

斯くならば力の限り聲かぎり

生言靈に攻め艱まさむ

間を四方より取巻き、天地も破るるばかりに大音聲を發し、
茲に秋男の一行五人と五柱の乙女、互に堅き握手を交はし、
譏り婆の潜める居

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

百千萬八千萬の神

此の館に潛みたる

譏り婆なる水奔鬼を

吾言靈にくまもなく

亡ぼし給へ惟神

吾言靈に力あれ

吾言靈に光あれ

アオウエイ

カコクケキ

と次々に七十五聲の言靈宣れば

さすがの水奔鬼も堪りかね

狭き室内を右往左往に荒れ狂ひ

悲鳴を擧げて又もや再び起上り

死物狂ひの形相凄じく

秋男に向つて飛びかかるを

ものをも言はず拳を固め

婆の横面を打ちすゑ打ちすゑきためければ

さしもの婆も痛さに堪へ兼ねてや

窓の戸にはかに押開けて

忽ち巖窟内を飛出し

怪しき雲氣を吐きながら

雲を霞と大空さして

血煙の雨を降らせつつ

跡白雲と逃げ行きぬ

ああ惟神言靈の

嚴の力ぞ畏けれ

譏り婆アの水奔鬼は

斯かくして五人ごにんの乙女をとめの精靈せいれいを
醜しこの巖窟がんくつに残のこし置き
第二だいにの作戦さくせんに移うつらむと
逃にげ行ゆきしこそ恐おそろしき。

五いっ乙女をとめは満面まんめんに笑えみを湛たたへ、胸撫むねなで下おろし、「ウオウオ」と叫さけびつつ、手ての舞まひ足あし
の踏ふむ所ところを知らぬばかりなりける。

秋風あきかぜは歌うたふ。

吾われこそは泉ヶ丘いづみがをかに生うまれたる

國津神等くにつかみらの娘むすめなりけり

四柱よはしらの乙女をとめも同おなじ里さとの子こよ

この鬼婆おにばばに謀はかられしもの

水奔草すいほんさうの茶ちやを飲のまされて吾々われわれは

水奔鬼すいほんきとはなりにけらしな
客人まらうどに此茶このちやをささげ吾われと共にとも
力ちから協あはすと勸すすめけるかな。

思おもへば春はるの初はじめなり
吾等われら五人ごにんの乙女等をとめらは
泉いづみの里さとを立たち出いでて
高たか光みつ山やまに詣まうでむと
進すすみ來きたれる折をりもあれ
旅たびの疲つかれに咽のど喉どかわき
苦くるしむ折をりしも森蔭もりかげの
一ひとつの小ちひさき家いへを見みて
吾等われら五人ごにんの乙女等をとめらは

立寄り見れば白髪の
一人の婆さんが住まひ居て
先づ先づ澁茶を召がれよと
手招きしたる嬉しさに
暫く息を休めつつ
水奔草の茶と知らず
吾等は一度に飲み乾しぬ
俄に頭は痛み出し
手足身體腫れ上り
身動きならぬ状態を見て
婆はニツコと打ち笑ひ
吾計略にかかりしよ
汝乙女の玉の緒の
生命は最早今日かぎり

葭原よしはらの國津神くにつかみら等の生命せいめいを

残のこらず取りとりて幽界いうかいの

眞正まことの鬼おにとなせよかし

吾われの言葉ことばに反そむきなば

茨いばらの鞭むちを振りふり上げあげて

汝なんぢが全身ぜんしん打ちうち破やぶり

つらき目め見みせて呉くれむずと

威おどしの言葉ことばに怖おそぢ恐れおそ

彼かれが教をしふるままににして

悲かなしき月つき日ひを送おくり來きぬ

秋男あきをの君きみは現世うつしよの

人ひとにしあれば言靈ことたまの

力ちからは強つよし吾々われわれは

精靈界せいれいかいにある身みなれば

其言靈そのことたまに力ちからあるべき

言靈ことたまの光ひかりは出いでず苦くるしみぬ

心こころの中うちにて泣なくばかり

救すくはせ給たまへ水みな上の

山やまに輝かがやく巖いはヶ根がねの

御子みことあれあれます秋あき男神をがみの

御前みまへに願ねがひ奉たてまつる

五人ごにん乙女をとめは鬼婆おにばばの

頭使いしに甘あまんじ仕つかへつつ

強つよき身魂みたまの來訪らいほうを

待まちに待まちたる甲斐かひありて

恨うらみを晴はらす時ときは來きぬ

ああたのもしや心地こころちよや

月見つきみヶ丘がきの聖場せいぢやうに

汝等なれらが一行いっかう悉ことごとく

艱なやまし呉くれむと計たく畫かくみしを

譏そしり婆ばはアは逆さかしらに

生いく言こと靈たまに打うち出だされ

生いのち命のちからがら逃にげ歸かへり

一ひと閒まに呻うめ吟め居ゐたりしゆ

此この時ときこそは幸さいはひと

五ご人にん乙をとめ女めは謀しめし合あはせ

仇あだを打うたむと思おもへども

素もとより乙をとめ女めの力ちからには

手て向むかふ由よしもなかりけり

かかる處ところへ現うつ身そみの

身からだ體たまもたす汝なれ一いっ行かう

來きたらせ給たまふ嬉うれしさに

毒と知りつつ水奔草の
湯を勧めむとしたりけり
必ず怒らせ給ふなかれ
君を力と思ふが故に
吾等と共に幽界に
現はれまして鬼婆を
討ち罰めつつ靈界の
禍ひ除くと思へばなり
許させ給へ秋男神
御供の神の御前に
真心あらはし詫び奉る
外の乙女も同じ心の捨小舟
取りつく島もなかりしが
今日の吉き日の喜びに

蘇^{よみがへ}りけりあら尊^{たふと}

偏^{ひとへ}に感謝^{かんしゃ}し奉^{たてまつ}る

是^{これ}より君^{きみ}は言^{こと}靈^{たま}の

天^{あま}の數^{かず}歌^{うた}うたひつつ

火^{くわえん}炎^{えん}の山^{やま}に進^{すす}みませ

譏^{そし}り婆^ばさんの第^{だい}一^{いち}に

恐^{おそ}れて忌^いむは言^{こと}靈^{たま}よ

吾^{われ}は後^{あと}より蔭^{かげ}ながら

君^{きみ}の出^いで立^たち送^{おく}りつつ

一^{いっ}臂^びの力^{ちから}を添^そへ奉^{まつ}らむ

進^{すす}ませ給^{たま}へ

と言^いひながら、五^ご人^{にん}の乙^{をと}女^めは白^{はく}煙^{えん}となりて消^きえ失^うせにけり。
蔭^{かげ}の雜^{ざつ}草^{さつ}の生^おひ茂^{しげ}る中^{なか}に一^{いっ}行^{かう}は腰^{こし}を下^{おろ}してうづくまり居^ゐつ。

破^あ家^{はら}の蔭^{かげ}も見^みれば、森^{もり}
破^あ家^{はら}の蔭^{かげ}も巖^{いは}窟^やも跡^{あと}

形なく、小鳥の囀り、蟲の啼く音ばかりなりける。
秋男は歌ふ。

不思議なる夢を見しより鬼婆の

悩める状態を覺らひにけり

破家も巖窟も全く消え失せて

野邊吹く風の音さやかなり

(昭和九・七・二七 舊六・一六 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

第一章 火炎山(二〇一五)

秋男の一行は毒草の生ひ茂る野を右に左に分けながら、夜を日に次いで前進し、

三日目の黄昏時、漸く火炎山の麓に辿り着きぬ。火炎山は音に名高き大火山にし
て、夜は大火光百里に亘り、時ありて焼石を降らし、人獣を害すること甚し。葭
原の國津神等は一名地獄山と稱へて恐れてゐる。

この山はあらゆる猛獸毒蛇の棲處にして、譏り婆アの本處なり。

忍ヶ丘にて思はぬ不覺をとりたる笑ひ婆も、ここに逃げ來り譏り婆の館に身を
まかせて、靈身の傷を癒して居た。

秋男は國內に繁茂せる葭草や水奔草を、火山の火をとりて風に乘じ焼きはらひ、
猛獸毒蛇を悉く焼きつくさむと考へ、一先づここに進み來れるなりき。

黄昏時とは言へ山頂より噴出する火光に晝の如く明く、草の根に潛む蟲の影さ
へ明瞭に見ゆるばかりなり。

秋男は噴火の莊嚴なる様を見て、芝生に腰腰ち下し歌ふ。

㊦ 火炎山吐き出す焰の光りにて

これのあたりは夜なかりける

濛々もうもうと黒煙こくえんのぼる間まを縫ぬひて

紅蓮ぐれんの舌したは天てんに冲ちうせり

この山やまの火種ひだねを取とりて葭原よしはらの

國くに土にの醜草しこくさ燒やき拂はらふべし

猛獸まうじう毒蛇どくじや數多あまた棲すむてふこの山やまを

いかに登のぼらむ噴火ふんくわ口こうまで

大空おほぞらの月つきの光ひかりの褪あするまで

天てんに冲ちうする火炎くわえんの焰ほのほよ

譏そしり婆ばばの棲處すみかと思おもへば肝向きもむかふ

心こころ固かためて山やま登のぼりせむ

火ひの種たねのひと一つありせば葭原よしはらの

國くに土にを拓ひらくはたやすかるべし

連日れんじつの旅たびに疲つかれて吾足わがあしは

動うごかずなりぬ暫しばし休やすまむ

松は歌ふ。

音おとに聞きく火炎くわえんの山やまの噴煙ふんえんは

天津御空あまつみそらにとどくかと思おもふ

黒煙こくえんの中なかに紅蓮ぐれんの舌見したみえて

もの凄すごきかな火炎くわえんの山やまは

譏そしり婆ばばの配下はいかは如何程いかほどあるとて

一つの火種ひだねに焼やき亡ほろぼさむ

鬼婆おにばばの棲處すみかを焼やきて冬男君ふゆをぎみの

仇あだを報むくふと思おもへば勇いさまし

秋あきの野のの蟲むしの聲こゑ々こゑさはやか

聞きえ來くるなり地獄ぢごくの山やまにも

久方ひさかたの御空みそらの月つきは見みえねども

晝ひるにまさりて明あかき國原くにはら

譏そしりばばこの高山たかやまの巖窟がんくつに

住すむと思おもへば恐おそろしき奴やつ

恐おそろしく心こころ汚きたまくしぶときは

婆ばばアにまさるものなかるらむ

婆ばばと言いふ名なを聞きくさへも何なんとなく

いまはしき心こころ湧わき出いでにけり

殊ことさら更さらに譏そしりばばアの曲言まがことば葉

聞きくさへ胸むねが悪わるくなるなり
□

竹たけは歌うたふ。

火くわえんざん炎は山吐だき出ほのほす焰ながを眺ながむれば

吾われ勇いさましく心こころときめく

頂いただきに驅かけ登のぼりつつ火ひの種たねを

取りて歸れば國土定まらむ

如何にしても火炎の山の頂上を

極めずに吾歸るべしやは

幾萬の水奔鬼の群來るとも

生言靈に追ひ退けむ

武士の彌猛心はもえ立ちぬ

火炎の山の焰の如くに

傷つきて呻吟きゐるらむ此山の

醜の主の譏り婆アは

言靈のいたく濁れる鬼婆の

譏り言葉は吾耳汚せり

はてしなき大野ヶ原を涉り來て

今日は火炎の山にやすらふ

吹く風もなまぬるくして心地悪し

水奔鬼すいほんきの群窺むれづかがへるにや

水奔鬼すいほんき浮塵うじん子の如ごとく寄よするとも

大丈夫ますらを吾われはびくとも動うごかず

大丈夫ますらをの彌や猛たけ心の切きつ先に

寄よせ來くる鬼おにを突つき伏ふせて見みむ

いさましく天てんに冲ちゅうする火炎くわえんにも

まさりて雄を々をしき吾わがみたまなり

おもしろしああ勇いさましし今いまよりは

譏そしり婆ばばアの棲處すみかを突つかむ

梅うめは歌うたふ。

水みな上なみの山やまを立たち出いで日か々がなべて

火炎くわえんの山やまに漸やうやく來きつるも

火炎山の噴煙見れば吾魂は

天にのぼるが如く榮ゆる

晝の如明るき野邊の風景は

火炎の山の火光のたまもの

夜されど火炎の山の燈に

闇は來らじ戰によし

黒煙の中より赤き火の舌は

北吹く風になびきゐるかも

櫻は歌ふ。

この山に冬はなからむほのぼのと

麓の風さへ暖かなれば

木も草も見えわかぬ迄茂りたる

わが計略けいりやくにくたばりし冬男ふゆをの兄あにの秋男あきをなるか。吾われこそは忍しのヶ丘ぶがをかに長ながく棲すみ居ゐし笑わら
ひ婆ばばの水奔鬼すいほんきぞ。よくもまあ迷まよふてうせた。討うつは今いまこの時とき、冬男ふゆをの恨うらみを兄あにの
秋男あきをに報むくふてくれむ。ヤアヤア手下ごにんども、五人ごにんの餓鬼がきどもを片かたつ端はしからふん縛しばり、
火炎くわえんの山やまの火口くわこうに放ほり込こめ、アハハハハハハハハハハ心地こちよやな〆
と、さも憎にく々にくしげなる高聲響たかこゑひびき來きたる。秋男あきをはこの聲こゑに足あしの疲つかれも忘わすれ、すつくと
立上たちあがり、

□ 弟おとうとの消息せうそく今いまや悟さとりけり

笑わらひ婆ばばアに謀はかられ死しせしか

吾われこそは珍うづの武士ものふいかにして

弟おとうとの仇あだを報むくはであるべき

水奔鬼すいほんきの笑わらひ婆ばばアの棲處すみかとは

知しれどここに會あふとは思おもはざりしよ

あらためて笑わらひ婆ばばアに言問こととはむ

譏り婆アの棲處はいづれぞ」

「アハハハハハハ、イヒヒヒヒヒヒ

馬鹿なことを申すな。譏り婆はこの方の妹、今ここに立つて居るのが汝の目には

分らぬか、盲ども、もうかうなる上は網にかかった魚も同然、吾等は手下を呼び

集め、心のままに翱り殺し、てもさてもあはれなものだワイ。

イヒヒヒヒヒヒ、オホホホホホ」

松は怒り心頭に達し、聲もあらあらしく、

「おもしろし笑ひ婆アに譏り婆

只一打に亡ぼして見む

吾敵はここに集りゐると聞く

手閒暇いらぬ今宵の戦ひ」

竹は歌ふ。

□ 水奔鬼いかに群がり攻め來とも

彌猛心に突き亡ぼさむ

斯く言ふ折しも、不思議なるかな、火炎山の噴火はピタリと止まり、四邊は眞闇、秋男の一行は進退維谷まり、大地にどつかと坐し、雙手をくんで暫し思案にくれて居たり。

暗がりの中より笑ひ婆は、顔の輪廓ハツキリと現れ來り、長き舌を出しながら秋男の前近く寄り來り、

□ アハハハハハハ、イヒヒヒヒヒヒ

もうかうなればこつちのもの、覺悟致して毒茶を飲め、さあ喜んで喰へ
と言ひながら、大いなる瓶より毒茶を秋男の面上に注ぎかける。

秋男はたまりかねて兩手を以て面を覆ひ心の中にて、

□ ひとふたみよいつむゆななやこのたり
一二三四五六七八九十

ももちよろづちよろづ
百千萬千萬の神

まもたまたすく
守り給へ救ひ給へ

と奏上するや、笑ひ婆の面は忽ち消え失せ、遙の方よりいやらしき笑ひ聲聞ゆるばかりなり。

後方より譏り婆の聲、

□ ギヤハハハハハハハハ、ギユフフフフ

腰ぬけ野郎の秋男の一行ども、思ひ知つたか、譏り婆のお手竝は此通り、斯くな

る上は何程もがくも泣くも追ひつくまい、さてもさても小氣味のよい事だワイ。

ギユフフフフフフこの婆は水奔鬼の中でも最も力のある御方ぞや。それに何ぞ

や、小さき人間の身として、譏り婆を征伐するとは片腹痛い。もうかくなる上は

こつちの自由、てもさてもあはれな腰ぬけ野郎だな

秋男は無念やる方なく、生命を的に聲する方に向つて拳を固め飛びつく途端、

闇やみの落おとし穴あなにどつとばかり落おち込こみにける。

譏そしり婆ばばは又またもや大おほ聲こゑにて、

「ギヤハハハハハハ、てもさても小こ氣ぎ味みよし、秋あき男をの野や郎らうはこの方ほうの計けい略りやくにかかり、もろくも生いの命ちを落おとしよつた。それでも俺おれの輩けらい下ひが一人ひとり殖ふえたと申ますもの、後あとの四よ人にんの餓が鬼きどもはさアどう致いたす、降かう参さん致いたして俺おれの部ぶ下かとなるかどうだ、返へん答たふいたせ、ギヤハハハハハハ、よもや手て向むひよう致いたす力ちからはあるまい」

松まつ、竹たけ、梅うめ、櫻さくらの四よ人にんは、一いつ齊せいに譏そしり婆ばばの聲こゑする方ほうへ突とつ進しんする途と端たん、あはれや一度いちどに闇やみの奈なら落らくに墜つ落らくし、可あ惜た現う身つの生いの命ちを失うひける。

火くわ炎えんの山やまは再ふたび噴ふん煙えんを吐はき出だし、火くわ光くわ天わうに冲ちうし、さも物もの凄すこき光くわ景けいなりける。

秋あき男をの一行いつかうは闇やみの落おとし穴あなに墜つ落らくし、果は敢かなくも現う身つの生いの命ちを失うひけるが、その精せい靈れいは不ふ老らう不ふ死しにしてここに復ふ活くわし、五ご人にん一いち度どに首くびを鳩あつめ、婆ばばの奸かん策さくにかかりし

ことを恨うらみ居ある。

秋あき男をはかすかに歌うたふ。

思ひきや火炎の山に辿り来て

かかる歎きに今遭はむとは

斯くなれば吾等も同じ水奔鬼の

群に入りしか思へばくやしき

水奔鬼にたとへなるとも吾心

彼の鬼婆をきたため置くべき

汝も亦吾と同じく鬼婆に

玉の生命を奪はれけるよ

この上は五人力を一つにし

二人の婆を打ち亡ぼさばや

松は歌ふ。

吾君の仰せ畏しこの恨み

吾等はむくはで止むべきならず
悪神の謀計の罠に陥りて
果敢なくなりし吾はくやしも

竹は歌ふ。

地獄山麓の穴に陥りて

玉の生命を捨てにけらしな

身體はよし失すとも精靈の

生命は長し恨みをむくいむ

武士の彌猛心も斯くならば

暫しは詮すべなからむと思ふ

梅は歌ふ。

力ちからよわきことを宣のらすな精靈せいれいと

言いへども吾等われらは雄々をしき大丈夫ますらを

大丈夫ますらをの堅かたき心こころはよしよし

生命いのち死しすともひるまざるべし

水上みなかみの山やまにあれます御父おんちちは

歎なげかせ給たまはむ二人ふたりをとられて

吾父わがちちも母ははも歎なげかむ火炎山くわえんざんの

鬼おにに生命いのちをとられしと聞ききて

さりながら吾等われら五人ごにんの言靈ことたまに

醜しこの鬼婆おにばたひら平ひらげて見みむ

櫻さくらは歌うたふ。

思おもはざる不覺ふかくを取とりて主從しゅじゅうは

あたらし生命を失ひにけり

さりながら吾精靈はかくの如

生きてありせば恐るるに足らず

どこ迄も婆アの生命取らざれば

大丈夫吾等の意気地は立たず

八千尋の深き穴底に落されて

生命亡せしと思へば恨めし

この恨みやがてはらさむ笑ひ婆

譏り婆アの首引きぬきて

斯く主従五人は、今更の如くあたらし生命を奪はれたるを怒り且つ歎き、仇を報
ずべきを語り合ひつつ、千尋の深き穴の底に佇んで居る。

時こそあれ、いづくともなく、いやらしき笑ひ婆の笑ひ聲、譏り婆の破鐘の聲、
物凄く響き来る。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

第一二章 夜見還(二〇一六)

四邊黯澹として聲もなく、天低う妖雲垂れ下りて一陣の風もなし。蒸し暑き事
釜中を行くが如く、陰鬱の空氣漲り、全身脂汗にじみ、形容し難き苦しき中を、
葎草と水奔草の生ひ茂る荒野ヶ原を進みゆく一人の男ありけり。

ああいぶかしやいぶかしや

水上山を立ち出でて

幾夜を重ねる草枕

怪しき事の數々を

目撃しつつ黄昏に

火炎くわえんの山やまの麓ふもとまで
進すすみ來きたれる折をりもあれ
天てんに冲ちっする大噴火だいふんくわ
忽たちまちとどまり暗黒あんこくの
幕まくは四邊しへんを包つつむよと
見みるまもあらず譏そしり婆ばば
笑わらひ婆ばばアの水奔鬼すいほんき
闇やみの幕まくをば距へだてつつ
怪あやしき事ことの數々かずかずに
笑わらひ罵ののしるにくらしさ
われ等らは腹はらに据すゑかねて
闇やみに向むかつてつき込こめば
思おもひがけなや八千尋やちひろの
地底ちそこの穴あなに陥おちいりて

苦し^{くる}しみもだゆる折^{をり}もあれ

續^{つづ}いて落ち込^こむ松^{まつ}、竹^{たけ}、梅^{うめ}

櫻^{さくら}の四人^{よにん}も現世^{うつしよ}の

生命^{いのち}は空^{むな}しくなりにけり

此處^{ここ}にも怪^{あや}しき婆^{ばば}の聲^{こゑ}

いぶかしさよと思^{おも}ふ折^{をり}

わが言^{こと}靈^{たま}にいち早^{はや}く

この場^ばを去^さりしと思^{おも}ひきや

かか^ある怪^{あや}しき大野原^{おほのはら}

悲^{かな}しく淋^{さび}しく一人^{ひとり}ゆく

あ^{かむ}あ^{ながら}惟^{かむ}神^{ながら}々々

神^{かみ}の此世^{このよ}にましまさば

わが^ゆ行く先^{さき}を明^{あき}らかに

天地^{てんち}の妖氣^{えつき}を吹^ふき拂^{はら}ひ

示しめさせ給たまへと願ねぎまつる
天地てんち静しづかに風死かぜしして
わが身からだ體たまの全ぜん部ぶより
熱湯ねつたうの汗あせはにじみ出いで
痒かゆさ苦くるしさ堪たへがたし
ここは地獄ぢごくか八衢やちまたか
合がてん點ゆの行ゆかぬ事ことばかり
正まさしく幽冥いゆうめいの道みちならば
わが弟おとうとに出會であふならむ
冬ふゆ男をとこ戀こひしや、なつかしや
精靈みたまとなりて生いくるなら
われわれの悲かなしき心根こころねを
思おもひ計はかりて來きたれかし
汝なんぢの仇あだを討うたむとて

悪魔あくまの婆ばばに謀はからはれ

尊たふとき生命いのちを捨すてにけり

思おもへば思おもへば憎にくらしや

譏そしり婆ばばアあに笑わらひ婆ば

たとへ幽界かくりよなればとて

これこれの悪魔あくまを殲滅せんめつし

精靈界せいれいかいを悉ことごとく

清きよめ澄すまして天國てんごくの

貴うづの門戸もんことなさしめむ

ああかむながら惟かむながら神々々

恩みたまのふゆ頼ねを願ねぎまつる

高たか光みつ山やまは遠とほくとも

火くわえん炎やまの山やまはさかしとも

如何いかでひるまむ靈魂たましひの

生命いのちのあらむ其その限り

登のぼらなおかぬ大丈夫ますらをの

彌やたけ猛心まごころをみそなはし

天地てんちに神かみのいますなら

わが願ねぎ言ことを詳まつ細ぶさに

聞きこし召めさへと願ねぎまつる』

斯かくうたひつつ前ぜん進しんすれば、血ちの如ごとき色いろを爲なせる濁だく水すいの流ながるる大川おほかはにつと行ゆき

當あたりたり。秋あき男をとこは如い何かにしてこの濁だく水すいを渡わたらむかと、岸きし邊へに佇たたずみ、頭かしらを傾かたむけ、腕うで

を組くみ、太ふとき溜ため息いき吐はきながら、微かすかに歌うたふ。

幽い界かいの淋さびしき道みちをたどり來きて

血ち潮ほ流ながるる川かは邊べに來きたりぬ

滔たう々と流ながるる水みづは悉ことごとく

悪臭交りて胸ふさがりぬ
汚れたる此の血の川を渡らむと
われは思はじ如何になるとも
人の身の宿世思へば悲しけれ
わがたつ涙川と流れつ

斯く歌ふ折しも、傍の葭草の枯葉をそよがせながら、瘦せこけた老婆、藜の杖
をつき海老腰になりながら、秋男の前に現はれ來り、全身を見上げ見下し、「ゲ
ラゲラ」と打ち笑ひ、

「この婆はそちが生命を奪ひたる

譏り婆アの分けみたまぞや

よくもまあ迷ひ來しよなこの川は

膿血と痰の集りなるぞや

秋男は歌ふ。

思ひきや紫微天界の眞秀良場の

この葭草に地獄ありとは

よしやよし地獄の旅を續くるとも

われは進む高光山へ

婆アは顎をしゃくりながら、

この婆は瘡と申す水奔鬼

此處に来る奴なやめて樂しむ

来る奴は一人も残らずわが爲に

瘡を病みて死ぬる嬉しさ

其方は精靈なれどこの婆の

恵めぐみによりて瘡おこりをふるへよ」

秋男あきをは冷然れいぜんとして、

「かくなればわれは恐れじ瘡婆おこりばばの

靈たまの生命いのちを伐きり放はるべし」

婆ばばアはこの歌うたに眼めを釣つり上げ、口くちを尖とがらし、秋男あきをが側近そばちかく寄より添そひ、氷こほりの如ごとき冷つめたき手てにて、秋男あきをの左さ右いうの手てをグツと握にぎり、憎にく々にくしげに、

「こりや秋男あきをの餓鬼がき、俺おれを何方どなたと心得こころえてゐるのか。血ちの川かはの主ぬし、水奔鬼すいほんきの瘡婆おこりばばアといふは此方このほうの事ことだ。さア、これからは其方そちの靈たまの生命いのちをとり、血ちの川かはに水葬すいさつしてやらう。有難ありがたく思おもへ」

秋男あきをは、

何なにをするか氷こほりの如ごとき瘦腕やせつでに

われもろての兩手はなを離おにさぬ鬼婆おにばば

鬼婆おにばばの醜みにくき姿すがた一目ひとめ見て

われは吐はき氣けを催もよほしにけり』

婆アばばは、

何なにをこしやくな、俺おれの顔かほを見て吐はき氣けを催もよほすとはよくも言いへたものだ。やい糞くそが

袋くろ、痰壺たんつぼ、小便しょうべんのタンク奴め、左様さやうな太平樂たいへいらくを聞きく鬼さんおにぢやないぞ。サアこれか

ら其方そのほうの皮衣かはころもをはぎ、腕うでをぬき、骨ほねを引ひき切り、川瀨かはせの亂杭らんぐひに使つかつてやらうぞ。

それがせめても貴様きさまにとつての幸さいはひ、罪滅つみほろぼしといふものだ。ギヤハハハハ、あ

のまあむづかしい、青黒あをくろい、悲かなしさうな顔かほわいのう、イヒヒヒヒ』

秋男あきをは進退しんたいこれ谷きはまりて如何いかんともする術すべなく、途方とほうにくれたる折をりもあれ、松まつ、

竹たけ、梅うめ、櫻さくら四人よにんの精靈せいれいは此場このばに現あらはれ來きたり、秋男あきをが瘡婆おこりばばアに苦くるしめられてゐる體ていを

見みて、驚おどきながらバラバラと婆アばばを取りとりかこみ、

☐ はて不思議譏り婆アによく似たる
ここにも鬼が現れしぞや
よく見れば秋男の君の手をつかみ
苦しめ居るか悪たれ婆ア奴

秋男は細き聲にて顔をしかめながら、

☐ この婆に苦しめられてゐるところ
汝等四人はわれを救へよ

松は應へて、

☐ 若君の悩みを見つつ如何にして
われ等四人もだし居るべき

わが力あらむ限りをこの婆の

頭上にくはへて打ち据ゑて見む

竹よ梅よ櫻よ來れ此の婆を

只一息に打ちなやまさむ

四人は一度に拳を固め、婆アの面部をめぐけて打ち据ゆれば、如何はしけむ、

婆アはビクともせず、四人の拳よりは血潮タラタラと流れ出で、痛き事堪へ難し。

瘡婆は冷笑し、

「ギヤハハハハ、この方を何方様と心得てゐるか。岩より固き水奔草の司、この

川の邊に棲處を固め、先に廻つて汝等が迷ひ來るを待つてゐた。笑ひ婆アや譏り

婆アの一味の者だよ。もうかうなる上は覺悟を致せ。往生致さねば此上辛き目見

せてくれむ。さあ返答はどうぢや。イヒヒヒヒ、てもさても心地よやな」

五人はここに進退維谷まり、如何はせむと案じわづらふ折もあれ、忽ち空をど

よもして進み來る一炷の火團、轟然たる響とともにこの川の邊に落下したり。こ

の出来事に、癩婆アの影は雲霧と消えて跡形もなく、よくよく見れば、依然として火炎山の麓の譏り婆が造り置きたる陷弃の底に主従五人横たはり居たるなりけり。

秋男は歌ふ。

いぶかしや悪魔の罠に陥りて

死せしと思ひしは過なりしよ

身體の生命ありせばこれよりは

この陷弃を傳ひ上らむ

松は歌ふ。

有難し神の恵の幸はひに

われは罷らずありにけらしな

常磐木ときはぎの松まつの心こころをはげまして

冬男ふゆをの君きみの仇あだを酬むくはむ

玉たまの緒をの生命いのち失うせしと思おもひしを

神かみの恵めぐみに生いきてありけり」

竹たけは歌うたふ。

㊦ 大丈夫ますらをわれ生いきてありけり穴あなの底そこを

傳つたひ上あがりて再ふたび活はた動たらかむ

玉たまの緒をの生いきの生いのち命のある限かぎり

災わざはひをなす鬼おにをやはむ

飽あくまでも初しよ心しんを貫くわん徹てつなさざれば

益ます荒すら猛たけ男をの胸むねの晴はるべき」

梅は歌ふ。

□ 兔も角も蘇りたる嬉しさに
われは言葉も絶え果てにけり

櫻は歌ふ。

□ 火炎山麓にすめる譏り婆アの
たくみ果敢なく破れけるかな
曲鬼は闇に陥穽作り居て

わが一行をなやまさむとせり
男の子われ生きの生命の續く限り
神國の爲に曲亡ぼさむ

秋男は歌ふ。

□ いざさらば生言靈を宣りながら

のぼ 上りゆかなむこの深穴を

ひとふたみよいつむゆななやこのたり
一二三四五六七八九十

ももちよろづやほよろづ
百千萬八百萬の神

まも 守らせ給へ

と、宣り終るや、地底は次第にふくれ上り、以前の樹蔭にたちかへりける。

あきを 秋男は歌ふ。

□ あめつち 天地の神の恵みの深ければ

もとつばしよ 元津場所に生きかへりたり

これからは五人心を協せつつ
曲の砦に攻めて上らむ」

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第一三章 樹下の囁き(二〇一七)

蘇りたる五人の一行は、火炎山の麓の籠り樹の蔭に息を休ませながら、
邊りの
風光を見やりつつ、朝明けの空に秋男は歌ふ。

秋の日の旅を重ねて今此處に
あしたの露の光れるを見つ
いろいろの鬼婆たちにさやられて

わが魂たましひの雄猛をたけびやまずも

うるはしき朝あさの眺ながめに吾魂わがたまは

よみがへりつつ雄猛をたけびするも

鬼婆おにばばの醜しこのたくみも何なにかあらむ

昇のぼる朝日あさひに消きえ失うせぬれば

曲津まがつ見みは光ひかりを恐おそれ闇やみの夜よを

たのみて伊猛いたけるはあはれなるかな

赫々かくかくと輝かがやき給たまふ朝津日あさつひの

光かげに亡ほろびぬ水奔すいほん鬼きの群むれ

木々きぎの梢露うれつゆを浴あびつつ瑠璃光るりくわうの

光保ひかりたもてり朝日あさひのかけに

黒雲くろくもを起おこしてわれを艱なやめてし

譏そしり婆ばばアのかけいづらなる

髪かみの毛けもよだつばかりの嫌いやらしさ

譏そしり聲こゑ出す醜しこの鬼婆おにばば

心地こちよき秋あきのあしたの山風やまかせを

浴あみつつ樂たのし曲津まがの棲處すみかも

さやさやに千花ちばな百花もばな吹ふきて行く

風かぜの音ね清きよくわが魂たま榮さかゆる

白萩しらはぎの所ところせきまで咲さき匂におふ

此山このやまもとに不思議ふしぎや鬼棲おにすむ

澄すみきらふ空そらの色いろかも山肌やまはだの

草木くさきの色いろは青あをみだちたり

攻せめ來きたる醜しこの曲津まがを悉ことごとく

生言靈いくことたまに言向ことむけ和やはさむ

大空おほぞらに黒雲くろくも起おこし荒すさびたる

譏そしり婆ばばアのはてあはれなる

高たかくとも登のぼり了おほせむ山やまの上への

火種ひたねをとりて國土くにを定めむ

血ちの川かはの側そばに立たちたる夢ゆめを見みて

鬼おにのたくみの深ふかきを悟さとりぬ

月つきも日ひも御空みそらに清きよく照てり渡わたる

今朝けさの休やすらひ清すがしきるかも

照てり渡わたる天津日あまつひのかげ浴あびながら

われは進すすまむ頂いただきさして

鳥とりの聲こゑ清すがしくなりて山やまの袖そで

吹ふく秋風あきかぜは涼すずしかりけり

何事なにことも神かみの御旨みむねに従したがひて

登のぼらむ山やまに曲津まがのあるべき

西にしを吹ふく風かぜにあふられ山袖やまそでの

尾花をばなは地つちに靡なびき伏ふしたり

奴婆玉ぬばたまの闇やみに伊猛いたける鬼婆おにばばを

生言靈の劍に放らむ
『

松は歌ふ。

野のに山やまに咲さく白萩しろはぎの花はな見みれば

鬼おにの心こころか風かぜにみだるる

優やさしかる姿すがたながらも白萩しろはぎの

花はなの亂みだれを見みるは憂うれれたし

吹ふく風かぜにもろく散ちりゆく白萩しろはぎの

花はなにも似にたる譏そしり婆ばばかも

秋山あきやまの草木くさきはいづれも紅葉もみぢして

北きた吹ふく風かぜに打うちふるふなり

果敢はかなきは風かぜに散ちり行く病葉わくらばの

すがたに似にたる鬼婆おにばばなるかも

穂薄ほすずきは何なにを招まねくか力弱ちからよわく

秋吹あきふく風かぜに倒たふされにつつㄣ

竹たけは歌うたふ。

鬼婆おにばばの館やかたに會あひし五人乙女ごにんをとめの

行方ゆくへはいづこ聞きかまほしけれ

精靈せいれいの身みにしあれどもわが旅路たびぢ

守まもると言いひし事ことは忘わすれじ

火炎山焰くわえんざんほのほは天てんに冲ちうすれど

此山裾このやますそは秋風あきかぜそよぐ

時々ときどきは唸うなりをたてて焼石やけいしを

四方よもに降ふらせる火炎くわえんの山やまかな

火ひの種たねの手てに入るいるまでは此山このやまを

われ等五人は離れじと思ふ
此山の頂雲に包まれぬ
悪獸毒蛇の集ひ居るにや

梅は歌ふ。

女郎花風にゆらげるさま見れば

貴の乙女よそほひ思ふ

萩桔梗紫匂ふ山裾に

朝日をあびて憩ふ樂しさ

来てみれば火炎の山の頂は

いよいよ遙けくいよいよ高し

もろもろの曲神集ふ此山は

心して行け言靈宣りつつ

櫻は歌ふ。

鬼婆の繩張りといふこの山は

怪しき事のみ次々起るも

さはあれど誠心に進みなば

如何なる艱みも安くのぼらむ

火炎山火種の一つ持つならば

此國原は安けかるべし

はろばると水上の山を立ち出でて

今日は魔神の軍に向ふも

笑ひ婆と譏り婆アの上

瘡婆アの夢を見しかな

婆といふ名を聞くさへも忌はしく

汚らはしくも思はれにける

秋男は歌ふ。

大丈夫の彌猛心を引き立てて
いざや登らむ火炎の山頂

と歌ひながら、松、竹を先頭に、梅、櫻を殿とし、壁立つ羊腸の坂道を、一歩々々
刻みつつ登り行く。

秋男は歌ふ。

ウントコドツコイ、ドツコイシヨ

火炎の山はさかしとも

悪魔の猛びは強くとも

如何で恐れむ大丈夫の

固き心を發揮して

此この急坂きふはんを登のぼるなり

尾花をばなは靡なびき百花ももばなは

わが行ゆく足あしの右左みぎひだり

清きよく匂におひて蟲むしの音ねも

いとさやさやに聞きこゆなり

ああ勇いさましや勇いさましや

天地あめつち開ひらけし始はじめより

例ためしもあらぬ山登やまのぼり

魍魎まじつや毒蛇びくじやは潜ひそむとも

生言いくこと靈たまの劍つるぎもて

斬きり放はならひつ葭原よしはらの

神國みくにの基き礎そを固かたむべく

山やまの尾をの上への火口くわこうまで

進すすまにやおかぬ大和魂やまとたま

進^{すす}めよ進^{すす}め、いざ進^{すす}め
天津^{あまつ}御空^{みそら}はいや高^{たか}し
地^ち上^{じやう}を伏^ふして眺^{なが}むれば
黄^こ金^{がね}の野^の邊^べは天津^{あまつ}日^ひの
光^{ひか}りを浴^あびてきらきらと
目^め路^ぢの限^{かぎ}りを光^{ひか}るなり
わが^ゆ行^ゆく道^{みち}は遠^{とほ}けれど
いつかは登^{のぼ}らむ火^{くわえんざん}炎^{さん}山
その頂^{いただき}に輝^{かがや}ける
火^ひ種^{だね}を一つ戴^{いた}きて
世^よ人^{びと}を普^{あまね}く救^{すく}ふべし
ああ^{かむながら}惟^{かむながら}神^{かむながら}々々
わが^{いつかう}一^{いつかう}行^{いつかう}に幸^{さち}あれや
天津^{あまつ}神^{かみ}たち國^{くに}津^つ神^{かみ}

百ももの神かみたち聞きこし召めせ

ああ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみのまにまに進すすみ行ゆく

ウントコドツコイ、ドツコイシヨ
』

と歌うたひながら秋あき男をは急きふ坂はんをものともせず、

雄を々をしく登のぼり行ゆく。

松まつは歌うたふ。

登のぼり行ゆけば頂いたますます遠とほく見みえて

心こころもとなき火くわ炎えんの山やまかも

不ふ思議しぎなる山やまにもあるか行ゆけど行ゆけど

はてしも知しらぬ高たかき峰みねなり

悪あく神がみの妨さまたげなせるか吾わが足あしは

重おもたくなりて開ひらきかねつつ

兔も角も此處に息をば休めつつ
登り行かむか秋男若君

と言ひつつ、地上より一尺ばかり頭を突き出し覗ける岩にどつかと腰を掛け、
アハアと息をはずませ居る。一行はこれに倣ひて、萱草の上にとつかと腰を下し、
荒き鼻息を止めむとして居る。
秋男は歌ふ。

行けど行けど果しも知らぬ此山は

不思議なるかな追々遠のく

魔の山か地獄の山か知らねども

次第に遠のくいぶかしの山

曲神のまたもや畏にかかりしか

心もとなきこの山登り

竹は歌ふ。

☐ 若君の仰せ宜なり此山は

譏り婆アの棲處なりせば

怪しきは此山登りいつまでも

同じ所を行きつ戻りつ

まなかひは眩みたるらし村肝の

心焦てど道抄らず

梅は歌ふ。

☐ わが眼こそすりこすりてよく見れば

わが身の位置は少しも變らず

籠り樹のかげに佇み足ばかり

われらは動かし居たりけむかも

櫻は歌ふ。

如何にしてわれ登らむと思へども

曲津の猛びの妨げ強し

皇神のわれにたまひし數歌を

うたひうたひて登りたく思ふ

數歌にうたれて逃げし鬼婆よ

これに勝りし武器はあらしな

秋男は歌ふ。

さもあらむ吾はこれより言靈の

あま 天の數歌うたひ登らむ

ひとふたみよいつむゆななやここのたりもちよろつ
一二三四五六七八九十百千萬

やちよろづ 八千萬の神守らせ給へ

ことたま 言靈の嚴の力に助けられ

のほ 登り了せむ山の頂

か 斯く歌ふ折しも、籠り樹の梢の方より、

アツハハハハハ

イツヒヒヒヒ

ウツフフフフ

もの おも 思ひ知りたか、われこそは忍ヶ丘に年古く棲みし水奔鬼の司、笑ひ婆
うつけ者、

アぞや、よくものめのめと吾棲處へ迷ふてうせたな。もう斯くなればこつちのも
の、てもさてもいぢらしいものだワイ。

イツヒヒヒヒ

嚴めしい姿致して、偉さうに鬼を征服するなどは、をこがましや、あた阿呆らしや、とても叶はずきつぱりと降參致すか、首でも吊つて往生するか、返答如何に。

ウツフフフフ

かねてわがたくみ置きたる計略の

畏にかかりし愚者かな

さてもさても憐れな者よ此餓鬼は

火炎の山の露と消ゆべし

玉の緒の生命と靈魂の生命をば

共に碎きて苦しめ悩めむ

今日の如く心地よき日はなかるべし

冬男の餓鬼の恨み晴らせば

秋男は歌ふ。

どこまでもわれに仇なす曲津見を

征討めでやむべき大丈夫われは

かくならば一歩も退かじ巖ヶ根の

神の司の御子にしあれば

祖先の恥と思へば一歩も

曲津の棲處は退かざらむ

曲神の司と言へる笑ひ婆

譏り婆アを征討めて止まむ

樹上より怪しき聲再び聞えて、

ギヤツハハハハハ

此方は月見ヶ丘にて、其方たちを惱めし水奔鬼の司、笑ひ婆アが妹の善事曲事

一切を譏り婆アの曲鬼様だ。しつかりと耳を浚へて聞け。

もうかうなる上は遁しはせぬ、覺悟極めて婆アが軍門に降れ。いづれ保てぬ此

世の生命、綺麗さつぱり此方に奉り、わが幕下となつて忠實に惡を働け。それに

背くとあれば止むを得ず、汝が身體靈魂を捻り潰し、踏み碎き、無限の憂目を見

せて呉れむ、ワツハハハハハ、ワツハハハハハ

と碎ける如き婆アの聲の嫌らしさ、身體一面に粟を生ずるばかりなりける。

秋男は不審の念晴れやらず、ふと大空を仰げば、今まで煌々たる天津日の光は

跡形もなく、満天黒雲塞がり、陰鬱の氣四方を鎖し、次々怪しき物音高まり来る。

一行五人はここぞ一生懸命と、力限りに天の數歌を奏上しつつありける。

曲神のまたもや罨に陥りて

あはれ五人は闇に包まる

惡神の計略は深し七重八重

黒雲の幕包みて攻め来る

急坂を登る心地し樹のかけの
同じ所にうろつき居たりし。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

第一四章 報哭婆(二〇一八)

火炎山の頂上に、虎、熊、獅子、狼、豹、大蛇等の猛獸が、火口の周圍に棲息し、何者にも火種を盗まれざるやうと、日夜固く守つてゐる。若し此火種を奪はれ、葭原の大原野に放たれることあらば、それこそ一大事、猛獸毒蛇は忽ち焼き殺され、全滅の憂目にあはむことを恐れ、猛獸毒蛇の王は協議の上、當番を選びて噴火口の周圍を固く守り居たりける。秋男は此火種を奪ひ取り、山村原野に放火して、一齊に葭原全帯の惡魔の巢窟を焼き盡さむと計畫したりける。然るに猛

獸毒蛇どもの前衛を務むる譏り婆の水奔鬼は、力限りにこれを阻止すれども、動もすれば秋男が登山するの恐れあり、如何にもしてこれを妨げむと、種々様々の魔術をつくし、暫時の間を闇の幕に包みおきたるなり。山上の火口の周囲には、猛獸の王首を鳩めて山麓より響き來る言靈の水火に戦きながら、如何にもして火取の敵を防がむやと、協議の眞最中のところへ、すたすたと息をはづませ登り來りしは、笑ひ婆ア、譏り婆アの二鬼である。

虎王は二鬼を見るより慌しく聲をかけ、

山裾に言靈ひびくは何者ぞ
つぶさにかたれ二つの婆ども

熊の王は、

汝等は何をためらふか一刻も

早くまことを吾等に傳へよ
『

笑ひ婆は、

アハハハハ、イヒヒヒヒ

いけすかぬ餓鬼ども五つあらはれて

この山の火を取らむとするも

たましひのあらむ限りの力もて

吾は今までふせぎみたりき

わが力最早つきなむ願はくば

君の力を吾にあたへよ
』

譏り婆は歌ふ。

☐ イヒヒヒヒいらぬ世話やかす餓鬼どもが

あらはれ火炎の山にのぼらむ

われも亦力がぎりまたちからに防げども

敵は言靈の武器ことたまを持つなり

斯かくならば君の力きみをちからからむより

外ほかに手てだてはなしと思おもへり

虎王とらわうは歌うたふ。

☐ その方はうは小刀細工こがたなざいくいたす故ゆゑに

もろくも敵てきにくじかれにけむ

言靈ことたまの武器ぶきおそるに足たらざらむ

魔術まじゆつをつくして向むかひ戦たたかへ

魔心まごころのひるまずあれば言靈ことたまの

劍しるぎもいかで恐おそるべきかは』

狼おほかみの王わうは歌うたふ。

ㄣ
笑わらひ婆ばばア譏そしり婆ばばアの氣きの弱よわさ

ききて狼おほかみあきれ果はてたり

闇やみの幕まく汝なんぢに與あたへあるからは

彼かれがまなこをくらませ亡ほろぼせ』

笑わらひ婆ばば、

ㄣ
アハハハハ笑わらひ婆ばばアは根こんかぎり

力ちからの限かぎり戦たたかひしはや

迷まよはせど穴あなに落おとせと言こと靈たまの

劍つるぎに彼かれはひるまざりける
名なに高たかき笑わらひ婆ばばアのたくらみも
今いまや全まくやぶれはてたる
この上うへは君きみが力ちからを借かりるより
わが生いくる道みち更さらになからむ

狼おほかみの王わう、

氣きのきかぬ二人ふたり婆ばばアよ狼おほかみは
今け日ふより汝なんぢに暇いとまつかはす
くら闇やみの常とこよ夜の幕まくを持もちながら
へこたれ惱なやみし腰こしぬ拔ぬけなるかな

獅子王ししわうは歌うたふ。

狼おほかみの君きみよしばらく待まてよかし

婆ばばアの魔言まことのふかきをさとりて

斯かくならばわれ等ら一度いちどに魔力まぢからを

あはせて敵てきを亡ほろぼさむかな

熊くまも来こよ虎狼とらおほかみも從したがへよ

山やまを降くだりて敵てきに向むかはむ

言靈ことたまの劍つるぎの光ひかりするどくも

われ等らは牙きばもて咬かみ殺ころすべし

斯かく山さん上じやうの惡魔あくまたち等は協けい議ぎを凝こらしてゐる。

一いつ行かうは、山頂さんちやうの噴火ふんくわするさまを眺ながめながら、

麓ふもとの樹蔭こかげに夢ゆめよりさめたる如ごとき秋男あきを

ああ吾われは譏そしり婆ばばアにはかられて

樹こかげに夢ゆめをみてゐたりけむ

如何いかならむなや艱なやみにあふもひるむまじ

山やまの尾をの上への火ひをとらざれば

火ひの種たねをとられむことをおそれみて

猛獸まうじゅう毒蛇どくじゃは守まもりゐると言いふ

ともかくも捨すて身みとなりて堂だう々と

曲津まがの砦とりでに押おし寄よせゆかむ

火ひの種たねのひと一つありせば山やまに野のに

ひそむあくま惡魔まの棲處すみかを燒やかむ

松まつは歌うたふ。

情なさけなやそし譏ばりあのたくらみに

大ま丈夫す吾われはあざむかれける

斯かくならば最も早はや覺かく悟ごし鬼おに婆ばの

醜しこのたくみを退しりぞけゆかむ
國くにの爲ために心こころをいらつわが側そばに
無むしん心の桔梗ききやうは安やすく匂におへり
天津あまつそら空あふ仰あふぎて見みれば天津あまつひ日は
うす雲くもの中なかに輝かがやき給たまへり』

竹たけは歌うたふ。

☐
笑わらひ婆ばば譏そしり婆ばばアのさまたげを
うちはらひつつ登のぼりゆくべし
にくらしや冬ふゆ男をの君きみの御おん生命いのち
とりたる婆ばばアを征き討ためでおくべき
この婆ばばは曲まが津つか神かみ等のさきばしりを
つとむる醜しこの曲くせものなるらむ』

梅は歌ふ。

□ 大空はやや曇れども路の邊の

千草は花をかざして匂へり

一天にはかに曇り太き雨

降り出しにけり曲のたくみか

斯く歌ふ折しも、山上の猛獸連は秋男一行の登山を喰ひ止めむとして、雲を呼び、風を起し大雨を降らし、雷を使ひ、忽ち天地は暗澹として修羅道を現出した

梅はこの光景を眺めて、

□ 頂にすまへる猛獸毒蛇の

すさびなるらむ雨風しげし

雷は高く轟き風荒れて

山に登らむ手だてさへなき

斯くならば曲の力の弱るまで

待ちて登らむ火炎の山頂

秋男は歌ふ。

又してもこざかしきかな曲神は

黒雲おこし雨を降らすも

曲神の醜の材料つくるまで

心静かに樹かげに待たむ

雷鳴轟き稲妻ひらめき、山風強く吹き荒び、大雨沛然として降りしきり、樹下の宿りも雨洩りの爲に、皮衣もびしよ濡れとなり、大いに苦しみたれど、五人の

大丈夫は少しもひるまず、天の數歌を奏上して時の過ぐるを待ち居たり。天地の闇を縫ふてひらめく稻妻の間より、鬼婆の影ちらりちらりと現はるさま、一入いやらし。樹の枝高く怪しき聲又もや聞え來る。

「ギヤハハハハ、獅子王様の力を借り、あらはれ來りし鬼婆ぞや。この笑ひ婆は以前と事變り、獅子王、熊王、虎王、狼王様方々の御力を拜借致してこれに現は

れしものなれば、最早、汝等の言靈とやらにひるむべき。さあ、これよりは汝等の返答次第にて、骨を碎き、肉を削ぎ、血をしぼり、獅子王様のお食事に奉らむ。

てもさても面白や勇ましや、イヒヒヒヒ、ウフフフ、イヒヒヒヒ、オホホホホ臆病者、この方の言葉を聞いて胸ぶるひ致してゐるが、さてもさてもいぢらしい

者だワイ。ギヤハハハハ、此方は汝が恐るる譏り婆ぞや。今日こそは汝等が運の盡き、獅子王様の力に依つて生命を奪はるべし。じたばたしても、もう敵ふまい。

さあ動くなら動いてみよ。神變不思議の金縛りの術にかけおきたれば最早びくとも動けまい。さてもさても心地よやな、ギヤフフフ、ヒウーードロドロ、

この方は水奔鬼の譏り婆アの幽霊ぞや。いやらしくはないか、いや、おそろしく

はないかウフフフフ[㊦]

と幾度いくたびとなく同じおなことのみ繰返くりかへす鬼婆おにばばの言葉ことばに、秋男あきをは膽力たんりよくを据すゑ、再ふたび天地てんちを拜はいし、生言靈いくことたまを奏上そうじやうするや、さしも激はげしかりし雷鳴電光らいめいでんくわう一時いちじに止とまり、山風やまかぜの荒すさびも、降ふる雨あめも、びたりと止とまりて、天地てんち清明せいめい、空そらに一點いってんの雲霧くもぎりもなく、地上ちじやうは錦にしきの蕙むしろを敷しき竝ならべたる如ごとく、日月輝じつげつかがやき渡わたり、再ふたび元もとの天地てんちの光景くわうけいにかへりたるこそ不思議ふしぎなれ。

（昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 内崎照代謹録）

第一五章 憤死ふんし（二〇一九）

秋男あきをは以前いぜんの樹蔭こかげに立たちて此處ここを先途せんどと生言靈いくことたまを宣のる。

㊦ 高天原たかあまはらに現あれませる

主スの大神おほかみの神言みこともて
ア聲こゑの言靈ことたまに生あれませる
瑞みづの御靈みたまの神柱かむばしら
顯津男あきつをの神國かみにくに々々を
經巡へめぐり給たまひて言靈ことたまの
水火いを凝こらして神かみを生うみ
國土くにを生うませる功績いさをしに
大海原おほつなばらも國土くにも
うまうままに委曲つばらに生なりましぬ
中なかにも廣ひろき萬里までの海うみ
其眞中そのまんなかに浮うかびたる
島々しまじま數多あまたある中なかに
別わけて廣ひろけき葭よしの島しま
葭原國よしはらぐには主スの神かみの

貴うづの御水み火いに生なるものぞ

山やま河か草くさ木きも人ひと草くさも

鳥とり獸けだもののはしまでも

皆みな主スの神かみの御水おん火いに

生なり出いで給たまひし御賜物みたまもの

この食國をすくにに安やす々と

生せいを享うけたる現世うつしよの

人ひとのみならず幽世かくりよの

身み魂たまことごと御惠みめぐみを

被かかぶらぬもの無なかるべし

主スの大神おほかみの遣つかはせし

朝霧あさぎり比女ひめの神言みこともちて

吾等われらの父ちちの巖いはヶ根がねは

水みな上山なみやまの聖場せいぢやうに

貴うづの館やかたを構かまへまし

豫よ讚さの國くに原はら悉しつく

治しし食めすべき司つかさなり

吾われは巖いはヶ根がね第三だいさん子し

秋あき男をと名なづくる國くに津つ神かみよ

尾をの上へに潛ひそむ獅し子し熊くまも

虎と狼おほも毒どく蛇へびも

笑わらひ婆ばばアも悉しつく

父ちちの命みことの配はい下かぞや

吾わが言こと靈たまにもしやもし

敵てきた對きたひ來きたる事ことあらば

此この世よは愚おろか幽かくり世よの

何いづく處はての果はてにも棲すみ處かをば

絶ぜつ對たい的てきに許ゆるすまじ

汝曲津見曲鬼よ

吾打出す言靈に

耳を傾け目を開き

心の雲霧打ち拂ひ

誠の心に立歸り

神に従ひ奉るべし

ああ惟神々々

瑞の御靈の大神の

大御心を心とし

茲に秋男は慎みて

汝等が爲に宣り傳ふ

一二三四五六七八九十

百千萬八千萬の神

守り給へ幸へ給へ

吾言靈に力あれ
吾言靈に光あれ

と聲も爽かに歌ふ。曲神もこの言靈に心和らぎたるか、山腹の女郎花を揺がせて
香ばしき風心地よく吹き通り、梢に囀る迦陵頻伽の聲一入清しく、小草にすだく
蟲の音もいと美しく啼きにける。
松は歌ふ。

ありがたし秋男の君の言靈に

天地開く心地するなり

掛卷も畏し嚴の言靈に

吾魂もいきり立つなり

榮えある君の言靈清しけれ

曲津も必ず服従ひ來らむ

竹は歌ふ。

大空を包みし黒雲散り失せて

月日は空に澄み渡りけり

吾君の宣らす言靈幸はひて

葭原を吹く風は凧ぎたり

何となく心清しくなりにきて

吾行先の幸を思ふも

音に聞く火炎の山は峻しけれど

言靈宣れば安く登れむ

頂に猛き獣が屯して

火種を守ると吾は聞きけり

笑ひ婆、譏り婆アのいたづらも

野邊吹く風となりにけるかな

先の夜に月見ヶ丘に荒みたる
婆アはあはれ影隠しける」

梅は歌ふ。

高らかに宣らせる嚴の言靈に

天地四方の雲霧晴れ行く

千早振る神の伊吹の言靈は

此世を洗ふ力なりけり

世の中に生言靈をおいて外に

尊きものはあらじと思ふ

山に野に平和の風の吹き起り

花咲き實るも言靈の幸

斯くまでも尊き君と知らざりき

秋男の神の生ける言靈よ
『

櫻は歌ふ。

種々の艱みに遇ひて吾々は

生言靈の力覺りぬ

幾萬の敵現はるも恐れざらむ

君が言靈清く響けば

アオウエイ五大父音の功績に

此天地は生り出でしと聞く

今となりて神の力の尊さを

覺りけるかな愚なる吾は

草枕旅を重ねて山裾の

茂樹の蔭に道を覺りぬ

水奔鬼如何にたくむも何かあらむ

言靈劍帶ぶる吾身は

吾帶ぶる言靈劍は錆びぬれど

君は鋭き力持たせり

茲に秋男は意を決し、生言靈の功の尊さに力を得、自ら先頭に立ちて、壁立つ山肌を右に左に傳ひながら歌ひつつ登り行く。

火炎の山は峻しとも

百草千草吾行く手

うづめ塞ぎて妨ぐる

此山路も何かあらむ

生言靈の劍もて

右に左に斬りなびけ

行く手を清めて登るべし

此の頂の火口には

獅子王、熊王、虎王や

狼、大蛇集まりて

晝夜に守り居ると聞く

如何なる猛き獣も

神の賜ひし言靈の

劍にかけて服従はし

神の經綸の火の種を

奪ひ歸らで置くべきや

此の山路は峻しくて

行き艱めども眞心の

限りを盡し身を盡し

神の御爲世の爲に

進むすす 吾等われら にさやるべき

如何いかなる曲津まがもあるべきや

松まつ、竹たけ、梅うめよ櫻さくらども

心勇こころいさみて従したがひ來きたれ

一度いちどは不覺ふかくはとりつれど

生言靈いくことたまの力ちからをば

覺さとり切きりたる吾身魂わがみたま

最早もはや恐おそる事こともなし

ああ勇いさましや面白おもしろや

魔神まがみの集つどふ巢窟さうくつに

言靈劍ことたま拔ぬきつれて

吾われはすすくすすく進むすすなり。

岩根木根踏みさくみつつ登り行く

火炎の山は清しくもあるかな

見下せば山の麓に白雲は

豊かに遊びて風にゆるげり

白雲の空に聳えし此山に

登りて四方の國形見むかな

久方の春の御空にぼんやりと

霞むは高光山の姿か

高光の山は尊し御樋代の

神の坐します聖場なりせば

朝霧比女永遠に坐します高光の

山の姿のおごそかなるかも

今暫し進めば頂上に達すべし

暫しを此處に息休ませむ

と歌うたひつつ路みちの邊べの萱草かやくさを打敷うちしき、どつかと臀しりを下おろし、松まつ、竹たけ、梅うめ、櫻さくらも、とも
に眼がん下の四よ方もを見渡みわたしながら各自おのもおのに歌うたふ。
松まつは歌うたふ。

㊦ 麓ふもと邊とへは百樹もも茂きらひこの邊あたり

萱草かやくさばかり生おひにけるかな

雲くもを抜ぬくこの高山たかやまに登のぼり見みれば

吾息わがいきさへも苦くるしかりけり

葭原よしはらの國原くにはらことごと白雲しらくもに

包つつまれさながら海原うなばらの如ごとし

ぼんやりと彼方かなたの空そらに峙そばたてる

高光山たかみつやまを見みれば尊たふとし

自おのづから尊たふとさの湧わく山やまなれや

御樋代神みひしろがみの御舍みあらかとして

竹は歌ふ。

吹く風もいと冷え冷えと身にしみて

身は軽々となりし心地す

若君の後に従ひ登り見れば

早蟲の音も聞えずなりぬ

火炎山の此處は漸く七合目よ

されど鳥の音蟲の音もなし

尾花野に風に靡きて其他の

草木なければ花の香もなし

梅は歌ふ。

曲神の集ふ山とは見えぬまで

眺めよろしき聖所なりけり

曲神は白雲の線を限りにて

麓に群がり棲めるなるらむ

見の限り葭草茂る原野なり

水上の山は雲の上へ浮く

みはるかす水上山の頂に

います巖ヶ根司戀しき

種々の曲の艱みに遇ひながら

漸く此處に登り來つるも

山風は足の下より吹き來る

思へば高き山にもあるかな

獅子熊や虎狼や大蛇まで

棲む此の山は火炎吐くなり

夜されば焰の光百里餘の

野邊を照らすと聞くも凄まじ

若君に従ひ奉り國の爲に

火種を取りて山降らばや

櫻は歌ふ。

言靈の劍あれども心せよ

曲津の備へ厳しくありせば

曲津見は最後の備へを構へつつ

吾きたためむと待てるなるべし

魂に力をこめて登るべし

曲津の棲處早近ければ

斯く歌ふ折しも、山上より忽ち大岩石の雨、百雷の落ち來る如き音響を立てて、

五人が身邊に下り来る其危険さ、譬ふるものなし。五人は此處を先途と岩の雨を
潜り、辛うじて頂上に達しければ、猛獸毒蛇は強敵こそ御座むなれと、目を怒ら
せ牙をとぎ、大口開けて咆哮怒號しながら、五人に向つて噛みつき来る。五人の
勇者は、何猪口才な、如何なる曲津の妨ぐるとも、火種を取らねば置くべきかと、
驀地に燃ゆる火の傍に近寄りたるを見すましたる猛獸毒蛇の群は、生命限りに襲
ひ來たり、五人の勇者を口にくはへて各自に振り廻し、忽ち火口に投じ、凱歌を
擧げて唸り嘯く聲は、百雷の一つになりて轟くが如し。斯くしてあはれ五人の勇
者は、猛烈なる火に焼かれ、白骨となりて火焰の息に翻弄され、高く天に舞ひ上
り再び地上に落ち來りけり。

(昭和九・七・二八 舊六・一七 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

第三篇

天地變遷

第一六章 火の湖〔二〇二〇〕

秋男を始め、松、竹、梅、櫻の一行五人が、猛獸の主共に銜へられ、火炎山の
大噴火口に投げ込まれ、身體は白骨となりて中空高く昇り、再び山上に落下した
るが、稍半時許り経て、火炎山は忽ち大鳴動を始め、前後左右上下に震動し、遂
には大爆發して、見る見るさしもに高き山影は跡形もなく大湖水と變化し、猛獸、
毒蛇、水奔鬼の大部分は全滅の厄に遇ひて、その中央に小さき小島を残すのみと
はなりぬ。この小島に救はれたる精靈は、秋男一行を始め、朝霧、夕霧、秋風、
野分、秋雨及び僅少なる水奔鬼及び猛獸、毒蛇の小部分なりけり。
ここに秋男は此島の精靈界の主となりけるが、未だ肉體を有する猛獸、毒蛇の
残れるを如何にもして全滅し、ここに精靈の安全地帯を造らむと、八方辛苦を重
ね居たりける。然りと雖も秋男は最早精靈なれば、肉體を持つ猛獸、毒蛇に對抗
すべき力なく、只天地神明に祈願し、救ひの神の御降臨を待つより外すべもなか
りける。

切て高高山に天降りませる朝霧比女の神、大御照の神、朝空男の神、國生男の神、子心比女の神は、高高山の頂なる巖窟の寶座に集り、遙の西方に當り大爆音聞え、火炎山の天に沖する火焰は、跡形もなく消え失せ、只黒雲の漲れるを望見し、葭原の國土の一部に天變地異のありたるを憂ひ給ひながら、こと議り給ふ。朝霧比女の神は御歌詠ませ給ふ。

(註) 天祥地瑞の物語中、神々の御歌詠ませ給ふとあるは、御言葉の意なり。神代は現代人の如く不成立なる言語なく、互に天地の音律に合へる三十一文字を用ひ給ひしが、所謂今日の和歌となれるものにして、歌ひ給ふと言ふは、申し給ふ又は仰せ給ふ、語り給ふ、宣り給ふの意義と知るべし。神代の神の言葉を、現代人は總て歌として扱へるを知るべし。

見渡せば火炎の山は天地を

動がしにつつ消え失せにけり

久方ひさかたの空そらをなめたる火ひの舌したも

今いまは全まく見みえずなりけり

葭原よしはらの國くに土にの曲まが神みを言こと向むくる

惠めぐみの御み火ひは消きえ失うせにけり

いかにしてこの葭原よしはらを治しらさむや

神かみの寶たからの御み火ひ消きえぬれば

兔とに角かくに火炎くわえんの山やまは消きえ失うせぬ

湖うみとなりしか心こころもとなや

大御照おほみてるの神かみは歌うたふ。

吾われも亦また火炎くわえんの山やまの爆發ばくはつを

思おもへば心曇こころぐもらひにけり

葭草よしぐさや水奔草すいほんさつを燒やき拂はらふ

しぐみの中に火は消えにけり

葭原よしはらの島しまのごとごと夜よるされば

明あかるかりしを今いまは是非ぜひなし

濛々もうもうと天てんに黒雲くろくもふさがりて

火炎くわえんの山やまは見えずなりけり

曲津神まががみの數多あまた棲すまひし山やまなれば

御火みひ取る業わざをためらひ居をりしに

ためらひてある間に御火みひは消えにけり

この國原くにはらを如何いかに治をさめむ

今日けふよりは御火みひは消ゆれど言靈ことたまの

水い火きを照てらして世よを治をさめませ

御樋代神みひしろがみは歌うたひ給たまふ。

☐ 汝こそは大御照の神なれば

闇を明せよ生言靈に

曲津見のその大方は天地の

變異に失すれど火なきが惜しき

大御照の神は歌ふ。

☐ 吾公の御言葉畏み今日よりは

溪に降りて禊なすべし

吾禊神の心になふまで

力限りに務めはげまむ

御樋代神は歌ひ給ふ。

☐ 公きみが歌うた聞ききて吾わが魂たま蘇みがへり
天地あめつちひら開ひらけし心地ここちするかも

朝空あさぞら男をとこの神かみは歌うたふ。

☐ 葭原よしはらの國くに土ににも高たかきこの山やまゆ

國形くにがた見みれば火ひの山やま嶮さかき

嶮さかしかりし火炎くわえんの山やまは忽たちまちに

湖うみとなりしか姿すがた見えなく

曲津まがつかみ神あまた數す多す棲すまひしこの山やまは

神かみの經しぐみ綸みか消きえ去さりにける

兔とにもあれ豫讚よさの國原くにはらさやぐらむ

許ゆるさせ給たまへば吾われ出いで行ゆかむ

巖いはヶ根がねの神かみに力ちからを添そへながら

豫讚の國原蘇らせむ[㊦]

國生男の神は歌ふ。

㊦ 吾も亦朝空男の神と諸共に

豫讚の國原に進みたく思ふ

御樋代の神許しませ國生男

吾願ぎごとをうま怜に委曲に

葭原の國土の生き物悉く

惱みてあらむ進ませ給へ[㊦]

朝霧比女の神は歌ひ給ふ。

㊦ 國生男神の願ひを諾ひて

豫讚の御國の爲遣はさむ

大御照、子心比女の二柱は

吾右左に仕へ奉れよ

朝空男、國生男の神鳥船を

早く造りて進み出でませ

斯く歌ひて奥殿深く入らせ給ひ、大御照の神と子心比女の神は、巖窟の口の間に

控へて國形を看守り給ふ事となり、朝空男、國生男の二柱は大峽小峽の木を伐

り、天の鳥船を七日七夜の日數を重ねて漸くに造り上げ給ひ、兩神はこの鳥船に

乗りて中空に翼をうちながら、豫讚の國原さして進ませ給ふ。

朝空男の神は鳥船に身をまかせながら、中空を翔けりつつ御歌詠ませ給ふ。

七日七夜を寝もやらず

國生男神と諸共に

大おほ峽がひ小を峽がひの木を伐りて
目め出で度たくこここに鳥船ふねを
造つくり終へたる嬉しさよ
吾われは空ゆく鳥とりなれや
下げ界かいを遙かに見み下おろせば
葭よし原はらの國土くに廣ひろ々びろと
あなたこなたに山の尾は
霧きりの面に浮びゐる
下げ界かいはたしかに見えねども
霧きりの海原うなばら底そこ深ふかく
百もの人草ひとぐさ鬼おに大を蛇ろち
蟲むじ獸だものも草も木も
火くわ炎えんの山の爆發はくはつに
惱なやみくるしみをののきて

生きたる心地もなかるらむ

火炎の山は遠くとも

御空を走る鳥船の

早き翼に進みなば

一日の中に到るべし

御樋代神の天降らしし

天の八重雲に比ぶれば

地上に落つる憂ひなく

安全無事の空の旅

ああさりながらさりながら

吹き來る風に翼をば

折られて鳥船逆に

地上に落つる事もがな

行手は遠し雲の上

ああかむながらかむながら惟神々々

主スの大神おほかみの御恵みめぐみに

安やすく平穩おだひに進すすませ給たまへ

心こころ安やすらかに進すすませ給たまへ

一ひと二ふた三み四よ五いつ六むゆ七なな八や九この十たり

百もも千ち萬よろづ八千やち萬よろづ

天津神あまつかみ等たち國津神くにつかみ

守まもらせ給たまへと願ねぎ奉まつる
㊦

國生男くにうみをの神かみは歌うたふ。

㊦
吾われは國生男くにうみをの神かみよ

遙はるかに高たかき雲くもの上うへ

西にしへ西にしへと進すすみゆく

この鳥船は鳳凰か
翼の強き眞鶴か
心の空も晴れやかに
國形見むと進み行く
今日の旅こそ楽しけれ
御樋代神の神言もて
主の大神の御稜威
頸に受けて進みゆく
吾等に御幸あれよかし
吾等に光りあれよかし
遠く下界を見渡せば
黒雲白雲交々に
地上を包みて草も木も
人も獸も見え分かず

漂渺千里の海原を

渡るが如き心地かな

今まで空を照したる

火炎の山は影もなし

目標さへもなき空を

進む吾こそ雄々しけれ

主の大神の坐す限り

過つことなく進み得む

ああ惟神々々

恩頼をたまへかし

朝空男の神は鳥船より歌ふ。

見下せば黒雲白雲群りて

荒海原を進むに似たり
天と地の中空をゆく鳥船の
とりつく島も見えぬ旅かな
西東南も北も見え分かぬ
空の海ゆく鳥船あはれ
吾伊行く空高ければ風もなく
雨は下より降り上るなり
地の上に醜の曲事現れしか
空のぼり来る雲はにこれり

國生男の神は歌ふ。

國津神獸の歎き傳はるか
雲に怪しき聲のふくめる

高きたか聲集こゑあつまる方かたを目的めあてにて

下り着くだかむかこの鳥船とりふねを

宇宙うちう間何物なんにもも見みえず只ただ一つ

吾鳥船わがとりふねのあるのみぞかし

御樋代みひしろの神かみのまします高光たかみつの

山の姿やますがたも見みえずなりけり

主スの神かみの始はじめて宇宙うちうに生あれませる

時ときもかくやと俣しのばるかな

葭原よしはらの國くに土に廣ひろければ二夜ふたよ三夜みよ

走はしるも萬里まの海うみには到いたらず

萬里まの海うみの中なかにも廣ひろき葭原よしはらの

國津御空くにつみそらの定さだまらぬかな

兩神りやうしんは空中くうちうを歌うたひながら、豫讚よさの國くに土にの空そらを靜しづかに八重雲やへくもかき分け下くだらせ給たまへば、

笑わらひ婆ばばの棲すみ居あたりし忍しのぶヶ丘がをかの平へい地に鳥みふ船ねは安やす々やす着つきにける。

火くわえん炎ざん山いつたい一やく帯ひやく約ひやく百やく餘より里のちの地だいは大こすゐ湖すゐ水はと化てんしたれども、忍しのぶヶ丘がをかは幸さいひその圈けん外ぐわいに置おかれて、約やく一いち里ちか近くまで湖こ水すゐは展てん開かいし居あたりける。二にしん神は此この丘をかに下おり立たち、天てん地ちの神しん靈れいに向むかつて、感かん謝しゃの言こと靈たまを奏そう上じやうし數かず歌うたをうたはせ給たまふ。

朝あさ空ぞら男をとこの神かみは歌うたふ。

久ひさ方かたの朝あしたの空そらを雄を々をしくも

渡わたり來きにけり鳥とり船ふねに乘のりて

雲くも分わけて下くだりて見みれば忍しのぶヶ丘がをかの

思おもひがけなき休やす所となりしよ

新あたらしき火くわえん炎ざんの湖うみは間ま近ぢかければ

この丘をかよりはたしに見みゆるも

國くに生う男みの神かみは歌うたふ。

『 煩^{わづら}ひし心^{こころ}の闇^{やみ}も明^あけ放^{はな}れ

吾^{われ}恙^{つが}なく丘^{をか}の上^へに降^おりぬ

見^み渡^{わた}せば火^{くわ}炎^{えん}の湖^{うみ}は廣^{ひろ}々^{びろ}と

ほのかに霧^{きり}の立^{たち}昇^{のぼ}る見^みゆ

今^け日^ふよりはここの丘^{をか}の上^へに家^{いへ}造^{つく}り

豫^よ讚^{ざん}の國^{くに}土^にをば生^いかさむと思^{おも}ふ』

斯^かく歌^{うた}ふ折^{をり}しも、笑^{わら}ひ婆^{ばば}に生^{いのち}命^を奪^{うば}はれし精^{せい}靈^{れい}なる國^{くに}津^{つか}神^{かみ}の末^{ばつし}子^{ふゆ}冬^を男^をは、熊^{くま}公^{こう}、

虎^{とら}公^{こう}及^{およ}び山^{やま}、川^{かは}、海^{うみ}の三^{さん}女^{ぢよ}の精^{せい}靈^{れい}も共^{とも}に、恐^{おそ}る恐^{おそ}る出^いで來^{きた}り、微^{かすか}の聲^{こゑ}にて兩^{りやう}神^{しん}に

向^{むか}ひ感^{かん}謝^{しゃ}の眞^ま心^{こころ}を歌^{うた}ふ。

冬^{ふゆ}男^を 『 久^{ひさ}方^{かた}の天^{あま}津^つ御^み空^{そら}ゆ天^{あも}降^もりましし

二^{ふた}柱^{はしら}の神^{かみ}尊^{たふと}かりけり

葭^{よし}原^{はら}の豫^よ讚^{ざん}の御^み國^{くに}は曲^{まが}津^{つか}神^{かみ}

伊^{いた}猛^{たけ}り狂^{くる}ひて騷^{さわ}がしかりけり
火^{くわ}炎^{えん}山^{ざん}爆^{ばく}發^{はつ}によりて曲^ま津^が神^{かみ}の

その大^{おほ}方^{かた}は亡^{ほろ}び失^うせたり

吾^{われ}こそは巖^{いは}ヶ根^{がね}の末^{ばつ}子^し冬^{ふゆ}男^をなり

今^{いま}はこの世^よの者^{もの}にあらねど

水^{すい}奔^{ほん}鬼^きの笑^{わら}ひ婆^ばアにはかられて

現^{うつ}の生^{いの}命^{のち}を奪^{うば}はれし吾^{われ}

御^{おん}前^{まへ}に打^うち伏^ふすこれの友^{とも}垣^{がき}は

皆^{みな}精^{せい}靈^{れい}となりにけらしな

二^{ふた}柱^{はしら}天^あ降^もり給^{たま}ひし今^け日^ふよりは

精^{せい}靈^{れい}界^{かい}も安^{やす}くあるべし[㊦]

熊^{くま}は歌^{うた}ふ。

☐ 吾も亦巖ヶ根の君に仕へたる

下僕なれども現身はなし

虎公もこの三人の乙女等も

みな精霊よあはれみ給へ

朝空男の神は歌ふ。

☐ かねて聞く水奔鬼の棲む里は

いづれにあるや具に語らへ

冬男は歌ふ。

☐ 水奔鬼の司笑ひの婆アさんが

棲みにし丘はここなりにけり

吾々の力に恐れ笑ひ婆は
火炎の山をさして逃げたり
火炎山湖水となりし上からは
笑ひ婆アも亡びしなるらむ

國生男の神、

珍しき吾は話を聞きにけり
笑ひ婆アを追ひやりしとは
精靈といへども冬男のたましひの
強き力に吾はあきれし

山は歌ふ。

☞ 吾こそは冬男の妻の精霊よ

守らせ給へ二柱の神

御樋代の神の神言に天降りましし

尊き神に會ふぞ嬉しき

斯くならば葭原の國土は安からむ

現界神界幽界なべて

川は歌ふ。

☞ 水奔鬼笑ひ婆アの謀計に

みたまとなりし川は吾なり

虎公の精霊が妻と吾なりて

忍ヶ丘に年をふりけり

二柱尊き神の出でましに

精靈吾は蘇りたり
『

海は歌ふ。

虎公が精靈の妻吾は海

尊き神の前に立つかな

今日よりは吾等を憐れみ給ひつつ

曲津神等をきたため給はれ

待ち待ちし御樋代神の御使ひ

忍ヶ丘に天降りましけり
』

朝空男の神は歌ふ。

吾等二神ここに降りし上からは

心安かれ永久に守らむ^一

斯く互に歌ひつつ、その夜は忍ヶ丘の冬男が館に息を休めける。

(昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

第一七章 水火垣〔二〇二一〕

火炎山の爆發により、附近百里の地は全く湖水となり、湖水は熱湯の如く煮えくり返り、猛獸、毒蛇、イチチ等の毒蟲も大半殲滅の厄に遇ひけるが、中にも最も甲羅の強く、鱗の堅き爬蟲族は、湖水の岸邊に集り來り、汀邊の水奔草や葭草の中にもぐり込み、一層其の害毒甚しくなりゆくこそ歎てけれ。

朝空男、國生男二神が天降りたる忍ヶ丘は、陷落の難は免れたれども、約一里附近まで湖水の展開せるより、あらゆる曲津は忍ヶ丘に向つて、幾百千とも限り

なく上り来る物凄さ、名状すべからず。

冬男、熊公、虎公、山、川、海の精霊は、忍ヶ丘のわが住處には一歩も踏み入
れさせじと全力を盡し戦へども、悲しきかな精霊の身の上なれば、形體を持てる
悪魔の襲來を喰ひ止むる由もなく、苦心を極め居たりける。ここに、天の鳥船に
乗りて天降りましたる二柱の神の神力に力を得て、稍落着きながら御前に恐る恐
る進み寄り、

□ 火の湖の現れしより曲神は

處失ひ集ひ來むとす

二柱神の天降りし間もあらず

曲津は此處に押し寄せ來る

力限り防げど精霊わが力

如何で及ばむ救はせ給へ

これを聞くより二神は立ち上り、
忍ヶ丘の常磐樹の幹に御身を支へながら、
朝空男あさぞらをの神かみは歌うたふ。

葭原よしはらの豫讚よさの國原治くにはらをさむべく

天降あもりしわれよ心安こころやすかれ

如何いかならむ曲鬼まがおに大蛇をろち押しよすも

われはやはらむ生言靈いくことたまに

國生男くにうみをの神かみは歌うたふ。

朝夕あさゆふに神かみと力ちからを一つひとにし

忍ヶ丘しのぶがをかを安やすく守まもらむ

冬男ふゆをは歌うたふ。

有難しありがた二柱神ふたはしらがみの御宣言みことのり
聞ききてわれらは蘇よみがへりぬる』

朝空男あさぞらをの神かみは歌うたふ。

汝等なれたちは精靈せいれいなれどわが宣のらむ
生言靈いくことたまを補おぎなひまつれ』

冬男ふゆをは歌うたふ。

御宣示みことのりうなじ頸うに受うけて力ちから限かぎり
われ等らは宣のらむ生言靈いくことたまを』

かかる折をりしも、阿鼻叫喚あびけうくわんの聲こゑ、
関とぎの聲こゑ、
一時いちじにドツと起おこり、
猛獸まっじゅう、
毒蛇どくじや、
水奔すいほん

鬼は最も平安なる棲處として忍ヶ丘の麓に集り來り、咆哮怒號するあり、のたうちまはるあり、忍ヶ丘のまはりは水奔鬼の矢叫の聲かしましく、一齊に上らむとせしも、二神等の生言靈に妨げられて上りあぐみたるぞ面白き。二神及び冬男以下かの精靈は、交る交る生言靈を宣る。
朝空男の神は音吐朗々として歌ふ。

主の神の御水火に現れにし言靈を

國の鎮めと清けく宣らむ

アオウエイ天地處を變ふるとも

ただに鎮めむ貴の言靈に

幾萬の曲神襲ひ來るとも

斬りて放らむ言靈劍に

麗しき嚴の言靈幸はひて

この國原の曲言向けむ

炎々えんえんと燃もえたちし火口くわこうは忽たちまちに

消きえて湖こすい水すいとなりなりににけらしな

鬼おに大蛇をろちたとへ幾いく萬まん寄よせ來くとも

恐おそるべきかは天津あまつかみ神かみわれは

火くわえんざん炎たちま山うみ忽うみち湖うみとなりなり果はてぬ

生いく言こと靈たまの幸さちはひによりて

木きも草くさも火ひの湖みづうみの底そこ深ふかく

沈しづみけるかな曲まがの荒すさびに

國く土に生うむと天あ降もり來きたりしわれなれば

鬼おにも大蛇をろちも物ものの數かずかは

汚けがれたるこの國くに原はらも言こと靈たまの

水い火き幸さちはひて澄すみ渡わたるべし

心こころ惡あしき曲まが鬼おにどもの身みの果はては

ありあり見みえぬ湖こすい水すいの波なみに

冴え渡る月の光も見えぬまで

御空曇りぬ曲津の水火に

白雲の空を渡りて天降りてし

われ天津神よ曲等恐れじ

迫り来る鬼や大蛇は多くとも

忍ヶ丘には光る玉あり

譏り婆笑ひ婆アの水奔鬼も

今は手向ふ力無からむ

高山の火口は忽ち湖の

底に沈みて湧きたつ湯の波

千早振る主の大神の賜ひてし

生言靈に刃向ひ得むや

月も日もかくれて見えぬ葭原の

國土を照らして安く治めむ

天^{あめ}も地^{つち}もわが言^{こと}靈^{たま}の功^{いさ}績^{をし}に
晴^はれゆく力^{ちから}を曲^{まが}は知^しらずや
常^{とこ}闇^{やみ}のこの國^{くに}原^{はら}を伊^い照^てらすと
言^{こと}靈^{たま}鏡^{かがみ}持^もちて天^あ降^もりし^し ㊦

國^{くに}生^に男^{うみ}の神^{かみ}は歌^{うた}ふ。

波^{なみ}の上^へをわが見^み渡^{わた}せば鬼^{おに}大^を蛇^{ろち}

溺^{おぼ}るるさまの淺^{あさ}ましきかな

煮^にえ返^{かへ}る湖^こ水^{すい}の波^{なみ}にもまれつつ

大^を蛇^{ろち}は血^ちを吐^はき悶^{もた}え居^ゐるかも

奴^ぬ婆^ば玉^{たま}の闇^{やみ}は襲^{おそ}へり曲^{まが}津^つ見^みの

曲^{まが}の吐^はく息^{いき}いや重^{かさ}なれば

懇^ねに生^{いく}言^{こと}靈^{たま}を宣^のりつれど

曲まがの耳みみには入いらざると見みゆ

野のも山やまも火炎くわえんの山やまの爆發ばくはつに

戦をのきにけむ草木くさきは枯かれたり

果敢はなかる世よの状さまなれや地ちの上うへの

曲まが悉ごとく亡ほろびむとすも

低山ひきやまは湖うみに没ぼつして火炎山くわえんざん

頂いた狭だく水みづに浮うかべり

降ふる雨あめも激はげしかりけむ湖みづうみは

低山ひきやま高山たかやま皆みな浸ひたしつ

曲津まがつ見みも火炎くわえんの山やまの變動へんどうに

恐おそれ戦をのき身み亡うせけるかな

ほのぼのと霧きりを透とほして見みゆる湖うみの

夕ゆふべの眺ながめは淋さびしかりけり

曲神まがの生命いのちの果はてか関ときの聲こゑ

この丘をかした下きこゆ聞きこえ來くるなり

見みの限かぎり醜しこくさ草お生おほふる大野原のはらを

生言靈いくことたまの幸さちに清きよめむ

昔むかしより例ためしもあらぬ天地あめつちの

變動かはりは神かみの戒いましめなるらむ

目めを開あけて見みられぬまでにいぢらしき

この國原くにはらは神かみのいましめよ

濛々もうもうと黒雲くろくも低ひくう葭原よしはらの

野空のぞら包つつみて月日つきひは見みえず

八千尋やちひろの湖水こすいの底そこに曲津見まがつみは

又またも潛ひそみて災わざはひ爲なすらむ

如何程いかほどに曲津見まがつみ大蛇をろちすさ荒あぶとも

神かみの御稜威いづに言向ことむけ和やはさむ

湯ゆの如ごとく沸わき返かへりたる湖みづうみの

水面みのもに湯氣ゆげは立ち昇のぼりつつ

遠近をちこちの區別けぢめもしらに災わざはひの

神かみのいましめ畏かしこきるかも

世よを救すくふ誠まことの力ちからは言靈ことたまの

貴うづの功いさをに如しくものはなし

われこそは御樋代神みひしろがみに仕つかへたる

生言靈いくことたまの司つかさなるぞや

いち早はやく忍しのぶヶ丘がをかに天降あもり來きて

葭原國よしはらぐにの状さまを見みしかな

美うつくしき神かみの御國みくにを生うまむとて

われは降くだれり神言帶みことおびつつ

ゑらゑらに歡よろこぎ販にぎはふ神國かみくにを

生うまで置おくべき力ちから限かぎりに

大蛇棲をろちすむ葭原國よしはらぐにもわがあれば

いと安やすからむ勇いさみてあれよ』

冬男ふゆをは歌うたふ。

二柱神ふたはしらかみの天降あもらすこの丘をかに

われ蘇よみがへり曲まがを防ふせがむ

二柱神ふたはしらかみの言靈ことたまさち幸さちはひて

わがたましひの力ちから添そはりぬ

かくなれば精靈せいれいわれも勇いさましく

鬼おにの砦とりでに向むかひ進すすまむ

現世うつしよの人ひとと生うまれし心地こころかな

わが靈身れいしんの輝かがやき初そむれば

永年ながとせを忍しのぶヶ丘をかの鬼おにとなりて

岐美きみの天降あもりを待まちわびにける

浅あさましきみたまのわれも今日けふよりは

神かみの御後みあとに仕つかへまつらむ

蘇よみがへり生きの生命いのちを保たもちつつ

幽かみよ世よの花はなとなるぞ嬉うれしき

浮腰うきこしのわがたましひも落着おちつきて

動うごかぬ心勇こころいさみたつなり

鬼おに大蛇をろち醜しこの鬼婆おにばば攻せめ來くとも

最も早はや恐おそれじ神かみなるわれは

矢叫やさけびの聲こゑは麓ふもとにどよめけり

鬼おにも大蛇をろちも登のぼらむとして

言こと靈たまの水いき火が垣き高たかく築きつきませば

如い何かなる曲まがも登のぼり得えざらむ

神かみがみ々の貴うづの恵めぐみに抱いだかれて

安やすく過すぎなむ忍しのぶヶ丘をかに

狭霧さぎりたつ火ひの湖みづうみも恐おそれむや
如何いかなる曲まがのよし潜ひそむとも
水奔鬼すいほんき魍魎すだま曲まが靈數たまかずの限かぎり
寄よせて來きたるも何なにか恐おそれむ
𠮟

熊公くまこうは歌うたふ。

思おもひきや二柱神ふたはしらがみの出いでまして
國土くにの災除わざはひのぞかせ給たまへり
われは今いま忍しのぶヶ丘かの鬼おにとなれど
元津もとつみたまは神かみなりにけり
たましひは元もとより清きよし惟かむながら神
神かみに受うけたる生命いのちなりせば
水奔鬼すいほんきに追おひたてられて長ながき日ひを

清水ヶ丘しみづがをかにひそみたりける

虎公とらこうと二人ふたり淋さびしくひそ潜ひそみたる

清水ヶ丘しみづがをかを思おもへばかな悲かなしき

わが君きみも笑わらひ婆ばばアはかに計はかられて

清水ヶ丘しみづがをかに身み亡うせ給たまひぬら

朝空男あさぞらをの神かみは歌うたふ。

種々くさくさの汝なが物語ものがたり聞きくにつけ

曲まがの猛たけびの強つよきをさとり

葭原よしはらの國土くには曲津まがつの影かげもなく

清きよめ澄すまさむ神かみなるわれはら

虎公とらこうは歌うたふ。

㊦ ありがたし貴の御神の御言葉
われは忘れじ幾世経るとも
㊦

山は歌ふ。

㊦ 妾とて鬼にはあらず惟神
㊦

神の誠の御子なりしはや

旅ゆきて忍ヶ丘に立ち寄りつ

笑ひ婆アに生命とられし

鬼婆に玉の生命を奪はれし

人のみたまは數限りなし

二柱神の御稜威に水奔鬼の

影を地上に消させ給はれ
㊦

國生男の神は歌ふ。

果てしなき廣き國原隈もなく

清め澄まして曲滅さむ

兔にもあれ角にもあれやこの丘に

館つくりて國土を治めむ

川は歌ふ。

天地の神の光りのあれまして

葭原の闇晴れそめにけり

われとても同じ運命をたどり來て

鬼となりける乙女なるぞや

今日よりは曇りし心照りあかし

生言靈を宣り續くべし
□

海は歌ふ。

□ 海山の恵みをうけてわれは今
忍ヶ丘に安く居るかも
□

冬男は歌ふ。

□ 果てしなき葭原の國土隈もなく

照らさせ給へ二柱神

ちから
力なきわれにはあれど御後に

したが
従ひ神業に仕へまつらむ

くま
熊も虎も山、川、海も神業に

使はせ給へとこひのみまつる』

朝空男の神は歌ふ。

☐ 汝が願ひ諾ひわれは國生男と

暫時を此處にとどまり治めむ』

かく歌ひ給ひて、火の湖の平穩に復する日を待たせ給ひける。忍ヶ丘の麓には
數萬の猛獸、毒蛇、水奔鬼など、逃場を失ひ、右往左往にひしめきあへりけり。

（昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 林彌生謹録）

第一八章 大舉出發（二〇二二）

水上山の神館の執政を勤むる巖ヶ根は、高光山以西の國形を視察せしむべく、第四男の冬男を一人遣はしけるが、數多の月を閲して何の消息もなきままに、稍不安の念を起し、水音、瀨音の重臣と共に、鳩首謀議の結果、第三男の秋男に、松、竹、梅、櫻の四柱の從者を従へ、冬男の在處と國形の視察を兼ねて出發を命じたりしが、これまた弓弦を離れし矢の如く、行つたまま何の消息もなく、再び水上山の神館は憂ひに沈み、三度御子を派して調査せしめむと事議る折しもあれ、東南の方に當つて、夜は火光百里の地上を照したる火炎山は、轟然として爆發したる其物音に、水上山の館まで地鳴震動甚だしく、人心兢々たりける。

茲に巖ヶ根を初め重臣等は、二人の御子の安否を憂ひ、大擧して其消息を探るべく、春男、夏男を初め、水音、瀨音其他の供人を數多引き連れ、第三回目の調査に向ふべく決定したり。

出發に臨み、巖ヶ根は齋主となり、其他は後に從ひて、天津神を祀りたる神額に額づき、種々の美味物を奉り太祝詞言を宣りける。その祝詞に言ふ。

掛巻も綾に畏き、高日の宮に鎮まりいます主の大御神、高鉾の神、神鉾の神の三柱の大御前に、水上山の館の執政巖ヶ根は、ここに謹み敬ひ、恐み恐みも願ぎ白さく。

抑此の葭原の神國は、御樋代の神朝霧比女の神の永久に鎮まりまして治め給ふ神國にして、賤しき吾等も高光山を限りとして、豫讚の國原を治むべく、御樋代神の神言かかぶりて、日に夜に國安かれと心を盡し身を盡し、國の政治に仕へ奉りける。

豫讚の國土は地未だ稚く、種々の物全く調はず浮脂の如くあれば、國形視せしめむと第四の御子冬男を遣はしけるに、數多の月を閲すと雖も未だ復命白さず、若しや若し大御神の御心に叶はずて、道の隈手にさやる曲津神有りて損ひたるにやと心も心ならず、各自の司等と事議り、神前に願ぎ白して、第三男の秋男に、松、竹、梅、櫻の四柱を添へ、再び國形を視極め、冬男の在處を明らめむと、過ぐる日此館を立ち出でけるに、今におきて何の復命もなさず、司等は心を惱め奉る折もあれ、豫讚の國の眞秀良場に峙てる火炎山は、天地をどよもして、頂より麓ま

で打ち破れけるにや、朝な夕なに望みてし其影も見えず、光も消え失せければ、尋常ならじと思ひ奉るが故に、三度茲に事議りて、二人の御子が在處を探し求め、國形視るべく、春男、夏男に水音、瀨音の司を従へさせ、百神たちを率ゐて、今日

日の吉日の吉時に、神國の爲に旅行かむとす。

仰ぎ願はくば、主の大御神、うま怜に委曲に聞食し給ひて、今日の出立ちは道の隈手も恙なく、喪なく事なく、最速かに復命白させ給へと、海川山野の種々の御幣帛を百取の机に横山の如く置足はして獻るさまを、平けく安らけく聞食せと、鹿兒自物膝折伏せ、宇自物頸根突貫きて、恐み恐みも願ぎ奉らくと白す。惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世

斯く奏上終り、恭しく禮拜し、神殿を降り、再び一同は執政殿に集り、首途を祝し且事議りける。

巖ヶ根は歌ふ。

二柱御子は歸らずなりにけり

神の御旨に叶はざりしか

老の身の力と頼む二人の子の

行方思へば心さわぐも

音に聞く水奔草は行く道に

茂りて人を損ふとかや

水奔草に當りて亡せし水奔鬼の

禍なすと聞くぞ忌々しき

一年を過ぐれど冬男は歸り來ず

心もとなきわが思ひかな

過ぐる秋再び秋男に言依さし

國形視るべく旅立たせけり

冬近み木枯吹けどわが御子の

便りのなきは憂れたかりけり

松、竹、梅、櫻の四柱添ひながら

今に便りのなきはいぶかし

火炎山爆發したるか天地は

どよみて山の影は失せたり

火炎山變動見るより一入に

わが魂はなやましきかな

かくならば春男、夏男を始めとし

水音、瀨音も行きて調べよ

水音は歌ふ。

宜ようべ巖根の君の御言葉に

如何で背かむ急ぎ旅行かむ

再びの使は復命あらず

心もとなきこれの館よこころ
やかた

水奔鬼の爲に生命を果敢なくもすいほんき
ため
いのち
は
か

亡せ給ひしか心もとなしう
たま
こころ

葎草に混りて茂る水奔草のよしぐさ
まし
しげ
すいほんさう

禍多しと吾も聞きつるわざはひ
おほ
われ
き

濕り地に茂れる葎草醜草のしめ
ぢ
しげ
よしぐさ
しこぐさ

隙間に棲めるイヂチの害蟲すきま
す
あし
か
がいちゅう

草枕旅行く人の足噛みてくさまくら
たび
ひと
あし
か

倒すイヂチの多しとぞ聞くたふ
おほ
き

兔も角もかくてあるべき時ならずと
かく
とき

急ぎ進まむ御後たづねていそ
すす
みあと

瀬音は歌ふ。
せおと
うた

㊦ 執政しつせいの君きみよ暫しばしを待またせ給たまへ

國形くにがた視みつつ御後みあと調しらべむ

何なにかしら心こころ落おちぬ今日けふの日ひを

神かみに祈いのりて旅立たびだちせむかな

葭原よしはらの彼方あなた此方こなたの丘をかの邊へに

水奔すいほん鬼棲きすむと傳つたへ聞きき居をり

如何いかならむ難なやみ來きたるも此度このたびは

神かみの惠めぐみに打うち破やぶり行ゆかむ

わが行ゆかば淋さびしかるべし巖いはヶ根がねよ

神かみに祈いのりて安やすく坐ましませ

春男はるをは歌うたふ。

㊦ 父上ちちうへの御言みこと畏かしこみ出いで行ゆかむ

百ももの司つかさをわれ伴ともなひて

火くわえんざん炎あとかた山あとかた跡あとかた形あとかたもなく消きえ失うせぬ

豫よ讚さの國くに原はらさやぎてあらむ

兔とに角かくに豫よ讚さの國くに原はら治をさむべき

勤つとめを持もてる水みな上かみの館やかたよ

御み樋ひ代しろの神かみの神みこと言ことに報むくふべく

如い何かなる惱なやみも凌しのぎ進すすまむ

弟おとうとは水すい奔ほん鬼きまたは曲まが鬼おにに

生いのち命いのちを奪つばはれたるにあらずや

よしやよし弟おとうとの生いのち命いのちあらずとも

吾われは進すすまむ高たか光みつの山やままで

高たか光みつの山やまに進すすみて此この状さまを

御み樋ひ代しろ神がみに具つぶさに傳つたへむ

夏男は歌ふ。

木枯の吹き荒ぶ野を分けて行く

吾等が旅に幸あれと祈る

父君に別れを告げて出でて行く

われも神國の爲なればなり

葭原の國形視つつ弟の

行方を探す今日の旅かな

水上山尾の上の尾花靡きつつ

わが旅立ちを惜しむがに見ゆ

山萩も桔梗も散りて淋しげに

尾花は風に靡きけるかも

蟲の音もかすかになりて野路を吹く

風は漸く冷え渡りけり

いざさらば神の恵に守られて

立ち出で行かむこれの館を

巖ヶ根は兩眼に涙を浮べながら歌ふ。

勇ましや春男、夏男の旅立ちを

國土の固めと思へば嬉しき

水音や瀬音の司春、夏の

二人を守り安く行きませ

木枯の風の冷たき冬空を

分けて進まず君ぞ雄々しき

水上の館に心かけずして

進ませ給へ司々等

水音は聲を曇らせながら、

いざさらば君に別れむ國の爲
曲津の荒ぶ荒野をさして

瀬音は歌ふ。

村肝の心なやまし給ふまじ
大丈夫吾等が行手幸ならむ
御樋代の神の神言に報いむと
出で行く道に曲津のあるべき

と歌ひ終り、一行四人は數多の供人と共に、
木枯吹き荒ぶ野路を、
東南に進路を
とり勇み進んで出で行きぬ。

春男は木枯荒ぶ葭原を、
右に左に分けながら、
折々水上山の館を振りかへり振
りかへり行進歌を歌ふ。

☐ 秋も漸く暮れ果てて

冬の初めとなりけり

水上山は屹然と

吾行く後に輝けり

戀しき父は如何にして

いますか知らず吾々の

行く手を案じわづらひつ

天津御神の御前に

祈らせ給ふか尊しや

秋は漸くつきはてぬ

木枯寒き冬の日を

迎へて進む淋しさよ
秋男、冬男の身の上を
思へばなほも淋しけれ
天に聳えて輝きし
火炎の山は影もなく
夜半を照せし大火光
今は全く消えはてぬ
葭草醜草生ひ茂る
野路行くわれは露をだも
厭ふ心地し出でて行く
ああ惟神々々
わが旅立ちに幸あれや
わが行く道に光あれ
如何に悪魔は猛るとも

毒蟲しげくさやるとも
神の光を力とし
弛まず屈せず進むべし
父の御言をかがふりて
國形視むと出でて行く
高光山は嶮しくも
葭原國は廣くとも
月日重ねて進みなば
いと安からむ惟神
神のまにまに進むべし
吾等は神の子神の宮
如何に恐れむ大丈夫の
彌猛心の一筋に
初心を貫き大前に

復命せむ此旅路かへりごとこのたびぢ
守らせ給へ天津神まもたまあまつかみ
國津御神の御前にくにつみかみのおんまへ
畏み畏み願ぎ奉るかしこかしこねまつ
𠄎

夏男は歌ふ。
なつをうた

秋男、冬男は今何處あきをふゆをいまいづこ
一年餘りを経たる今日いちねんあまへけふ
何の便りもなくばかりなんたよ
探ね行く手はぼんやりとたづゆて
所定めぬ淋しさよとこじぎださび
冬は漸く來向ひてふゆやうちきむか
百の木草は紅葉なしももきぐさもみぢ

蟲むしの音ねさへも細ほそりけり
葭よしの枯かれ葉はは暗くらきまで
大だい地ちを包つつみ毒どく草さうの
水すい奔ほん草さうは枯かれはてて
根ね元もとに潜ひそむ毒どく蟲むしは
次し第だい々し々だいに殖ふえて行ゆく
冬ふゆの旅たびこそ淋さびしけれ
神かみの惠めぐみのあらざれば
如い何かで一いつ歩ぽも進すすめむや
守まもらせ給たまへ天あめ地つちの
神かみよ御み樋ひろ代かみ神さま様よ
神かみ國くにの爲ために進すすみ行ゆく
われ等らが道みちに隈くまもなく
喪もなく進すすませ給たまへかし

ああかむながらかむながら惟神々々
恩みたまのふゆ頼ねを願まつぎ奉まつる
㊦

水みなおと音うたは歌うたふ。

㊦ 冬ふゆさり來くれば山やま川かはの

水みなおと音うたさへも聲こゑ潜ひそめ

邊あたり淋さびしく木この葉は散ちり

裸はだか木かぎ諸しよ所に震ふるふなり

御み空そらの月つきも白しろ々と

凍こほるが如ごとき冬ふゆの夜よの

霜しも踏ふみ分わけて進すすみ行ゆく

枯かれ野のヶ原がはらは物もの凄すこき

火くわえん炎えんの山やまは消きえ失うせて

あやめも分かぬ夜の道
最早一步も進み得ず
幸ひこれの森かげに
一夜の露の宿りして
豊榮のぼる天津日の
光りを力に進むべし
猛獸毒蛇のはびこれる
これの原野は殊更に
危ふからむを方々よ
御心如何にすすくと
應へを宣らせ給へかし
ああ惟神々々
神の御前に願ぎ奉る

瀬音は歌ふ。

水^{みな}上^{かみ}の山^{やま}を立^たち出^いで冬^{ふゆ}の野^の

繁^{しげ}樹^きの森^{もり}にたそがれにけり

火^{くわえんざん}炎^{ひか}山^{さん}光^{ひか}りなれば止^やむを得^えじ

此^{この}森^{もり}かげに一^{いち}夜^やを明^{あか}さむ

何^{なん}となくうら騷^{さわ}がしき夕^{ゆふ}なり

如^い何^かなる曲^ま津^がの襲^{おそ}ひ來^くるにや

二^{ふた}柱^{はしら}御^み子^こを探^{たづ}ねて進^{すす}み行^ゆく

今^け日^ふは悲^{かな}しき旅^{たび}なりにけり

木^こ枯^{がらし}の吹^ふき渡^{わた}り行^ゆく音^{おと}聞^きけば

冬^{ふゆ}の心^{こころ}の淋^{さび}しかりけり

月^{つき}舟^{ふね}は御^み空^{そら}にふるひ蟲^{むし}の音^ねは

草^{くさ}の根^ねに鳴^なく冬^{ふゆ}の夕^{ゆふ}暮^{くれ}

淋しきは冬の夕の旅衣

袖に降り来る涙の雨なり

茲に一行は茂みの森蔭に立ち寄り、淋しき木枯に吹かれながら身を一所に集め、明日の旅立ちの事など心の中に思ひ悩みながら、漸く寢に就きける。

此邊りは火炎山の陥落により、猛獸毒蛇の傷つけるもの數多集り來れる場所なりければ、夜もすがら嫌らしき呻吟聲と、異様の不快なる空氣は漂ひにける。

（昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 白石惠子謹録）

第十九章 笑譏怒泣（二〇二三）

茂みの森を立ち出でて

春男、夏男を初めとし

水音、瀬音は供人を

數多從へ東南の

原野をさして進みゆく

火炎の山の陷落に

あたりの光景激變し

たしかにそれと分かねども

霧立ちのぼりもうもうと

大地を包むは湖か

猛獸毒蛇の影多く

道の行く手にさやりつつ

いづれも負傷せざるなし

春男の一行は幸に

重傷負ひし曲神の

力なきをば幸に

いとすたすたと進みゆく

吹き來る風も何となく

胸もふさがる心地して

霜おく朝の野邊をゆく

寒さは寒し陰鬱の

空氣は天地に漲りぬ

ああ惟神々々

春男一行の行先は

幸か不幸か物語

讀みゆく行にしたがひて

いと明瞭となりぬべし。

春男は歌ふ。

水上山を後にして

萱野を渉り丘を越え

茂みの丘に黄昏れて

一行ここに夜をあかし

猛獸毒蛇のうめき聲

耳にしながら來て見れば

火炎の山はあともなく

空に黒煙漲りて

日月ために影暗し

地上遙かに見渡せば

右も左も狭霧立ち

晝なりながら行く手さへ

わからぬ今日のいぶかしさ

ああかむながらかむながら惟神々々

弟二人おとうとふたりの消息せうそくは

如何いかがなりしか聞かまほし

天地てんちに神かみのいますなら

吾等われらに二人ふたりの行く末すゑを

うまうまに委曲つばらに教をしへませ

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる」

夏男なつをは歌うたふ。

ちちのみの父ちちのみことかしくを畏かしこみて

醜草しこくさ茂しげるあらのはら荒野原

迎たどりてここきに來きて見みれば

白煙はくえんもうもう地に満みちて

行く手てもわかずなりにけり

國形くにがた見みむと思おもへども

あたりは靄もやにつつまれて

吹ふき來くる風かぜもいやらしく

寒さむさ身みにしむ冬の旅たび

樹々きぎに囀さへつる百鳥ももとりの

聲こゑもかなしく聞きこゆなり

ああ惟かむながらかむながら神々々

わが行ゆく道みちをあきらかに

照てらさせ給たまへと願ねぎ奉まつる
』

水音みなおとは歌うたふ。

□ うち仰ぐ^{あふ} 火炎^{くわえん}の山^{やま}はくづれしか

湖^{うみ}のみ見^みえて山^{やま}かげもなし

かかる野^のに湖^{みづうみ}ありとは知^しらざりき

この地^ちの上^{うへ}は變^{かは}りたるにや

天津^{あまつ}日の月^{つき}もかくれて常^{とこ}闇^{やみ}の

野^の路^ぢゆく吾^{われ}はさびしかりけり
□

瀬^せ音^{おと}は歌^{うた}ふ。

□ どころとなくさびしき聲^{こゑ}は聞^きゆなり

曲^ま津^がの叫^{さけ}びか鳥^{とり}のなく音^ねか。

ただしは冬^{ふゆ}の蟲^{むし}の音^ねか

行く手も知らぬ闇の旅

まだ晝なりながら怪しけれ

向ふに見ゆる低山は

月見の丘かいち早く

足を早めて進むべし

斯くして一行は漸く月見ヶ丘に着きぬ。太陽は見えねども、
て闇は益々深くなりぬ。ここは秋男一行が一夜の宿を借りて、
最早黄昏時と見え
試みたる跡なりき。ここは秋男一行が一夜の宿を借りて、
譏り婆と言靈戦を

春男は歌ふ。

やうやくに月見ヶ丘に来て見れば

黄昏の幕おりにけらしな

何となく淋しき丘よ草も木も

霜しもにあたりて赤あからみにける
常磐樹ときはぎの中なかにまじはる裸樹はだかぎの

梢しすゑは闇やみの空そらなでてをり

この丘をかはいとど怪あやしく思おもはるる

わが弟おとうとの宿やどりけるにや
□

夏男なつをは歌うたふ。

黄昏たそがれの闇やみふかければ止やむを得えじ
□

この丘をかの上へに一夜いちやをあかさむ

大空おほぞらの月つきもかくろひ星ほしかげの

一ひとつだになき闇やみの丘をかかも

吹ふく風かぜは肌はだにしむなり何處どこやらに

怪あやしき聲こゑの聞きこゆべらなり
□

水音は歌ふ。

曲鬼や大蛇のむらがる野を越えて

ここに安けく吾着きにけり

さりながら心はゆるせじこの闇に

曲襲はむも計りかぬれば

眠りなば曲や襲はむ村肝の

心ひきしめてあかつき待たむか

瀬音は歌ふ。

何かしらあやしき聲の響くなり

君は聞かずや嘆きの聲を

曲鬼が大蛇かイチチか知らねども

わが魂の戦く聲なり

斯く歌ふ折しも、リズムの合はぬ、トンチンカンなる音楽響き來り、忽ちあたりは晝の如く明るくなりける。然しながら約十間四方は室内に燈をとぼしたる如くなれども、其他は依然として闇の襖を立てたるが如し。

闇の中より悠悠現はれ來る四人の美人あり。何れも十七八歳の妙齡にして、容色端麗に物腰も淑やかに、象牙細工のやうな白い手を揉みながら、媚を呈して寄り來り、甲の女は一行に向ひ恭しく禮をほどこし、微笑を浮べて歌ふ。

われこそは葭井の里の國津神

葭井が娘五月なるぞや

火山山陷没せしよりわが家は

湖の底に沈みたりけり

やうやくに神の恵みに助けられ

月見ヶ丘つきみがをに難なんをさけ居ゐし

ここにみたりゐる三人をとめの乙女はらからは姉妹よ

恵めぐませ給たまへ國津神くにつかみたち〇

春男はるをは怪あやしみながら、

〇 不思議ふしぎなることを宣のらすよこの丘をかに

難なんをさけつつ忍しのびゐるとは

眉目みめ形かたち美うるはしけれど何處どことなく

汝なれがおもざし腑ふにおちぬかな〇

五月さつきは歌うたふ。

〇 うたがはせ給たまふな吾われは國津神くにつかみ

葭井の娘にたがひなければ
君來ますとかねて聞きしゆ常闇を
照らして吾はここに待ちつつ

春男はなほも怪しみながら、

言靈は如何に美しく宣るとても
汝がよそほひ怪しかりけり

小百合は歌ふ。

吾こそは小百合と名告る妹よ
愛でさせ給へ旅の客人
わが姉を疑ひ給ふ客人の

心思へばかなしくなりぬ

われこそは小百合と名のる愛娘

葭井の里の花と呼ばれし

ともかくも戀しさ故に吾は今

君の姿を伏し拜むなり

家はなく父母もなし憐れなる

わが姉妹を救はせ給へ

水音は歌ふ。

若王よ曲の言の葉御耳を

かし給ふまじ彼の耳動けり

この女譏り婆アの化身ぞや

心し給へ闇の花なれば

燈火もなき闇の夜にあかあかと

この邊りのみ光るは怪しき

曲神のたくらみごとは淺ければ

忽ち尻の割るるものなり

わが眼ひがみたるかは知らねども

五月の尻に太き尾見ゆるも

小百合てふ妹と名告る乙女子も

細き尻尾のあらはれてをり

斯く歌ふや、俄に晝の如明るかりし四邊は常闇と變じ、いやらしき聲頻りに聞え來る。

「ギヤハハハハハ、如何にもこの方は譏り婆の成の果、汝が弟秋男といふ青二才を惱め殺し、火炎山の火口へ放り込み、生命をとるやうに致したは此方が計畫、もうかうなる上は何も彼も言つてやらう。尻から見えた尾は、即ち汝が弟秋男の

髪かみの毛け、小百合さゆりと名告なる女をんなの尻しりにはさんだ尻尾しりをは其方そちが弟おとうとの髪かみだ、イヒヒヒヒ、
てもさても心地こちちよやなア。二人ふたりの女をんなの尻尾しりをは出来できたが、もう二つふたの尻尾しりをが要い
より、今いまここに現あらはれて、汝等なんぢら兄弟きやうだい二人ふたりの生命いのちをとり、二人ふたりが乙女をとめの尻尾しりをとなし、
自由自在じいうじざいの妙術めうじゆつを使つかふ吾等われらが計畫たくらみ、てもさてもいぢらしいものだワイ、イヒヒヒ
ヒ、笑わらひ婆ばばアと譏そしり婆ばば、瘡おこり婆ばばに泣なき婆ばばと四人よにんの變裝へんさうしたのは、汝なんぢの眼めには美うるはしき乙をと
女めと見みせむ爲ためなり。てもさても情なさけなや、最早もはや二つふたの眼まなこは此この世よの物ものならず、幽冥いうめい
界かいに旅立たびだち致いたし、表おもてから見みれば人間にんげんの眼めと見みゆれども、最早もはや用ようをなさぬ節穴ふしあな同然どうぜん、
てもさても淺あさましや、この方ほうが計略けいりやくにかかりしを氣きのつかぬ大馬鹿おほばか者もの奴め、昨夜さくやしげ茂しげ
樹きの森蔭もりかげに、汝等なんぢら四人よにんの眼めをくりだし、木きの節穴ふしあなと入れ替かへた吾等われらが神變しんぺん不思議ふしぎ
の術じゆつ、驚おどろいたか、往生わうじやう致いたしたか。イヒヒヒヒ、キヤハハハハ、キキキ氣きの毒どく千萬せんばん、
愉快ゆくわい千萬せんばん」

春男はるを、夏男なつをはじめ水音みなおと、瀬音せおとは驚おどろき、各自かくじり兩眼りやうがんに手てをやりて調しらべ見みれど、別べつに
節穴ふしあなにもあらず、全まったく自じ分の眼まなこなるに、やつと安心あんしんせしもの如ごとく、四人よにんは期きせ
ずして天あまの數歌かずうたを從者じうしやと共ともに、天地てんちも轟とどろくばかり大音聲だいおんじやうに宣のり上あげたり。四人よにんの

乙女と變じたる曲鬼は、この言靈に辟易しけむ、怪しき悲鳴をあげながら、いづれともなく逃げ去りける。

不思議や、月見ヶ丘は、闇の幕俄に開かれ、大空の月は皎々とかがやき渡りけるにぞ、一行は丘の上に立ちて、東南方を眺むれば、新たに生れたる火の湖、際限もなく展開し、波靜かに涼風いたり、月星の影を浮べて寂然たりけり。

(昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

第二〇章 復命〔二〇二四〕

火の湖の中央に浮びたる小さき小島を秋男島といふ。火炎山の陥落により、熱湯吹き出で、忽ち百里四方の湖となり、其頂の僅に水上に浮べる島なりける。茲に天變地異のため、あらゆる猛獸毒蛇も、水奔鬼も、大略滅亡したれども、流石に執着深き意地強き笑ひ婆、譏り婆、癩婆、泣婆は辛うじて此島に取付き、此處

を唯一の棲處とし、あらゆる暴虐を振舞はむとたくらみ居たりけるが、噴火口に
飛入りて白骨となり居りし秋男の靈は此島に止り、松、竹、梅、櫻と共に島の司
となり居たりしが、水奔鬼の面々は、秋男のある限り其暴状を逞うするに由なき
を恐れ、如何にもして秋男を亡ぼさむものと、晝夜間斷なく決戦をつとめて居る。
秋男は休息したる火炎山の火口に身を潜めながら、此處を堅城鐵壁と頼み、頻に
言靈を打出しける。水奔鬼はいやらしき言靈を以て秋男一行の精靈を濁し亡ぼさ
むと、あらゆる手段を盡しける。秋男島は水面より最頂上と雖も百間ばかりなり
ければ、水奔鬼は笑ひ婆を先頭に、火口の周圍を取巻き、晝夜の區別なく、連続
的に濁れる言靈を吐出すこそ嘆てけれ。

笑ひ婆は火口の壁内を覗き、大口を開けて眼を釣上げながら、

アハハハハ、イヒヒヒヒ、ウフフフフ、エヘヘヘヘ

オホホホおのれ秋男の餓鬼どもよ

早く立去れ此島ケ根を

ギヤハハハ八此島ケ根は火炎山の

頂なれば吾棲處なり

何時までも立退かざれば此婆が

鬼を集めて攻め殺すべし

足許の明るい間に早歸れ

此浮島には住まはせぬぞや

其方の供か知らねど松、竹や

梅と櫻はつまらぬ餓鬼ぞや

この方の罫に陥り身亡せたる

餓鬼の住むべき島でないぞや

何時までもしぶとう居るなら居つてみよ

又火を吐きて殺してやるぞや

此島は今静かに眠れども

今いまに火ひを出だす恐おそろしき島しまよ
其方そのほうの弱よわきみたまの力ちからもて
住すめると思おもふは浅あさはかなるぞや
』

秋男あきをは憤然ふんぜんとして歌うたふ。

火くわえん炎さん山湖うみとなりしも吾わが宣のれる

生言靈いくことたまのしるしと知しらずや

國津神くにつかみの數多あまたの生命いのちを奪つばひたる

汝なれを亡ほろぼす時ときは來きにけり

玉たまの緒をのみたまの生命いのち惜をしければ

少すこしも早はやく島しまを立たち去され

汚けがれたる息いきを吐はき出だし島しまヶ根がねを

穢けがさむとする憎にくらしき婆ばば』

添そひながら、
譏そしり婆ばばは笑わらひ婆ばばの言こと靈たま戦せんを手て緩ぬるしと思おもひしか、すつくと立たち、
舊きう火くわ口こうの壁かべに寄より

㊦ ギヤハハハハ腰こし拔ぬ野や郎らうの秋あき男をの餓が鬼きよ

生命いのち惜をしくば此この場ばを立たち去され

聞きかざれば聞きくやうにして聞きかすぞや

譏そしり婆ばばアの力ちから限かぎりに

兔とも角かくも此この島しまヶ根がねは吾われ々の

永と遠はの棲すみ處かぞ早はやく去され去され

どうしても島しまを去さらねば水すい奔ほん鬼き

數あまた多あつ集あつめて惱なやまし呉くれむ

鬼おによ鬼おによ集あつまれ來きたれ此この餓が鬼きが

生命いのち取とるまで詰つめ寄よせ來きたれ

斯く歌ふや島全體より、大河の堤防の崩れたる如く怪音轟き來り、耳を聳せむばかりの光景とはなりぬ。

斯かる處へ天の鳥船御空を高く轟かせながら、秋男島の平坦なる砂地に悠々と舞ひ降り、中より現れしは御樋代神に仕へたる朝空男の神、國生男の神を始めとし、精靈界に入れる秋男が弟冬男及び熊公、虎公、山、川、海の精靈一行及び、水上山の聖場より弟の所在を探ねて出發したる春男、夏男を始め、水音、瀬音、其他數多の從者にてありければ、水奔鬼の司も此處ぞ一生懸命と、死力を盡して戦ふべく汀に集まり、鬨の聲を揚げつつ示威運動を試みて居る。

秋男は之を見るより歡天喜地、靈の身の置き處も知らず、忽ち火口より四人の從者を引連れ降り來り、二柱の前に遠來の苦勞を謝し、且弟の精靈や二人の兄及び從神等に面會したる嬉しさに、吾を忘れて踊り狂ひつつ歌ふ。

□ あら尊御樋代神の御脇立

二柱神は天降りましけり

吾^{われ}今^{いま}は精^{せい}靈^{れい}界^{かい}にありながら
神^{かみ}の出^いでまし拜^{をが}みて生^いきぬ
吾^{わが}魂^{たま}は生^いき榮^{さか}えたり二^{ふた}柱^{はしら}の
神^{かみ}の天^あ降^もりの御^み光^か拜^{をが}みて

朝^{あさ}空^{ぞら}男^をの神^{かみ}は歌^{うた}ふ。

葭^{よし}原^{はら}の國^{くに}土^にの災^{わざはひ}救^{すく}はむと
高^{たか}光^{みつ}山^{やま}へ渡^{わた}り來^こしはや
鳥^{とり}船^{ふね}に乘^のりて大^{おほ}空^{ぞら}かけりつつ
忍^{しのぶ}ヶ丘^{がをか}に先^まづ天^あ降^もりたり

國^{くに}生^う男^みの神^{かみ}は歌^{うた}ふ。

忍しのぶヶ丘がをかに下くだりて見みれば汝なが弟おとうと

冬男ふゆを精靈せいれいとなりて住すみけり

水奔鬼すいほんき笑わらひ婆ばばアの謀計たばかりに

あはれ冬男ふゆをは生命いのち捨すてしよ

汝なれも亦また笑わらひ婆ばばアや譏そしり婆ばばの

たくみに生命いのち亡うせしか愛いとし

秋男あきをは歌うたふ。

有ありがた難たし二柱ふたはしら神がみの出いでましに

此島このしまヶ根がねは安やすく榮さかえむ

冬男ふゆをは歌うたふ。

ㄣ
戀こひ慕したふ吾わが兄あに上うへも精せい靈れいの

世界せかいにい入いりしと思おもへばかなしき

さりながら此この島しまケ根がねに吾わが兄あにに

會あふは神かみの惠めぐみなりける

吾わが兄あにの春はる男をとこ、夏なつ男をとこの御み姿すがたを

今いま目めの前まへに見みるは嬉うれしき
ㄣ

水みな音おとは歌うたふ。

ㄣ
御おん後あとを慕したひ來きたりつつ此この島しまに

亡なき若わか王ぎみに會あふは嬉うれしき

今いまは世よに亡なき君きみながら嬉うれしもよ

精せい靈れい界かいに輝かがき給たまへば
ㄣ

瀬音は歌ふ。

ㄣ 巖ヶ根の君の御言を被りて

君に會はむと探ね來つるも

神々の厚き恵みに此島の

磯邊に君に會ふは嬉しき

春男は歌ふ。

ㄣ 吾父の御言重しと來て見れば

弟は既に鬼となりしよ

水奔鬼に生命取られし弟と

思へばかなしき吾なりにけり

夏男は歌ふ。
なつを うた

□ うつせみの吾弟に會ひぬれど
わねとつと あ

何か一つの淋しみを覺ゆ
なに ひと さび おぼ

さりながら靈魂の生命は永遠に生くと
たま いのち とは い

聞きて心をなぐさみにけり
き こころ

父上が此のありさまを聞きまさは
ちちうへ こ

歎き給はむと思へば悲し
なげ たま おも かな

天津神の天の鳥船にたすけられ
あまつかみ あま とりふね

汝に會はむと渡り來にけり
なれ あ わた き

秋男は歌ふ。
あきを うた

□ 有難し吾兄と兄のやさしかる
ありがた わが あに あに

心を聞きて吾蘇る

幽世の生命は長し吾父に

告げさせ給へ安く住めりと

二柱神よ願ぎごと聞食せ

四人の婆を吾は征討めむ

力なき吾を救ひて鬼婆を

征討め給はれ神國の爲に

茲に二柱神は頂上に登り立ち、聲も清しく天の數歌を奏上し給ふや、さしもに
強き水奔鬼の笑ひ、瘡、譏り、泣の婆司は、言靈に打たれて創痕を満身に受け、
生命からがら、湖城を逃げ去りしが、終に力盡きて熱湯の湖水に陥り、全滅なし
たるぞ目出度けれ。

天津神二柱島に現れまして

生言靈いくことたまに曲津まがを退やらへり

冬男ふゆを、秋男あきを二人ふたりは精靈せいれいとなりぬれど

神かみの力ちからにみたまい生き居をり

うつそみの二人ふたりの兄あにに巡めぐり會あひ

蘇よみがへりたる心地こちなしける

御樋代みひしろの神かみの鳥船とりふね空高そらたかく

一行いっかうを乗のせて送おくり給たまへり

冬男ふゆを等は忍しのぶヶ丘がをに送おくられぬ

春男はるを、夏男なつをは水みな上に歸かへる

秋男あきを等は四よつのみたまあひとと相共ともに

秋男あきをの島しまの主あるじとなりけり

鳥船とりふねの翼つばさを搏うちて二柱ふたはしらは

御樋代みひしろ神がみに復命かへりことせり

空そらの海渡うみわたりてここふたはしらに二柱

御樋代神に具に報ぜり

葭原の曲津は大方亡びたれど

水奔草の災やまず

猛獸や大蛇毒蟲はびこりて

葭原の國土は未だ造れず。

附言

春男、夏男に水音、瀨音其他の從者等は、一人も生命を落すものなく、無事神の助けにより、水上山に復命し、二人の弟の身の成行等を具に神前に報告し、父の巖ヶ根にも一伍一什を物語りければ、巖ヶ根も神恩の深きに落涙し、朝夕神前に差籠りて感謝祝詞の奏上に熱中したりける。

次に秋男は松、竹、梅、櫻と共に湖中の浮島を秋男島と命名け、此處に永遠の

住家を營み、湖中の神として、往來の船や漁夫等を永遠に守る事とはなりぬ。又冬男は忍ヶ丘に熊公、虎公及び山、川、海の精靈と共に永久に鎮まり、靈界より葭原國の榮えを守り、惡魔を亡ぼす神として永遠に國人より尊敬さるる事となりける。あなかしこ。

(昭和九・七・三〇 舊六・一九 於關東別院南風閣 森良仁謹録)

第二章 青木ヶ原(二〇二五)

葭原の國土を東西に畫したる中央山脈の最高峰高光山の聖場には、常に紫の瑞雲棚引き、風清く、植物も高地に似ず、神徳に浴して繁茂し、四方の國形を瞰下し得る最勝最妙の靈地なり。この地點を青木ヶ原と稱し、八百萬の神等ここに集りて政に仕ふ。

朝霧比女の神は青木ヶ原の神苑を逍遙しながら御歌詠ませ給ふ。

久方ひさかたの高日たかひの宮みやを立たち出いでて

ここに三年みとせを過すぎにけるかな

顯津男あきつをの神かみの出いでましおそければ

吾われいたづらに年とし經へむとする

葭原よしはらを統すべ守まもるべき君きみなくば

あらぶる神かみをいかに治をさめむ

豫讚よさの國くにの中心なかがこに立たてる火炎山くわえんざんは

焰ほのほと共ともに消きえ失うせにける

見渡みわたせば火炎くわえんの山やまの跡あと白しろく

湖うみとなりしか波なみかがよへり

豫讚よさの國くにに吾遣われつかはせし二柱ふたはしら

いまだ歸かへらず心こころもとなし

主スの神かみの惠めぐみの幸さちの深ふかければ

功いさをを立たててやがて歸かへらむ

目路めぢの限かぎり葎よしぐさ草しこぐさ醜しこぐさ草しこぐさ茂しげり合あふ

これの國くに原はら如何いかに開ひらかむ

國くに津つ神かみは山やま々やまの裾すそに住すまひつつ

平ひら野のは葎よしと醜しこぐさ草しげ茂らふ

この廣ひろき醜しこぐさ草お生おへる野のを開ひらき

五たなつもの穀ものなど植うゑひろめたき

斯かく歌うたひつつ苑ゑん内ないを逍せう遙えうし給たまふ折をりもあれ、庭にはの樹こ蔭かげに小せう兒にを抱いだきて子こ守もり唄うたを歌うた

ひながら、子こ心こ比ろ女ひめの神かみは此こ方なたに向むかつて静しづかに進すすみ來きたる。

子こ心こ比ろ女ひめの神かみは歌うたふ。

坊ぼうやはよい子こぢやねんねしな

坊ぼうやのお守もりはどこへいた

山やまを越こえて野のを越こえて

川を渡りて旅に出た

旅の行く先やいづこそぞや

水上山の聖場へ

水上山の故郷の

里のみやげに何もろた

でんでん太鼓に笙の笛

ねんねんねんねんねんねしな

と身體を左右にふり、龍彦の養育に餘念なかりける。

朝霧比女の神はこの體を見

子心比女神の眞心やさしけれ

龍彦のきみを育みますも

この御子は龍の御腹ゆ生れませば

賢さかしき御み子こよ美うましき御み子こよ

この御み子こは育そだてによりてよくもなり

悪あしくもなるべき性さがをもつなり

朝あさ夕ゆふに肌はだ身み放はなさず育はぐみて

國くにの司つかさと照てらさせ給たまへ

子こ心こ比ろ女ひめの神かみは歌うたふ。

㊦
ありがたし御み樋ひ代しろ神がみの御おん言こと葉は

吾われ謹つつしみて仕つかへ奉まつらむ

朝あさ空ぞら男をとこ、國くに生う男みの神かみ鳥とり船ふねは

いかなりしか聞きかまほしけれ

西にしの空そらとほく眼まなこを見み渡わたせば

くろき一ひとつの影かげの浮うかべる

かすかなる雲の黒影は二柱の
乗りて歸らす鳥船ならずや

朝霧比女の神は、遠く西空をふりさけ見ながら、

「かすかなる影は次々近み來ぬ

正しく天の鳥船なるべし

豫讚の國土の禍ひ鎮めて二柱

復命すと勇み來るも

斯く歌ふ折しもあれ、急速力を以て二柱の乗れる鳥船は、青木ヶ原の廣場に鳩
の如くに着陸せり。

この聖地に仕ふる數多の神々は、二神の無事歸りしを欣喜雀躍し、「ウオーウ
オー」と叫ぶ聲、高光山も割るるばかりのどよめきなりける。

朝霧比女の神は二神の側近く進ませ給ひ、

久方の空を翔りて歸りてし
汝二柱の功績を思ふ

朝空男の神は、先づ朝霧比女の神の御前に最敬禮をほどこし歌ふ。

比女神の神言畏み漸くに
今復命白しけるかな

あれはてし國形見つつ驚きぬ
葭草醜草生ふる豫讚國
火炎山地中に深く陷没し

火の湖は生り出でにけり
醜神の數多集ひし豫讚の國の

天變地異てんぺんちいに新まりあらた初めぬそ

さりながらくさむら叢くさむらに棲むす鬼大蛇おにをろち

水奔鬼等すいほんきなどの曲津まがはさかしも

葭原よしはらの國土くにの光ひかりの火炎山くわえんざん

湖うみとなりしゆ火ひの種たねなき國くに

如何いかにしてこの國原くにはらに火ひの種たねを

求め得もとえむかも悟さとらせ給たまへら

朝霧比女あさぎりひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふら。

今いま暫しばし時ときを待まつべし火ひの種たねは

天津御神あまつみかみゆ授さづけ給たまはむら

國生男くにうみをの神かみは歌うたふ。

吾^{わが}公^{きみ}の仰^{おほ}せ畏^{かしこ}み鳥^{とり}船^{ふね}に

乘^のりて國^{くに}形^{がた}調^し査^らべ來^こしはや

百^{ひやく}千^{せん}里^り雲^{くも}を渡^{わた}りて豫^よ讚^さの國^{くに}の

忍^{しの}ヶ丘^{ぶがをか}に安^{やす}く降^{くだ}れり

精^{せい}靈^{れい}の生^{いの}命^{のち}とられし水^{みな}上^{かみ}山^{やま}

巖^{いは}根^{はね}が倅^{せがれ}と語^{かた}らひにけり

巖^{いは}ヶ根^{がね}の倅^{せがれ}冬^{ふゆ}男^{をとこ}や秋^{あき}男^{をとこ}等^らと

語^{かた}りて惡^{あく}魔^まの猛^{たけ}び悟^{さと}りぬ

葭^{よし}原^{はら}の國^{くに}土^にのあちこち忍^{しの}び居^ゐる

曲^{まが}津^つ焼^やかずば治^{をさ}まらじと思^{おも}ふ

曲^{まが}津^つ神^{かみ}を焼^やき滅^{ほろ}すは主^すの神^{かみ}の

御^み火^ひの力^{ちから}にしくものあらじ

火^ひの種^{たね}を奪^{うば}はれむことを恐^{おそ}れみて

猛^{まう}獸^{じゅう}毒^{どく}蛇^{じゃ}は護^{まも}り居^ゐしとふ

火ひの種たねは火炎くわえんの山やまの陷没かんぼつに

消きえて影かげさへ見みえずなりけり
㊦

朝霧あさぎり比女ひめの神かみは歌うたはせ給たまふ。

㊦ 雲枕くもまくら御空みそらの旅たびを重かさねつつ

功いさをを立たてし公きみを讚たたへむ

國くに土わか稚まく未つちだ地よやはく葭原よしはらの

國くに土にのかためはただ事ことならじ

葭草よしぐさや水奔草すいほんさうを燒やき拂はらふ

力ちからは御火みひに勝まさるものなし

如何いかにして御火みひの力ちからを得えむものと

百もも日か百もも夜よを吾われは祈いのりつ

百もも日か日ひの楔みそぎを依よせる大御照おほみてらしの

神もやがてはここに歸らむ

百日日の満ちぬる今日を勇ましく

凱旋したるは目出度かりけり

大御照神もやがては歸るべし

百日の楔今日満ちぬれば

斯く歌ひ給ふ折もあれ、楔の神事を了へ給ひ、神の力を全身に満して、大御照の神は溪間の雲を分けて青木ヶ原の聖場に漸く歸りつき給ひ、四柱の神の御前に慕しく現はれ、大御照の神は歌ふ。

御樋代の神の神言をかうむりて

百日の楔終り歸りぬ

溪川の清き清水に楔して

うつりゆく世を悟らひにけり

水と火の力によりて葭原の

地を清めむ御心なりけり

今暫し吾に暇をたまへかし

御樋代神を迎へ來らむ

萬里の海に浮ばせ給ふ朝香比女は

御火をたまふとはつかに悟りぬ

松浦の港に公を迎へつつ

御火の力を借らむと思ふ

朝霧比女の神は御歌詠ませ給ふ。

八人乙女の御樋代神の朝香比女が

出でましあると聞けば嬉しき

然あらば大御照神先に立ち

朝空男、國生男神從ひ出でませ
あさぞらを くにうみをがみしたが い

大御照の神は歌ふ。
おほみてらし かみ うた

朝霧比女神の神言に従ひて
あさぎりひめ かみ みこと したが

朝香の比女を迎へ來らむ
あさか ひめ むか きた

大前に畏み嚴の言靈を
おほまへ かしこ いづ ことたま

たたへ終りて直に進まむ
たは をは ただ すす

百日日の楔によりて吾魂は
ももかひ みそぎ わがたま

鏡の如く透きとほらへり
かがみ こと す

朝空男、國生男神の神二柱
あさぞらを くにうみを かみふたはしら

吾に添へさせ給ふ嬉しさ
われ そ たま うれ

朝空男の神は歌ふ。
あさぞらを かみ うた

☐ 朝香比女迎ふる爲に鳥船を

遣はせ給へ御樋代の神

松浦の港は遙か遠けれど

吾鳥船にのりて進まむ

國生男の神は歌ふ。

☐ 二柱神に従ひ松浦の

港に下ると思へば勇まし

久方の御空翔ゆくいさましさ

地上の神と思へざりけり

豫讚の國の空を渡りし覺えあり

松浦港へは安く降らむ

朝霧比女の神は御歌詠ませ給ふ。

斯くならば三柱急ぎ鳥船に
乗りて進めよ神を迎ふと

朝香比女の神を迎への首途として、朝霧比女の神は四柱の司神を始め數多の神々
を率ゐて、青木ヶ原の中心に宮柱太しく立てて齋き奉れる主の大神の御前に、沐
浴齋戒して種々の供物を獻じ、自ら齋主となり、空中安全の祈願を始め給ふ。
朝霧比女の神は四拍手しながら、

掛巻も畏き此の高光山の天津岩根に宮柱太しく立てて、千木高知らし鎮まり給
ふ主の大神の大前に、齋主朝霧比女の神、謹み敬ひ願ぎ奉らく。大神の神言被り、
御樋代の神と任けられ、天津御空の八重雲を伊頭の千別に千別て高光山に降りて
ゆ、早も三年は過ぎにけり。御樋代神の吾はも、著き功績も立てずして、月日を

送る苦しさに、天に踞り地に踏して國土安かれと祈りけり。さはあれど未だ國土
稚く地やはく、曲津見ども跳梁にまかせ切りたる葭原の國土を開かむ術もなし。
主の神の御水火に生れる御火の種、大御照の神の心の眞寸鏡に寫るふ見れば、朝
香比女の神は珍の火種を持たせつつ此國土に渡らすとはつかに聞き嬉しさに、
大御照の神始めとし、朝空男の神、國生男の神を朝香比女の神の許に遣はし迎へ
奉ると思ふが故に、天の鳥船を堅らかに造り終へて、三柱を乗せ遣はす今日の日
の吾願ぎ事を聞き召し、怪しき雲の空行くも、禍ちあらず安々と、長き年月松浦
の港に光らす朝香比女の神の一行を、無事に高光の山の聖所に導かせ給へと、鹿
兒自物膝折伏せ宇自物頸根突貫きて恐み恐みも願ぎ奉る。ああ惟神々々、生言靈
に光あれ、吾言靈に力あれ

斯くて祭典は無事終了し、三柱の神はここに身を清め鳥船に乗じて、伊頭の八
重雲をかき分けて松浦の港に向ひ航空することとなりぬ。
御樋代の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 待ちわびし今日の生日の目出度さよ

朝香の比女を迎ふと思へば

八柱の御樋代神のその中に

殊に雄々しき朝香比女かも

朝香比女神の神言の出でまさば

この葭原の國土は安けむ

主の神に朝夕を祈りたる

験かがよふ今日は目出度き

いざさらば雲路安けく出でませよ

吾は御前に祈りつつけむ

大御照の神は歌ふ。

☐ 朝霧比女の神言畏み出でゆかむ

生言靈いくことたまに雲路安くもぢやすけむ

雲くもの谷雲たにくもの川かはをば横よこぎりて

港みなとに進すすまむ守まもらせ給たまへ

大空おほぞらの雲くもの峰みねをば打うち渡わたり

天あまの河原かはら渡わたらひ行ゆかむ

鷺わしも鷹たかも百鳥ももどりちどり千鳥ちどりも目めの下したに

ながめて渡わたる空そらの雄を々をしをさを』

朝空あさぞら男をとこの神かみは歌うたふ。

天津あまつ日ひの輝かがやき渡わたる朝空あさぞらを

進すすむ吾等われらは鳳凰おほとりなるよ

鳥船とりふねの翼つばさ堅かたらに造つくりあれば

心安しんあんけく進すすまむと思おもふ

主スの神かみの御み火ひより湧わける雲くもなれば
空そらの旅たび路ぢも安やすけかるべし
』

國くに生うみの神かみは歌うたふ。

☐ 吾われも亦また二ふた柱はしら神がみに從したがひて

天津あまつ御み空そらをかき分わけ進すすまむ

ポケツトは數あまた多たありともこの船ふねは

いや堅かたければ安やすく進すすまむ

はてしなき大野おほのの上うへを限かぎりなき

御み空そらの雲くもを見みつつ行ゆくなり

いざさらば高たか光みつ山やまの聖せい場ぢやうを

伏ふし拜をがみつつ渡わたりゆくべし
』

朝霧比女の神は御歌詠ませ給ふ。

三柱の神の雲路の旅行きを

今や送らむこの清庭に

三柱の神よ安けく渡りませ

神の依さしの神業と思ひて

大御照の神は歌ふ。

いざさらば青木ヶ原の聖場を

立ちて進まむ松浦港へ

苑に仕へ侍る百神等は、「ウオーウオー」の鯨波を造りて、勇ましきこの首途を
斯く歌ひ終り、三柱は天の鳥船に身を托して空中高く昇らせ給ふや、これの神

送りける。

（昭和九・七・三一 舊六・二〇 於關東別院南風閣 谷前清子謹録）

第二章 迎への鳥船（二〇二六）

朝香比女の神の一行は、歎かひの島に打ち渡り、國津神に燧石を授け、荒れ果てし國原を隈なく拓かせ、歡ぎの島と改めつつ、再び駒諸共御船に乗り、萬里の島ヶ根を右に左に漕ぎ渡りつつ、萬里の海原の中にて、廣袤第一と聞えたる、葭原の國土の東海岸なる松浦の港に、眞晝頃漸く着かせ給ひ、磯邊に船を横たへて、初頭比古の神、起立比古の神、立世比女の神、天晴比女の神の四柱と共に上陸し、老松生ひ茂る磯邊の波打際を、心地よげに見はるかしながら御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神に會はむと山川や

海原渡り此處に來つるも

打ち寄する磯邊の波の白々と

日に輝けるさまの清しき

八千尋の底ひも知らぬ波の上を

安く渡りて此處に着きぬる

常磐樹の蔭に憩へば海を吹く

風の響きのさわやかなるかな

御子生みの業を思ひて朝夕を

われは苦しき旅にたつかな

この島は葭草茂り曲津神は

あなたこなたに潛まへるらし

この島は朝霧比女の知食す

聖所と思へば何か嬉しき

天津日は松の梢にかかりつつ

われに涼すずしきかけをたまへり
□

初頭うぶがみ比古ひこの神かみは歌うたふ。

□
わが公きみの御供みともに仕つかへて種々くさくさの

貴うづの功いさをを仰あふぎけるかな

波なみの音松おとまつの響ひびきもわが公きみの

功いさをを清きよく稱たたふべらなる

曲津見まがつみの右みぎや左ひだりにあれ狂くるふ

山川海やまかはうみをわたり來こし公きみ

萬世よろづよの末すゑの末すゑまで輝かがやかむ

朝香あさかの比女ひめの貴うづの功いさをは

百千鳥ももちどり鳴なく音ねを聞きけば喜よろこびを

包つつみて公きみを待まちわぶるがに見みゆ
□

起立比古の神は歌ふ。

高たか光みつの山やまを天あも降りし御み樋ひ代しろの

神かみの功いさをにしたが従したがひ來きにけり

顯あきつ津つ男をとこの神かみも喜よろこび給たまふらむ

御み樋ひ代しろ神かみの清きよき心こころを

果はてしなき山やま川かは海うな原ばら渡わたりまして

神かみの神み業わざに仕つかへます公きみよ

御み樋ひ代しろの神かみの雄を々をしさに勵はげまされ

弱よわき心こころも起おきたつ立たつの神かみわれは

國くに土わが稚よしき葭はら原はらの國くに土にも起おきたつ立たつの

神かみの功いさをの現あらはる時ときよ

高たか光みつの山やまを遙はるかに見み渡わたせば

紫むらさきの雲くも棚たな曳なびきて居をり

紫の雲の邊りは朝霧比女の
永遠にまします青木ヶ原か
われも亦青木ヶ原の清庭に
詣でて四方の國形見まほし

立世比女の神は歌ふ。

御樋代の朝香の比女に従ひて

珍しみ渡るも海原の波

種々の曲神等を言向けて

國土拓きましし神の雄々しさ

天降ります神の功もたつ世比女

うかがひまつりて涙こぼるる

松を吹く風の響きの清しさに

旅たびの疲つかれも忘わすらえにけり

波なみの上へを右みぎに左ひだりに飛とびかへる

鷗かもめの翼つばさの光ひかる晝ひるなり

光ひかり闇やみ行き交かふ海原うなばら渡わたり來きて

今いま松浦まつうらの港みなとに着つきぬる

松浦まつうらの港みなとの眺ながめ清すがしもよ

目路めぢの限かぎりは白砂しらすな白波しらなみ
□

天晴あめはれ比女ひめの神かみは歌うたふ。
□

天地あめつちの晴はれ渡わたりたる此この眞晝まひるを

嬉うれしきかもよ港みなとに休やすらふ

西空にしそらをふりさけ見みれば黒くろき影かげ

翼つばを搏うちて進すすみ來くるかも

次々に形大きく見えにつつ

翼の音の轟き聞ゆる

天晴れ天晴れ鳥にはあらぬ神々の

乗らせ給へる磐樟船かも

朝香比女の神は、右手を高くさし上げ日光を遮り、御空を見渡し給へば、天の鳥船は西空をかすめて空気をどよもしながら、松浦の港をさして降り来るあり。その勇ましき姿を見て、御歌詠ませ給ふ。

天晴れ天晴れ天の鳥船降り来ぬ

われを迎ふる使なるらむ

朝霧比女神の神言の遣はせし

吾等を迎への御船なるらし

かく歌ひ給ふ折もあれ、松浦の港の眞砂の上に、鳥船は靜かに鳴りを鎮めて降り來る。

初頭比古の神は驚きながら歌ふ。

珍しき御船なるかな雲の上を

渡りて來ます神のありとは

波の上を渡る御船はわれ知れど

空行く御船は知らざりにけり

主の神の貴の言靈幸はひて

空行く船は造られにけり

起立比古の神は歌ふ。

珍しき御船なるかな千早振る

神代もきかぬ天の鳥船
鳳凰の翼に乗りし神ありと
聞けども空の御船は聞かず

立世比女の神は歌ふ。

御樋代の神の御供に仕へ来て
今日珍しき御船見しかな

天晴比女の神は歌ふ。

久方の晴れたる空をどよもして
天晴れ鳥船降りましけり

斯く歌ふ折もあれ、大御照の神を先頭に、朝空男の神、國生男の神の三柱は、
莞爾として鳥船を下り、靜かに朝香比女の神の御前に進み寄り、最敬禮を爲し、
次ぎに供の四柱の神に目禮し、鳥船を指さしながら、

御樋代の朝香比女神迎へむと

高光山を降り來しはや

朝霧比女神の神言を畏みて

公迎へむと雲路をわけ來つ

願はくばこれの御船に召しませよ

高光山に送りまつらむ

朝空男の神は歌ふ。

久方の高照山ゆ天降りましし

御樋代神のよそほひ畏しかしこ

朝霧比女神は八柱御樋代のあさぎりひめかみ

神の出でまし待たせ給へりかみ

鳥船を造りてわれは來りけりとりふね

いざや召しませ堅き御船よめ

國生男の神は歌ふ。くにうみをかみ

國生男神はわれなり高光のくにうみをかみ

山に仕へし司神ぞややま

朝香比女神の神言は御光にあさかひめかみ

いませばわが國照らさせ給へくにて

久方の雲井を渡るこの船はひさかた

海ゆく船に勝りて安けしうみ

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代神の厚き心を諾ひて

御船の力に聖所にのぼらむ

珍しき天の鳥船眺めつつ

主の大神の功をおもふ

久方の雲路を分けて来りましし

神の雄々しき心を稱へむ

初頭比古の神は歌ふ。

わが公の御供に仕へ此處に来て

空の御船に上る樂しさ

未だ國土は稚しと聞けど葭原は

かく拓ひらけしか驚おどろきにけり
空そらをゆく御船みふねの功いさをし著ければ
高たか光みつ山やまも安やすくのぼらむ』

起立おきたつひこ比古かみの神うたは歌うたふ。

初はじめての空そらの御船みふねに身みをまかせ
下界げかいを見みつつゆくは樂たのしからむ』

立世たつよ比女ひめの神かみは歌うたふ。

比女ひめ神がみのわれにはあれど鳥船とりふねに
乗のりて進すすむと思おもへば嬉うれし』

天晴比女の神は歌ふ。

□ 天地の晴れ渡りたる今日の日

空ゆく船は清しかるらむ

大御照の神は歌ふ。

□ いざさらば朝香比女神初めとし

四柱神も乗らせ給はれ

ここに主客八柱の神は、翼強き廣き鳥船に身を托し、松浦港より中空高く舞ひ
上り、下界の山川海原を見下しながら、高光山の頂指して、雲井の旅を続けさせ
給ふ。

朝香比女の神は、眼下の國形を見下し給ひて御歌詠ませ給ふ。

☞ われこそは御空を伊行く鳥なれや

山川ことごと目の下に見つ

山も野も大海原もありありと

わが目の下に輝きにけり

草枕長の旅路も今日こそは

雲の枕となりにつらしな

この國土に火種ありせば葭草や

水奔草を焼きて拓かむ

幸にわれは燧石を持ちにけり

御槌代神に土産をすすめむ

雲路分けて進むわれ等は樂しけれ

翼は早く羽音清しく

大御照の神は歌ふ。

☐ 朝香比女心安けくましませよ

エアポケットは数多あれども

吹き来る風に向つて鳥船の

進む羽音の勇ましきかな

久方の御空に見ゆる高山は

主の神まつれる聖所なるぞや

朝空男の神は歌ふ。

☐ 御樋代神の朝香比女

迎へまつりし鳥船は

雲井遙にかきわけて

空へ空へと進みつつ

高光山の聖場に

コースをとりて進むなり
吹き來る風は強くとも
黒雲の峰包むとも
如何で怖れむ主の神の
貴の神言を被りて
進む道に曲はなし
エアポケツト多くとも
二つの腕に覺えあり
如何なる難處も乗り起えて
所期の目的達せむと
神を祈りて進むなり
眼下に見ゆる湖は
豫讚の國にて名も高き
火炎山の陥落に

新あらたに生うまれし水鏡みづかがみ

月日つきひを浮うかべて輝かがやけり

遙はるか彼方あなたを見渡みわたせば

水上山みなかみやまの聖場せいぢやうは

厚あつき紫雲しうんに包つつまれて

國くにの秀ほ見みゆる清すがしさよ

葭草よしぐさ茂しげり水奔草すいほんさう

處ところ狭せきまで群むらがりて

鬼おにや大蛇をろちのひそみたる

荒野あらのヶ原がはらを目めの下したに

廣ひろく展開てんかいなしにつつ

御樋代神みひしろがみの降臨かうりんを

仰あふぎて待まてる思おもひあり

ああ惟かむながら神かむながら々々

高^{たか}光^{みつ}山^{やま}の頂^{いた}は^{だき}

次^し第^{だい}々^し々^{だい}に近^{ちか}よりて

青^あ木^をヶ^が原^はの聖^{せい}場^{ぢやう}に

建^たてる御^{みや}館^か薨^{いら}まで

いとありありと見^みえにけり

あ^かあ^む惟^{ながら}神^{かむ}々^{ながら}々^{ながら}

神^かの守^{まも}りの尊^{たふ}さよ。

半^{はん}時^{とき}の^の後^ちには貴^{うづ}の聖^{せい}場^{ぢやう}に

安^{やす}く着^つきなむ御^{みや}樋^{しろ}代^が神^がよ
『

八^や重^への雲^{くも}路^ぢを分^わけながら、其^その日^ひの夕^ゆご^ろろ、大^お御^ほ照^みの神^かの操^あれる鳥^{とり}船^ふは、青^あ木^を

ヶ^が原^はの聖^{せい}場^{ぢやう}に御^{みや}樋^{しろ}代^が神^がを伴^{とも}ひまつり、安^{やす}く静^{しづ}かに着^つきにけり。

高^{たか}光^{みつ}山^{やま}の司^{つかさ}等^{たち}は兩^り手^{やうて}を高^{たか}くさし上^あげ、「ウオーウオー」と鬨^{とき}をつくりて歡^{くわん}迎^{げい}の意^いを表^{へう}しける。

(昭和九・七・三一 舊六・二〇 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第二三章 野^の火^びの壯^{さう}觀^{くわん}〔二〇二七〕

高^{たか}光^{みつ}山^{やま}の聖^{せい}場^{ぢやう}は、御^み樋^ひ代^{しろ}神^が朝^{あさ}香^か比^ひ女^めの神^{かみ}の降^{かう}臨^{りん}に俄^{には}か輝^{かが}き漲^{みな}り、青^あ木^をヶ原^{きはら}の神^み苑^{その}は瑞^ず雲^{あうん}棚^{たな}引^びき、新^{しん}生^{せい}の氣^き四^し邊^{へん}に漂^{ただよ}ふ。

朝^{あさ}霧^{ぎり}比^ひ女^めの神^{かみ}は、八^や尋^{ひろ}殿^{どの}に朝^{あさ}香^か比^ひ女^めの神^{かみ}一^{いつ}行^{かう}を招^{せう}じ、心^{こころ}の限^{かぎ}り歡^{くわん}待^{たい}を盡^{つく}し、高^{たか}光^{みつ}山^{やま}の名^{めい}物^{ぶつ}たる、露^{つゆ}も滴^{した}らむばかりの熟^うれたる杏^{あん}の實^みを山^{やま}の如^{ごと}く積^つみ、木^ぼ瓜^けもて造^{つく}りたる美^び酒^{しゆ}を獻^{たて}まつ、こゝに大^{おほ}御^み照^{てら}の神^{かみ}以^い下^かの重^{ぢゆう}臣^{しん}はじめ百^{もも}の神^{かみ}々^が集^{あつ}りて、大^{だい}宴^{えん}會^{わい}は開^{ひら}かれにける。

朝^{あさ}霧^{ぎり}比^ひ女^めの神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

八柱やはしらの御樋みひしろ代神がみの出いでましに

これみそのの神苑よみがへは蘇よみがへりたり

はろばろと波路なみぢを渡わたり雲くもを分わけて

朝香あさかの比女ひめは出いでましにけり

高光たかみつの館やかたに仕つかふる神々かみがみも

朝香あさかの比女ひめの御稜みいづ威讚たたへよ

八柱やはしらの御樋みひしろ代神がみの中なかにして

勝すぐれ給たまへる朝香あさか比女ひめ神がみよ

朝香あさか比女ひめの神かみの神言みことに物もの白まをす

美味うましく果物くだもの御酒みきを召めしませ

此酒このさけは木瓜ぼけにて造つくりこの杏ももは

高光たかみつ山の譽ほまれなりけり

山やまたか高く清水しみづとぼしき此山このやまに

尊たふときものは果物くだものなりけり

朝香比女の神はこれに答へて、

□ いろいろの心盡しのうましもの

かたじけな
辱みてよろこび食まむ

くさまくらたび
草枕旅を重ねてうるはしき

けふ
今日の宴にあひにけらしな

かみがみ
神々の清き心の味はひと

よろこ
喜び吾は戴かむかも

よも
四方の國見晴らすこれの聖所の

うたげ
宴に臨む吾は嬉しき

とりふね
鳥船のいさをによりて遠き道

さか
嶮しき山を安く來つるも

おほみてらし
大御照の神は歌ふ。

☪ 御樋代の神に仕へて朝夕を

言靈宣れる大御照われは

大御照神の名告りはありながら

心のくらし吾恥かしも

百日日の楔重ねて漸くに

心の光照り初めにけり

初頭比古の神は歌ふ。

☪ 思ひきや高光の山の尾根高く

かかる宴にわれあはむとは

神々の心づくしの御酒に酔ひて

吾身體は赤らみにけり

身體もみたまも清く蘇る

此御酒御饌は神の賜物

豊御酒を赤丹の穂にと聞食し

勇み給へよ朝香比女の神

朝空男の神は歌ふ。

はろばると雲路を分けて迎へてし

朝香の比女の光り尊し

御光の神は神苑に天降りましぬ

今より葭原の闇は晴れなむ

四柱の御供の神の此の苑に

天降りいまして御酒召しますも

今日の如めでたき吉日なかるらむ

御樋代神を迎へ奉りて

起立比古の神は歌ふ。

見はるかす四方の國原天津日に

輝きにけり錦映えつつ

葭草か水奔草か知らねども

尾の上より見る野邊は錦よ

兔に角にめでたき事の限りかな

御樋代神の二神いませば

芳しき御酒御饌に飽きて吾は今

蘇りけり身體みたまも

國生男の神は歌ふ。

かかる世にかかるめでたき例ありと

吾^{われ}は夢^{ゆめ}にも思^{おも}はざりしよ
雲^{くも}路^{ぢわ}分^わけて迎^{むか}へ奉^{まつ}りし神^{かみ}々^{がみ}と

これ^{この}の清^{すが}殿^{どの}にいむかひ居^ゐるかも

今^け日^ふよりは葭^{よし}原^{はら}の國^{くに}土^に隈^{くま}もなく

御^み樋^ひ代^{しろ}神^{がみ}のいさをに開^{ひら}けむ

神^{かみ}々^{がみ}よ御^み酒^き聞^き食^こせ御^み饌^けを召^めせ

面^{おも}ほてるまで腹^{はら}ふとるまで
』

立^た世^{つよ}比^ひ女^めの神^{かみ}は歌^{うた}ふ。

女^め神^{がみ}吾^{われ}も御^み供^{とも}に仕^{つか}へて高^{たか}光^{みつ}の

山^{やま}の尾^をの上^へにのぼりけるかな

高^{たか}光^{みつ}の山^{やま}の聖^{すが}所^とに導^{みちび}かれ

貴^{うづ}の眺^{なが}め^に解^とけ入^いりにけり

果てしなき遠の廣野を見渡せば
神の力のいみじきを思ふ

子心比女の神は歌ふ。

懐に御子を抱ける吾なれど

許させ給へ子心比女の神を

此御子は水上の山の國津神の

美し御子なりわれ育みつ

めでたかる今日の祝ひの狹蓆に

仕へて樂し女神の吾も

再び朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。

朝霧比女の厚き心のもてなしに

みやひの言葉吾なかりける

葭原の國土の寶とまゐらせむ

火種を保つ此燧石を

此寶一つありせば葭原の

國土清まりて永久に開けむ

朝霧比女の神は雀踊りしながら満面に笑みを湛へ、御歌詠ませ給ふ。

ありがたし國土の寶と燧石

吾に賜ふか朝香比女の神

火炎山火種を得むと村肝の

心を長く碎き來にけり

鬼大蛇火炎の火口を守りつつ

くに 火種を取らせざりけり

くわえんざん かんぼつ
火炎山 陷没なして湖となり

ひだね
火種の失せし淋しき國なりき

あさかひめ
朝香比女の神の賜ひし燧石は

このよしはら
此葭原の永久の寶ぞ

ここに 朝霧比女の神は、燧石を恵まれたる嬉しさに、大御照の神に命じ、諸々の
神等を従へ、天の鳥船に搭乘させ、燧石をもちて地上に降らしめ、風に乗じて葭
原に火を放たしめ給ひければ、折から吹き来る旋風に、火は四方八方に燃え擴が
り、猛獸毒蛇、水奔草、葭草などの原野は忽ち火の海となり、其壯觀譬ふるに物
なかりけり。

あさぎりひめ
朝霧比女の神は、高光山の 高殿より此光景をみそなはし、御歌詠ませ給ふ。

あさかひめかみ
朝香比女神の恵の燧石に

わが國原はあらたまりゆく
炎々と四方に擴がる野火の煙の

赤きを見れば樂しかりけり

曲鬼も醜の大蛇も醜草も

眞火の力に亡び行くかも

今日よりは眞火の力に葭原の

國土を美しき聖所となさむ

朝香比女の神は此光景を見、嬉しげに歌ひ給ふ。

年を経て老い茂りたる葭原の

葭はもろくも焼かれけるかな

濛々と立ちたつ煙見てあれば

國土の禍消ゆる樂しさ

斯^かく歌^{うた}ひ、互^{たがひ}に野^の火^びの燃^もえ擴^{ひろ}がる光^{くわう}景^{けい}を^みて、神^{かみ}々^{がみ}は「ウオーウオー」と歡^{くわん}聲^{せい}
を^{たま}あげ給^{たま}ひける。

所^{ところ}へ數^{あまた}多^たの從^{じうしん}神^{しん}を^{のこ}殘^{のこ}し置^おきて、大^{おほ}御^み照^{てらし}の神^{かみ}は、再^{ふた}び鳥^{とり}船^{ふね}に^の乘^のり此^{この}場^ばに歸^{かへ}らせ給^{たま}
ひ、眞^ま火^ひのいさをしのいやちこなる事^{こと}を^うま^ま怜^らに委^つ曲^{ばら}に奏^{そう}上^{じやう}し給^{たま}ふ。

葭^{よし}原^{はら}に眞^ま火^ひを^{はな}放^{はな}てば風^{かぜ}立^たちて

見^みる見^みる醜^{しこぐさ}草^や焼^やけ失^うせにけり

醜^{しこぐさ}草^なの中^{なか}に潛^{ひそ}みし曲^{まが}鬼^{おに}も

獸^{けもの}大^{をろち}蛇^ちも暑^{あつ}さに悶^{もた}えし

かくならば猛^{たけ}き獸^{けもの}も曲^{まが}鬼^{おに}も

大^{をろち}蛇^ちも棲^すまず安^{やす}く開^{ひら}けむ

神^{かみ}々^{がみ}を四^よ方^もに遣^{つか}はし松^{たい}明^{まつ}を

つくりて眞^ま火^ひを^{はな}放^{はな}たしめしはや

見^みるうち^に醜^{しこぐさ}草^{はら}原^は焼^やけ盡^つきて

目路めぢの限かぎりは灰はひの野のとなりぬ[㊦]

朝霧あさぎり比女ひひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ ありがたし眞火まひのいさをに葭原よしはらの

國く土にあたら新しく生きて榮さかえむ

この燧石ひうち國くにの寶たからと永久とこしへに

主スの大神おほかみの御殿みとのに祀まつらむ

土阿とあの國くに土にも豫讚よさの國原くにはらも今日けふよりは

曲神まがみのかけを留とどめざるべし[㊦]

茲ここに山上さんじやうの宴會えんくわいは終了しうれうし、朝香比女あさかひひめの神かみの一行いっかうに厚あつき感謝かんしゃの辭じを述のべ、松浦まつうらの
港みなとまで朝空男あさぞらをの神かみ、國生男くにうみをの神かみをして鳥船とりふねを操あやつらせ、御樋代神みひしろがみの一行いっかうを安やすく送おくり
ける。

朝香比女の神は、雲路を分けて半日のコースを経て、安々と松浦の港に着き給ひ、御歌詠ませ給ふ。

珍しき船に乗せられ雲路はるか

渡りて安く此處に来つるも

御樋代の朝霧比女にわが言葉

傳へ給へよ安く着きぬと

御樋代の神の御言葉まつぶさに

朝霧比女の神に傳へむ

と朝空男の神は、國生男の神を後に残し、鳥船に乗り中空高く歸りける。

ここに朝霧比女の神は、朝香比女の神の好意に報いむとして、鳥船造りに功ある國生男の神を御供に仕ふべく遣はし給ひたるなり。

これより一行六神、駒諸共御舟に浮びて、西方の國土さして出で給ひける。

(昭和九・七・三一 舊六・二〇 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

靈界物語 第八〇卷 天祥地瑞 未の卷

終り